
WORLD OF GARNET CROW

花咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORLD OF GARNET CROW

【Nコード】

N5628R

【作者名】

花咲夜

【あらすじ】

芸術家は、海を目指して魚と泳いで行く。

王様は、空を夢見て猫と戯れ遊ぶ。

魔法使いは、世界に憧れ鬼と旅に出る――。

目的のある者達、目的地のある者、目的地のない者、複雑なようで単純、繋がった運命のように絡み合う、彼らの物語。

アーティスト『GARNET CROW』の素晴らしき詩歌達を題材にしたファンタジーストーリー――！

001 Jewel Fish

また、君に恋をするんだね

その約束を心に抱いて、
今も僕は、Jewel Fishの暮らす『海』を目指しているよ

宝船宝は空を見上げて初めて気づいた。

そのツタの生い茂る古びた小屋の拵えられた小さな階段に座って、
外の緩やかな風に当たりながら。

自身がカッターナイフで削りながら創られている、とある芸術作
品に、小さな一雫が落ちたことにより気づいた。

「……通り雨、かあ……」
と。

ゆったりとした口調で微笑みながら穏やかに言う青年。

その緩んだ顔に残る少しのあどけなさから少年と描写しても良い
具合の青年。

整った金髪が流れる痩身麗句を包むは黒を特徴とした装飾服。

太陽と雨が映ったその碧い瞳はまるで海のようなだった。

「一休みしている内に足止め食らっちゃったなあ……ねえナナコ。
雨、止まないかな？」

動かしている左手を止め、横に目をやりながらそう言った彼の隣
には、小さな女の子がちょこん、と座っていて、膝に乗せた真っ白
いノートパソコンのキーをカタカタとまるでピアノでも弾いている
かのように楽しそうに打鍵していた。

黒いリボンがあしらわれている大きめのその白い帽子から垣間見えるハネツ毛な黒髪。

その帽子と見合った真つ白でフリルの付いたワンピース。

そこから覗く小さな両足を包む白い靴。

大きくぱつちりとした蒼い瞳。

高揚しているのか紅く染まった頬、その矮軀からしてまだ幼い少女。

そして首には、それらと不格好な、明らか場違いな、少々錆びついた鎖付きの首輪。

ナナコと呼ばれた彼女は瞳をキラキラと輝かせ、叫んだ。

「うん！ このベイクドなチースケーキもスフレも苺のケーキも全てカートに入れて良いんだね、タカラ！ はうとううう、ナナコは世界一幸せ者だね！ タカラの芸術の才を見抜いた上に弟子入りのための試験も一発合格つ、タカラはナナコに名前をくれたしナナコも一緒に『海』へ連れて行ってくれるし本当に極上で秀逸な良い尊師を持ったとナナコは思うよ！ これからもご指導ご鞭撻の程宜しくしたいな、そうそう、雨と言えば、この雨は天気雨、狐の嫁入りとも言っね！ でもだいじょうぶ、この雨はすぐ止んで、今日の夜はとてもよく晴れて、星がよく見えるんだって、わあ、ロマンチックだねえ、タカラ！」

相変わらずよく喋る娘だな、と宝は思った。

彼女——魚々子^{ななこ}は、その花が咲いたような屈託のない笑みを浮かべてウキウキとニコニコと超絶ハイテンションで心を躍らせている。

しかも喋れば跳ねるので下の木がギシギシと音を立てて、少し不安になる。

「この雨が川となって、流れる川は全て『海』に繋がるらしいよね、まるで全ての道はローマへ通じる、みたい！ この21世紀に『海』を見たことある人なんて然ういないよ、きっと王様くらいだね！ タカラの瞳の中の色みたいな色をしているんだよね。有り体に言えば、空の色？ わあ、『海』なんて未知の世界だね、本当に在

るのかな、『海』って！ もしもあつたとしたら、感慨無量だよ！
3 回回ってニヤーと鳴くよ！」

「はは、相変わらずナナコは面白いな……でもね、うん、在るよ、『海』は」

喋る度にジャラジャラと鳴るその鎖の上の笑顔を持つ彼女へ、そう、落ち着いた口調でタカラは言った。なぜだかその言葉には強い意志を感じることのできるとも芯のある声色だった。雨音の鳴る屋根の下、遠くの青い空を見つめ、太陽の眩しさに少し目を細めながら、そう言った。

「あの子と約束したんだ。夢を描くなら2人が良いつて、待ち合わせは波の向こう、またそこで逢おうねつて、『海』へ行こうつて。それに」

「さいですかさいですかあ。恥ずかしいなあ、面映ゆいレベルだよ。なんていうか、師匠は予て社会人になつても若気の至りが抜けないね！ 心若いつて言うのかな？ 成る程成る程、見た目は大人中身は子供なんだね。得心いったよ。この世界中で噂の的でもあり都市伝説以上に幻の大地、『海』は存在するんだね。あ、大地つて、言うのかな？ ううん、そんなことより、本当に丸くなつたよね、タカラは。出会った頃なんてさ、あの日、あの日だよ、目が吊り眼、すっごく怖かった！ 食べられちゃうかもって思つたくらいだったよ。オーラとかもドス黒いしほんと初対面は悪辣で陋劣な印象を持つたくらいだし、なんていうか、荒れてたよね！」

「ええ、そうだったっけ」

マイペースすぎる魚々子のお喋りで宝の話は切られ、しかも途中でツツコめず、後半への解釈通りだったらしいのか否か、その青年は、有り得ないほどありふれたその笑顔でそれを拒み、先程の続きを、言った。

「それにまあ、ナナコが存在している時点で、『海』があるって結構確実なことなんだよ……？」

あの日。

あの子は悪い子だった。

何時も傘を差している、傘の似合うあの子。

雨粒が太陽で光るアスファルトの上で。

まだ信号は赤だったのに。

待ちきれないと飛び出して、走り出して、僕の横を駆けて行ってしまった。

信号が変わる一瞬の間に、僕たちは離れ離れになってしまった。

傘が、空高く、舞った。

僕は止められなかった。

雨は止んだのに。

時が止まってしまったあの子は、何処へ行ってしまったのだろう。

……そうだ。

きつと、約束の場所の、『海』だ。

あの日。

僕がフラフラと『そこ』を目指して歩いていて、赤信号で足を止めた時、隣にいた彼女——魚々子と出逢った。

実際出逢った時はお互い、何かを感じた筈で。

偶然、そこは大きな交差点で。

偶然、全ての信号は赤になり。

偶然、通り雨が空を覆っていて。

偶然、僕と魚々子は目が合った。

その、酷く死んだような、死んでいるような、この世に生きていないような虚ろな瞳めと。

その瞳に僕が歪んで映えていた。

その瞳は輝きを失っていて。

その瞳は希望を持っておらず。

目は口ほどにものを言うというように、口より目と耳の方が多いから、喋るより見たり聞いたりする方が大切だというように、その

目は訴えかけるように言っていた。

“――……たすけて”

……。

そういう風に、勝手に、僕は感じ取ったので。

堅固な鉄格子の檻が、大いに邪魔だったので。

丁度、ムシヤクシャしている最中だったので。

僕は、その見世物小屋のトラックが青信号に変わったのと同時に走り出した瞬間、僕はそのトラックを、思いっきり足で蹴っ飛ばしてやった。

配慮しておくが、僕は人間である。

ただの、人間で、ただの芸術家である。

運良く。

運良く、僥倖な巡り逢いだった。

運良く、トラックは宙を浮き、その震動で鉄格子が曲がった。

運良く、彼女はその壊れた鉄格子の隙間から外へ投げ出され、運

良く、広げた僕の腕の中へと着地した。

僕の胸の中で震える彼女には、

その白い肌に所々、宝石の様に輝く鱗のようなモノがあり。

その黒髪や何も纏っていない小さな身体はずぶ濡れで。

その錆びた鎖付きの首輪よりも更に目を惹いたのは、頭部にある人間の耳の形をしたモノではない、何か、尖った、鮮やかなグリーングリーンの耳のようなモノで、衰弱した腰から下にあるはずの足が無く、代わりにこれまた鮮やかな尾ビレが2つ存在していた。

驚いたことに、彼女は、マーメイド“人魚”だった。

人魚。

……『海』に棲むと……言われている？

そして、彼女は記憶を喪失していた。
自身の名前も。

何処から来たのかも。

自分が、人魚であるということも。

何故見世物小屋のトラックにいたのかも。

そして、自身の故郷であるはずの、『海』のこと……。

だから、魚々子と共に『海』を目指すことになった。

本当はあの子と目指していたけれど。

けれども、『海』へ行けば、あの子に逢える。

だから。

いつか。

「生まれ故郷に帰ればキミも、大海へ出て暮らせるよ」

「も？」

「も」

あの子と同じ、『海』。

僕と同じ目的場所の、『海』。

アスファルトが濡れて、僕らを鮮明に映しだしていた。

そして運良く、その大きな交差点にトラック以外の車や人影は、
なかった。

そんな感じで、回想終了。

現実逃避しても見えない、面影は成長しないけれど、魚々子あ
の日から比べれば、180 回転しすぎである。

なんなの、その超元気っ子。

でもまあ、悪い心地より、良い心地がするので、良しとする。

「んー、でもタカラ、ごめんね？」

「……ん、何が？」

珍しく口数の少ない魚々子。かなりしゅーんとしている。かなり
可愛い。

「ナナコは雨に濡れるだけでも人魚になってしまってから、本当に、済まないなって思ってる、恐縮至極に存じてるんだよ。ナナコもそうだけど、タカラは一刻も早く『海』へ出たいのに、ナナコなんか本当に足枷、足手纏いだよ。晴れの日ならサクサク行けるのに、この世界は雨が多いから、それで立ち往生してしまうし……自分で言うのも何だけど、ナナコはマジに人魚だから、旅路を邪魔する人達が方図無いしね……それに」

「ナナコ」

今度は僕が、ゆつたりと魚々子の言葉を切った。

この子のことだからかなりの謝罪文と平身低頭なノリが続くかもしれない。幾重にもそんな言葉が乗つかれば僕も沈んでいく可能性がある。

だから宝は、出来る限り明るい声で、前向きに行こうと思った。

「雨の日は雨の日の、晴れた日は晴れの日の過ごし方で良いんだよ」肩掛け鞆にカッターナイフや諸々を詰めながら言った。

「世界の何処にいたって僕らは星屑よりも小さいんだ、小さすぎるんだ。この星様に、万物や自然に、人間が勝てるわけ無いだろう？人間が勝てないなら、全ての生物だって勝てない、尚更だ。だから従って生きていくしかない」

そして。

今やっと、いつの間にか晴れた青空を仰いで、

「でも、大きすぎる夢は見れるんだ」

その軒下から出て、太陽の光をめいっぱい浴びて、クルリと後ろを振り向き、魚々子へ言った。

「さあ、『海』へ行こう。キミがいないと僕の旅は始まらないし、終わらせることも出来ない。ナナコがいないとダメなんだよ。一緒に来てくれないか？」

「……………」

「僕はキミを助けた。だからとではないけれど、キミも僕を助けてくれ。この旅を始める時に、僕がキミに頼んだあの、僕の望みを叶

えておくれよ。そして、キミは、『故郷』へ帰っておくれよ」

「……………」

「僕の望みは、あの子へ僕の想いを伝えること」

「……………」

「届かない愛を胸に抱いていて、生きてきた証に変えてゆけると思う？」

突然の、その宝からの有り体な問いに、突然に、魚々子は無邪気に、ノートパソコンを畳み、その足で力強く立ち、帽子を被り直し、あどけない笑みをこぼしながら、また短い言葉で相鎚を打った。

「全っ然、思わない！」

「よし、じゃあ、先ずは、この砂漠を越えていかなければね」

と、目の前に広がる砂、砂、砂、何もない砂の広がる砂漠を指さす。魚々子も、その一休みに使っていた古びた小屋の軒下から外へ出た。

ギラギラと太陽が照り差し、植物も生息せず、降水量よりも蒸発量の方が多い、世界でも多い方だがあまり類の見ないその地、アネク砂砂漠。メネ

「エジプト神話に登場する神でセトっていうエジプト九柱の神々の一柱がいるんだけど、砂漠と異邦の神なんだって！ お祈りとかしておけば、無事に竜巻とかに遭わずに越えてゆけるかな！ ん、うーん、でも神様はいつも私たちをご覧になって采配っているから、あまり意味ないかな？ いやいや、物事に意味のないことなんて無いよね、タカラ！ それにしてもほんとに砂漠に雨なんて降るんだね！」

「うん、なんたって、通り雨だからね。砂漠だって通るよ」

あっけらかんと言う宝の前に、呆然とした笑顔の魚々子がいた。その、砂漠もゆく彼女のシルエットは、また可愛らしいものだった。小さな水たまりは、オレンジ色に染まりかけていた。

いつか少しでも、
河魚かなのいない、
あの子のいない、これからの日々
に優しくなれるように。

引き金は腕の中で。

宝が、魚々子に頼んだ彼の望み。
それは――

“
B u r y a t s e a .
B u r y a t s e a f o r m e
……”

彼を、海へ沈めること。

“――水葬すいさうしておくれ”

……たいていの文学作品でもそうだが、人魚が最期まで幸せに生きた、という試しは、あまりない……。

……。青年は、その宝石のような魚と共に、海を目指して、泳いでゆく

001 Jewel Fish（後書き）

この曲は、

私がGARNET CROWの中で1番好きな曲なんです！

爽快で明るい曲ながらも

最後の“Bury at sea for me”にはゾッと
してしまいます。

100曲以上もあるGARNET CROWの歌は、どれも素敵
で順位なんて付けられません！

みんな大好きです！

七さんもゆりっぺもおかもっちもゴツドハンドも大好きです！

こんな感じで、これからもお付き合い宜しくお願い致します！

002 日々のほとり（前書き）

前置き。

この作品はあくまで私の創造ですので。

七さんの世界観と異なる場合がございます。

ご了承よろしくお願いいたします。

002 日々のほとり

主人に手を引かれ、歩いていたこの道。
あなた

“ 遙か大きなこの空を舞うあの鳥達は、

迷わず皆、同じ海へ帰るんだよ ”

教えてくれたそのことを、その優しい声をずっと、私は今でも、
覚えている……—。

その夕暮れ。

その巨大な水たまりに、その景色は似付かわない。

その畔に聳え立つ石造りの堅固な城壁が連なるその白亜の城は、
その陽で赤く優しく染まっていた。

その一角の、高い高い天守に、その瞳に赤を宿している者2人。

彼等は正に、あべこべな2人だった。

その小柄な方の影は、漆黒の瞳、あどけなさの残る幼い、子供の
ような——10歳位の容姿、だがその表情にはどこか大人びていて
閑雅な雰囲気を持っており、漆黒の髪には金色の小さな王冠があっ
た。

そのまだ若過ぎるくらいの少年の頭2個程の背の影、キラキラと
輝いているパッチリとしているツリ目、というか猫目、ウェーブの
かかった青い色のセミロング、スレンダーで長い手足がよく窺える
……一見野性的な服装、大人っぽい——20歳位の容姿、だがその
表情はどこか子供のように無邪気な女。

その見た目だけ大人過ぎる女は短くゆったりと口を開いた。

「 じゃあ、王様 」

「 なんだ、猫^{ネコ} 」

その——王様などと呼ばれた彼も短く口を切った。

まだまだ舌つ足らずで背伸びをしている口調。そしてやはりどこか、まだまだ年に相応しない落ち着き。

猫。

猫と呼ばれた彼女には……その青の中に同じ色の耳、ピンと立った毛並みの美しい猫のような耳があり、そして、何か嬉しいのか、その猫のような尻尾をゆらゆらと揺らしている。

「この王国終わっちゃったにやあ。第2代目国王としてどんな心境にや？ 猫は猫だから解らなんにやっ、にやはっ」

女性の声色で、楽しそうに、悪戯好きなその訊き方。

「この状況で笑うか、猫よ。元気だな。今なお、まだ猫は子供だからな……無理もない。それに、私がこう蕭やかなのも可笑しい話か」その年長者のような、若い若い、その少年。笑みをこぼして、その天守からの眺めを瞳に映す。

その、碧い碧い海のような——巨大な湖に囲まれた王国。湖の周りは、木々と緑と、レンガ造りの小さな家々によって彩られ、生き生きと人々が行き交う盛んで活気のあつた街——。

——は、もうない。

昨日まで、自身が王子であつた王国。

昨日まで、初代国王がいた王国。

昨日まで、平和で優しかった王国。

もうその跡形も欠片もなく、痕跡もなく、ただの不毛の大地と化した湖の周りの景色。

大きな山々。

昨日までと変わらないことと言えば、実際よりも小さくなった白亜の城壁、そして彼等のいる一角の天守、広がる空、そして、風で波が岸边を張り相変わらずその水の奥の真っ白な砂までが見える透き通る湖のみであつた。

夕陽の光で、砂が真っ赤に輝いている。

まるで、あの戦火のように。

その美しい湖に、本当に似付かわしくない、大地。

「心境とか、何の気持ちも湧いてこんよ。王国が滅びたという実感もな。だが……そうだな。只、まだ私は生きているのか、と思っているよ」

「そかにや。それにしてもにやんだろにや。風が気持ちいいにやあ。今は、昨日のように平和だにやあー」

そう、身体全体で伸びた後、少しづつ微睡む猫を見つめる王様。

……遠く見つめていた2年前より、あの日より、昨日より、臆病になっているのかもしれない。

湖の畔で、密かに彼は思っていた。

密かに猫のことを、想っていた。

初めて出会った2年前から。

王国が始まった2年前から。

妃が亡くなった2年前から。

街の一角に棲んでいた、彼女に。

……いやいや、いくら何でも、年に差がありすぎるだろう。

そういう考えがあるところ、まだまだ彼は子供らしい。

それにきつと猫は、初代王のことを好いている。

知っている。

知ってはいけないことを知ってしまった時。

緩やかな風が吹き抜けて、2人の距離を知った。

何かを知ることが、こんなにも恐ろしいことは……な。

心の中で苦笑していると、右腕に何かが巻き付く感触がした。

「うおう?!」

声が裏返ってしまった。

それ位の驚きだった。頭の上の王冠が落ちるところだった。

くすぐったいのは苦手なのだ。

見ると、猫の長い尻尾がくるくると巻き付いている。その先っぽは、相変わらず揺れていた。そして、彼女とは言つと、その真っ白な長い手をぺろぺろと舐めていた。愛らしい動作だった。

「にゃあー、王様ー王様ー。猫が尻尾を巻き付かせる相手つてのは親愛の情がある奴だけにゃあ」

「ほう。それがどうした」

本当はかなり動揺しているのだが、彼は嘘を吐くのが上手いのか否か、いつも通り平然としている。先程から猫と2人きりというだけでも緊張して頭の中や心臓がパニックを起こしそうだというのに、その敏感な尻尾からの小さな温もりに気づかれぬように装う。

「昔はよくにゃあを追いかけて巫山戯てくれたにゃあ。懐かしいにゃあ」

「確かに、久しいな。そして捏造が混じっている、お前が私を追いかけて回したんだ」

「そーだったかにゃ？ まあまあ、で、話変わって、あれ」

その大きな山々、おびただしい数の、死体の山。

この王国の全ての民の、沢山の屍達。

もう、動かない、ただの山。

それを指さして猫は笑顔で訊いてきた。

「あんなに、初代王様はおらんかったにゃあ。何処にいるにゃん？」
子供がするような、純粋な質問だった。

彼女もまだまだ若い方だ。本当に、無理もない。

「そうだな……」

彼は知っている。

この王国滅亡の理由は初代国王、彼の父親。

その者がこの世から居なくなっただけで、戦いは鎮火した。

破片も、肉さえも、身につけていたモノも、骨さえも、全て消滅した。

何処にも、居ない。

だから。

「空に、いった」

そう、一言だけ言った。

そして、空を仰いだ。雲一つ無い、何もない、空。

空、空。

だから、何もない、空。

きつと、其処にも居ないだろうに。

人は流れの中で、何かをとどめていけるだろうか。

移ろうモノばかりならば、この心をポトリと落としたい。

「猫、お前は何かしたい？」

知っているのに。

猫の気持ちを知っているのに。

「にゃ？ にゃー、そーだにゃあ」

不思議に。

何度もその声を聞きたくて。

「だったらにゃあも、空にいきたいにゃ」

忘れたフリをした。

知っていることを、知らない、と嘘を吐く。

「王様、にゃあは困っているにゃー、助けてほしいにゃつ。——空
に行きたいにゃ」

その無邪気な笑顔。

思考も行動も何もかも子供。

そうだ。

私は、猫の保護者なのだ。

大人が最後まで責任を取るのは、当然だ。

「ならば、旅に出ねばならん」

猫に顔を引き寄せ、静かに言った。

「あらま。そんなに……空は遠いところなのかにゃ？」

「ああ。お前の故郷の辺りだと思惟する」

「遠つ！ てことはおみやあと初代王と歩いてきたあの道をまた逆

戻りかにゃ？」

「そうだ」

「はふわー、たいへんだにゃあー」

欠伸をする猫。

何も知らない、無知な猫。

何でも知っている、嘔吐きな、愚かな王様。
ただ。

ただその嘘は。

その“ぬくもり”をずっと感じていたい。

触れて言葉を交わしたい。

一緒にいたい。

と、とめどなく湖のように溢れてしまう願いが引き起こした私の、
子供のような我が儘に満ちた心。

もう、そのような歳ではないのにな。

「じゃあさつさと行くかによ！　にゃあは早く初代王様に会いたい
にゃ！　猫は夜目が利くんにゃよ」

ハイなテンションの猫。

それでも、もう夕日は沈んでいる。

「残念ながら私は夜目が聞かないのだよ、猫」

「そーなのかによ」

「ああ、だから出発は明日だ。支度もせねばな」

「わかったにゃー。あー、魚とか食べたいにゃー。そーいやあこの
世界、人魚とかいたかによ、美味いのかによ？」

気まぐれで気分屋だけれど、物分かりが良くて素直な彼女。

そんな、微笑む君の傍で見た茜色も、ずーっと僕は覚えているだ
ろ。

彼女にも、覚えていて欲しい。

彼女の心の中の、ほんの少しでも、初代国王への想いの中の“ほ
とり”のようにでも良いから、覚えていて欲しい。

私と同じ事を覚えていれば。

私も同じ事を覚えていれば。

いつか、帰る場所を探す時、猫を思きうだろう。

そういえば、彼女の故郷の近くには、あの幻の『海』があるらし
いな。

そして、白い花が咲き誇り、『海』の匂いが届く場所。

この湖より、広く、大きく、碧い、『海』。

たくさんの雨で創られた存在。

旅の中で、日々は雨のように降り続けて、私と彼女の心に溶け込み広がる、信じている。

「さて」

彼は、小さな蠟燭に火を灯し、小さな紙に何かを書き留め始めた。
「^{にや}何してるにや王様」

「ただの実録さ。この王国は滅びました、というこの王国の短すぎる史実だ。猫、生き残りということ、お前の名も記載してやろう」
「マジかにや！ わーいわーい！ じゃあ、にやあは、猫ということでも可愛い3歳のおんにやのこって書いといてくれにやあー！」
「いいだろう」

「王様はあれかにや？ 20歳という若さにして国王になった凄え王様って書くのかにや？」

「それは一見混乱せぬか？ 確かに私の母方の一族は成長が遅く、猫、お前の種族は成長が普通の人間の7倍と言っただろう」

「んー、じゃあ見た目年齢でいいにやあ。どうせ写真も一緒にあるんにやろ？ 混乱混乱しちゃうにや」

「ならば私はやむを得ん、十、ということに、猫、お前は21だ」

「にやあの方が年上にやあー」

「私の揚げ足を取るとは何事だ」

終わりの遠い旅が始まる。

嘘が入り交じった、真実の旅。

複雑に絡み始める、復讐の旅。

同じ空へ帰ること。

王国を滅ぼした者を見つけ出すこと。

一緒にいるために。

波の音で、この優しい想いが消えないように。

そんな感じで。

目的も。心情も。順序も。表裏も。方向も。

何もかもあべこべに成立する2人。

若すぎる王様と、若すぎる猫。

大人な王様と、大人っぽい猫。

王様と、猫。

王様は、空を夢見て。

恋する王様と恋する猫は、空を夢見てカナタを目指す。

002 日々のほとり（後書き）

この曲は、聴いているといつも涙が出てきてしまいます。

何時の間にか口ずさんでいて……なんて優しい音色なんだろう、と心の底から温かくなります。

王様一途だなあ……猫も一途だなあ。

さて、あと残り1組ですね！

頑張ります！

003 世界はまわると言っけねど

永い夜が、朝が、昼が……すべて、のらりくらり流れゆくよ。
日々をつないでゆくにも、
そうだね、

意志というモノが、必要なのかね……？

昔々、それはそれは美しい魔女様がありました。

血も凍るほどの美しさ。

背筋が痺れるほどの美しさ。

透き通った真つ白な美しさ。

魔法のような美しさ。

世界は彼女を崇拜し、

世界は彼女を称賛し、

世界は彼女に感嘆し、

世界は彼女へ深謝し、

世界は彼女を拒絶しました。

世界の空間の隙間へ、彼女を閉じ込めてしまいました。

世界は今でも——彼女を愛しています。

めでたし、めでたし。

「世界はまわると言うがね」

凜とした、若い女性の声でした。

だがえらくゆっくりとした老婆のような重れた口調。

「^{うめ}汝、世界がまわるとは、どう言う事か、簡潔に述べてみよ。とつとと述べよ」

そこは、何もない空間だった。

何もない、という言葉には少々矛盾点が生じるかもしれないが、ただ、真っ白な世界だけが果てしなく広がっており、時間さえも、共に物体界を構成している基礎概念がない、そんな空間だった。

チリン。

鈴の音がした方へ目を向けると、そこには声色通りの若い女性がいた。

その、真っ白な空間と一体化しているかのように、真っ白な髪、真っ白な肌、悪戯好きな子供のようにも博識な大人のようにも見えるその整った顔つき、粗末な、浮浪者のような背格好で、そこで胡座を講き、瞳を閉じて座っている。

そして、その細い肩の上には、まるで真っ白な紙にインクを落としたような、首輪に鈴を付けた小さな小さな真っ黒い子猫が、その金色の瞳でこちらを見据えていた。

「……………」

と——その少年は頭を掻きながらただただ黙っている。

後ろに少し伸ばした金色の髪には一筋の三つ編み黒メッシュ、黒のチョーカー、耳や手首や腕などに飾られている銀色のアクセサリ、実際のパンクファッションより少し抑えめなパンクロックファッションに身を包んだ、可愛らしい顔つきの紅い眼の17歳位の少年。

「あ、あー、えつとすね……………」

焦りも抑揚も何もない声で、すぐ目の前に映るその女性へ適当に第一声の相槌を打とうとした時、突然、その瞳には彼女の肩に鎮座していた黒子猫が飛躍したのが見えた。

「ごにゃー!!」

「てぎゃああ?!!」

「あー、あつはつは」

黒子猫が伸ばした爪はその少年の右手の甲を掠め、少年は驚いて後ろへ引つ繰り返り、女性はあらまあという表情を作るだけで微動

だにしなかった、笑っていなかった。

「つつつてえー……」

かなりの鋭さか、掠めただけでもその傷口からは血が溢れ出てきた。指輪を伝い、その白の地へと落ちる。

ポタツ。

真っ白に、赤。

全身に衝動が走る。

変な汗が出てくる。

震えが少しずつ出てくる。

心臓が早くなる。

ただただその流れる血だけを見つめる少年を見て、黒子猫が肩に戻ったのを確認すると、女性は一瞬口を切った。

「えーっと、大丈夫かね？」

言葉では心配の様子が窺えるが、少し笑みのある表情からはその真意は窺えない。そして、

「ダメじゃないか、キキ。この少年は吸血鬼であって、この少年は自身の血を見たり、舐めたり、触れたりするのを、特に、好まない臆病な子だ。知らなかったと思うけれど、知らないで何かをやらかすということが、どれ程の罪か、考えたことはあるかね？ 少なくとも、身共は考えたことはあるし、知ってもいるよ。世界最高の魔法使い、絶遠の白、クルシマ・シルクは、何でも知っているし、何でも出来るからねえ。まあ、そんなことより、何故だか解らんね。身共は、汝の名前を知らない。汝、良かったら、教えてくれないかね？ それにしても、済まなかったね。キキはまだ、0歳の猫だから、子供なんだ。成長が早いらしくてね、嬰兒位になるともう、20歳同然になるらしいよ」

平坦で長々と、本当にゆったりとした口調で少々眠気が込み上げてきた少年は、

「あー、オレは、カナカ、っす……」

気のない返事を静かに返した。見た目と喋り方が全くとまではない

かないが噛み合わない女性がいることで少し緊張と違和感を持つ彼——カナ力は、女性——シルクへと視線を向け、そこで違和感に気づき、叫んだ。

「……ちよつと待つてくださいよ、なんで知ってるんすか!? なんて吸血鬼って知ってるんすか!？」

「ああ、それは、身共が、クルシマ・シルクだからだよ」

意味の分からない即答に、カナ力は益々先程にはなかった焦りの色を隠せない。

なんなんだ、この女。

なんで知っているんだ。

なんで平気なんだ。

なんで逃げないんだ。

なんで出会ったんだ。

なんでオレは、こんな所に迷い込んだんだ……。

「そしてそれはね、汝が、カナ力だからだよ」

「!」

その心を読んだかのように。

そういう風だというように。

それを知っているかのように、シルクは答えた。

「誠実でなくとも、どうしてなかなか、若者にはついていけないよ。汝がどうして、此処へ迷い込むことができたか？」

それは、汝がカナ力だから、

汝が、身共を狭間（くさま）から助け出してくれる、王子様の役割を、神から、享受したからだよ。

うん、王子様、良い響きだと、思わないかね？

この歳になって、そんなお伽噺のような単語を発するとは、

ねえ、王子様……ん、そうじゃないのかね？」

それが当たり前だというように。

きょとんとした顔つきになったシルクを、ただただ見ているだけのカナ力。

「いいいいいよ、教えてあげよう。知らないようなら、根刮ぎ教えてあげよう。」

汝は、身共のために、

此処に迷い、

此処に現れ、

此処で身共と出逢ったのだ。

汝は、

身共をこの牢獄から助け出し、

身共をこの牢獄に、

身共を閉じ込めた悪者達を倒し、

身共の願いを叶え、

世界を救う、

身共を救う、

それが、汝の存在理由であり、存在価値であり、存在根拠だよ」

存在、理由……？

なんだそれ。

考えたこともない。

だって、つい最近、オレ、

ウマレテコナケレバ

ヨカタノニ

”

って言われたばかりだったのに。

逃げてきたのに。

逃げてきた奴に、何か、しなくてはならないことなんかあったのか？

というか、世界を救う……？

世界って、空間……いや、オレが元いた、世界？

「そう、

身共がいた、

身共が生まれた、

身共がこれから死ぬ、

汝がいた、汝が生まれた、

汝がこれから死ぬ、

あの広大で窮屈な、

あの脆く堅い、

あの醜くも美しい世界のことだよ。

身共はあの世界が大好きなんだ。

大嫌いで大好き、

どちらかと言えば大好きなんだ。

汝、やることがないのなら世界でも救ってみないかね？」

にっこりと笑顔で言うシルク。柔らかく、朗らかで、聡明で、温

かなその笑みに、カナカは胸が高鳴った。

「いつやあー……そんなこと、い、イキナリ言われてもつすねえー

……」

それを誤魔化すかのように、しどろもどろになり答える。

神秘的なその姿をした女性。粗末で不格好で醜いはずなのに、とても純粹で、真っ白な、とてもそれは美しいモノに思えた。

「全ては、身共が保証しよう。身共を信じてくれたまえ。汝も、身共を大いに信じたまえ。身共も、汝を大いに信じよう。約束する。

命をも賭して、誓おう」

何かを信じようとして、傷ついて泣いていた日もあった気がする。

「世界はまわると言うけれど、何も、身共の中でめぐるものなど、ないから、ただそっと、格子まての外ながめ、季節が、移ろうのを、見ていましょう」

優しい気持ち、冷たい心、人は同時に宿すこともできる。

それでも、気付き始めた頃には既に、もう何かが壊れていたみたいで。

「世界はまわると言うけれど、つながるすべもなく、取り残されたように、ひとつひとつ、消えゆく街の灯りを、意味もなく数えて、過すごします」

ずっと同じとこで動かずいれたなら、地球がまわっていくのをいつまでも、眺めていたいのに……けれど。

「世界はまわると言うけれど、頭上の空だけがめぐるだけっす。何

処へもゆかないでいる日でも、この地球の速度でただまわるなんて……嫌っす」

裏切らぬものはない。

求めるのならば、ただみているのがいい……でも、オレも、何かやって良いんすか？

「勿の論さ」

またも、シルクの発言だった。

「唐突すぎるし、意味がわからないと、思うけれど、身共は、汝を待っていたんだ。」

あー、良かった良かった。

退屈はしていなかったけれど、とても、有意義な暇潰しができそうだ、そう、思わないかね？ カナ力。身共の名は、クルシマ・シルク。世界最高の魔法使い、絶遠の白、まあ、どこにでも居そうで居ないような、ただの魔法使いさ。そしてこちらの、肩の上にいるのは、キキ。身共の使い魔であり、幼馴染であり、どこにでも居そうで居ないような、ただの子猫さ」

「ほんと、突然すぎるし意味もわかんねえっす。けれどもオレは、あんたに出逢ってしまった。」

あー、参った参った。

別にやることもなかったし、とりあえず世界でも救わせてもらおうかなって思うっすよ、シルク姐さん。オレの名は、カナ力。吸血鬼っす。……って、アレ？ 何か雰囲気ズバズバ言っちゃったんすけど、その、目的とか……」

「ジュエル様に会いたいね」

「ジュエル……？」

「身共の師さ。元世界最高の魔法使いだよ」

「へ、へえー……」

「あと、初代にも会いたいね、王様^{キング}をやって、いるはずなんだ」

「王様……っすか」

「それとそうだね、汝も、知っているだろう、汝の里親の、戌亥^{いぬい}と

か」

「……っ！……イヌイ……！」

「汝はこの男を捜しているのだろう？ 丁度良いじゃあないか、共に捜しにいこう、身共の人捜しは百発百中だよ」

「戌亥に……会えるんっすね……？」

「言っただであろっ、全て、保証すると」

長い沈黙の後、何故だかとても信頼と自信に満ちたような、その若く美しいシルクの言葉に胸を打たれたのか。

「……っす」

カナカは顔を上げて言った。

「いくっす！ だから……この空間から出してやる！ 助けてやる！シルクの願い、全部叶えてやるっす！」

「良く言っただ。それじゃあ、契約成立ということだがね」と。

その、真っ白な空間に、突如真っ黒な、漆黒の影が、渦巻いた。
「！」

カナカは吃驚でバランスを崩し、それが先程自身が落とした紅い紅い忌まわしき血が権化であるということに気が付く。

赤と黒の影達が吹き荒れる中、その真っ白な空間は完璧な闇に包まれ、ただ光って見えるのは、自身と、口元を綻ばせているシルクと、ギラギラと金色の目を光らせるキキという黒子猫のみであった。何が起きたか理解する前に、なにやらシルクが、胡座を講いたままよく解らない意味深で不思議な言葉、呪文を相変わらずゆっくりと唱えているのが目に見え、身体のおちらこちらに影が巻き付いていくのが解る。

「——」

ロクヴィア

ルブダス

キユウコオデイス

「——」

「——」

周りを見渡すと、真っ黒い巨大な魔方陣が引かれているのが解る。

「——」

サンブラユタス

ゴニクサス

キユウアユタス

ロクサハスラ

「——」

サンシアタ

ゴダシアン

ナナ

「……」

そして、理解する。

これが、世界最高の魔法使い、絶遠の白、クルシマ・シルクを助ける契約——。

これが、シルクのしたことならば。

カナカは黙って身を委ねた。

カナカは黙って、彼女を信じた。

自分が必要としてくれた、自分の願いも叶えてくれる、自分を信じてくれた、彼女のことを。

「さて、と……」

スッ——と、彼女は立った。

あっけらかんと。

やはり、とても小さな存在で、少女位の背丈だった。

本当は、こんな大人びた顔をしておいて、少女なのかもしれない。

「あんたさあ、一体全体いくつなワケ？」

「ん、……そうだね、23、かな」

「割りとフツーだな」

「下2桁がだが、ね」

「……………」

「信じるか信じないかは、君次第さ、あっはっは」

そして、苦笑しながら啞然としていたカナカの目の前までスタスタ歩いてきたかと思うと、彼を見上げ、指で手招きをした。カナカがそれに合わせて顔を下げると、

「……汝、背が高すぎだ」

「——！」

少々不服そうにそう呟いたシルクは爪先立ちをし、両手でカナカの頬を包み、その小さな唇を、彼の唇へと重ねた。

とてもとても、深く、気持ちの良いものだった。

シルクの瞳はトロン、とゆっくり開き、その闇と同じ色の瞳が見えた。両手の体温が上昇していくのが分かり、カナカの心臓は速くなり、そして、彼の口からは一筋の赤い血が伝る。

「……っん……」

その永遠のような一瞬のような時間は終わり、シルクは両手を放して頬が真っ赤な力ナ力を見上げた後後ろを振り返り、言った。

「キキ。これより、彼我は旅に出る。汝も、来るかね？」

「うなう」

「そうかね」

その、黒子猫の短い返事を聴き、シルクは柔らかく微笑んだ。

「それじゃあ、クルシマ・シルクと、カナ力と、キキを、頼んだよ」
近寄ってきた黒子猫を両手で掬い上げ、チリン、とその首の鈴が鳴ったのを聴くと、改めて、カナ力とシルクは目を合わせた。

そして次の瞬間、光はなくなり、色もなくなり、そして、その空間は、闇に包まれ、消えた。

かくして、その空間^{せかい}から、彼と、彼女と、1匹は、消えた。

黒子猫は、魔法使いの幸せを願い、鬼を待っていた。

鬼は、魔法使いに、恋をした。

逢いたい人に、逢いにいくために。

魔法使いは、世界に憧れ、愛すべき鬼と共に、旅に出た。
大切なモノと、引き換えに。

その旅の終わりは、そう、遠くはない……――。

003 世界はまわると言っけれど（後書き）

はい、この曲は、コナンのEDに使われていましたね！

神秘的で、静かな夜に聴くような、幻想的な1曲。

切ないはずなのに、この込み上げて来る力強さは何なのだろうか、いつも考えさせられます。

ゴッドハンドツの編曲サイコーですっ。

004 Love Lone Star

夜明けが来ると確かめたら……帰るんだ

日が暮れるのを待てずに、猫はウズウズと体を左右に振っていた。結果として日は沈んでいるが、じゃあ何かと言えば、とりあえずは猫は出発したかった。

初代に逢いたいと、彼がいると聞いたその『空』へ行きたいと。しかしそれでも若き王の適確な準備や決断で、明日出発ということになっている。

先程夜は駄目だと王様が言った。

なので彼女の高かったテンションは下がりになり、長く細い尻尾もコテン、といった感じで動かない。

「おい、猫」

「……………にゃん」

「調子はどうだ」

「ただ下がりにゃん」

「おい猫」

「にゃがにゃん」

「茶でも飲め」

「……………さんくすにゃん」

単発な質疑応答が繰り返される中、王様は彼が淹れた紅茶を猫へ差し出した。白い湯気が立ち上り、ランプの灯りがその白いティーカップを照らす。猫は不機嫌な顔で王様の顔も見ずそれを受け取り、そのカップにゆっくりと舌を入れた。

「にゃ、あつっ?! あつっ、にゃっっ!! てかカップもあにゃ

つつ！」

と、猫はかなりの慌てぶりでカップを放り投げた。茂みの方へカップは水の音と共に消える。涙目になり、猫は少々赤くなった両手を舌で急ぎながらも丁寧に舐め上げながら、尻尾をピンと立て、王様へ向かって抗議の声を上げる。

「おうおうおう王様！ にゃあは猫手にゃ、猫舌だにゃ！ ひど、ひ、非道すぎるにゃ、ありゃ、新手の虐めか、にゃ?!」

「急くな猫」

王様は溜め息を吐いて顔を伏せた。猫が仁王立ちをしているので、どうしても見下ろされる。

別にそれに不快を感じるわけではない。

ただ、どうして自分はこんなのだろつと、というかもしれない。自分はかなり不器用なのではないだろうか。彼は今頃気付いていた。

「ふーっ、ふーっ、にゃー！」

「ああ済まない済まない、悪かった悪かった、私の因だ」

暗い茂みの方へ向かい、水の上に浮いて無事だったティーカップを拾い上げ、

「忘れてた……」

と、彼は聞こえないような声でボソリと呟いた。

「忘れるにゃ！」

聞こえてた。

やはり、猫は耳が良い。

彼女の身体能力は異常だ。

よく聞こえるし、よく見えるし、匂いもすぐ分かる、速いし跳ねるし、空に届きそうなほどほんとによく跳ねる。

そして異常なまでの気まぐれ。

まるで猫のような、その性格。

いつか……パツと居なくなってしまうのではないかと心配になる。とても、とても。

常に彼女のことを考えていたが、まさか習慣的なことを度忘れしてしまうとは。

やはりあれか、身近な者が死んだからか。……不謹慎だな。

それともあれか、猫と自分しかいないからか。……いやいやいや、

それはいくらなんでもないだろう、……うん。

うん？

——2人、きり……？

………。

「！」

と、突然彼は目を見開き頬を紅潮させそれを隠すように手で覆い、急に力を無くしてヘナヘナとしゃがみ込んでしまった。

心臓が鼓動打つ。

速い、速い、速い。

熱い。

体が。

目蓋が。

頬が。

ああ、ああ。

もう、駄目だ……——な、なんなんだ、これっ……。

抑えろ、抑えろ。深呼吸、深呼吸。

………。

……よし。

彼は心を落ち着けるため辺りを見渡した。

何かを探した。

ん？

ここからでも見えるその浜辺に、大きな布袋が落ちていた。城にあつた瓦礫かゴミの残骸だろうか、中に何か入っているようで大きく膨らんでいる。

近寄って、中を覗いた。

王様は、中身のそれらを見てニヤリと笑った。そして、叫ぶ。

「猫、遊ぶか！」

「にやにがにや」

不機嫌声に振り返り、

「季節外れの花火大会だ」

更にそう言った。

それを聞いた猫は、頭の上にたくさんの？を並べた。

・

・

・

「いいか。火を使っているから一応危険物であることには変わりない。そして突然発火する恐れがあるので、あまり内側を持ちすぎないことだ、火傷でもされたら大事だからな。火を点ける時は私の目の届く範囲でしてく」

「早くしてくれにやつ！」

中にあつた取扱説明書を猫に見せるように開き、真面目な口調で語り出した彼を猫はやりわりと受け流す。見たこともないものだったらしく、好奇心旺盛に目をギラギラ輝かせている。王様はやれやれと溜め息を吐くと、見せた方が速いだろうと布袋から1本抜き取り、ゆつたりと揺れるランプから、ゆつくりと、しけた花火に火を点けた。

すぐに点火したので、花火は途端に音を立てて、轟々と燃え上がる。

「おおおおうつ！ 光^{ひか}つて音が凄いにや！ なんにやなんにや、超ウケるにや！」

猫は布袋から両手に3本ずつ持ち、火を点けまたその音光に興奮しブンブンと振り回しながら彼の元へ走ってくる。

「王様……！ すっごいにゃー！ バチバチにゃー！」

「わ、人に向けてするな！」

対する王様は颯爽と逃げる。

月照らす湖の波打ち際、巫山戯て走って騒いだ。

展開的な画が真逆、あべこべな2人だった。

「うおお、色が変わったにゃあーっ、ほ、炎吹き出したにゃこのネズミ！ 空高く飛んでっちゃったにゃ！ 戻って来いにゃー！ にゃー、にゃーっはっはっはっ、たーのしーにゃあ王様あ！」

次々と色々な花火を取り出し、思いつきり眩しい笑顔ではしゃぐ猫。自然と……彼は微笑んだ。

しかしまあ、お祭り等のモノが大好きな国だったからな……こんなに楽しいのは何時からぶりだろうか。

「気をつけるよ猫。転ぶぞ」

「だーいじょーぶにやつ？」

展開通り彼女は滑って転んだ。ビックリ顔のまま、大の字で猫は起き上がらない。

「ま、猫？！」

王様の声が裏返った。貴重。

彼が慌てて近寄ると、それを見た猫は二カッと笑って言った。

「王様、楽しいかにゃ？」

「え、あー…… ああ、かなりな。案ずるな猫よ、楽しいぞ」

「そりはよかったにゃーん」

猫は大の字から両手で地を勢いよく押し、その反動で浮いた身体を一回転させ身軽に地面へ着地した。相変わらず鮮やかで美しい動きだ。

「王様、今日つつつか、この国が滅びたのを見てからずっとつまんにゃそうにゃ顔していたからにゃっ、楽しいという事は嬉しいという事で笑うにゃ、良かったにゃ」

「そうか」

猫は満面の笑みだった。

王様もいつものように平然としていたが、内ではかなり心逸っていた。

心配を掛けていたとは……なんたる醜態。

王として、依然として威厳のある、信頼の出来る者にならなければな。

民のためにも。

猫のためにも。

私のためにも。

父のためにも。

「王様、王様ー。もつと花火^{はなび}はにやいのかにや？ いけいけフィーバーしたいにや！」

「そうだな、シメといくか」

彼は布袋を引っ繰り返して残りのものを全てドサドサと出した。

出てきたのは、彼の手には収まらない少し大きめの筒状の箱々。それを1本ずつ均等な距離に並べ、1つ1つに点火していく。猫はそれを眺め、全てに点火した後、彼等はそこから少し走って離れた後ろを振り向いた瞬間。

それは、巨大なスクリーンのようなだった。

真つ暗闇の中へと光が昇っていき、光って消え、そして、光の粒を弾かせ大輪の花を咲かせ、巨大な音が、響く。

次々と、次々と。

赤、青、黄、緑、紫……色取り取り選り取り見取りの花々が夜空に咲き乱れ、光っては消え、輝いては消え、音を轟かせては消え。

その一瞬一瞬がまるで永遠のように続くように思えた。

全てをその音と光で掻き消すように、心と体を持っていかれそう
で、そう、何かを無性に汚したい……そんな気持ちを吹き飛ばすように。

「あの打ち上げ花火^{はなび}というやつには、心をドーンと打たれるにやつ。耳にピンピンくるにや、肌が痺れるにやつ！ まるで、初代王様み

たいだにやー、にやつはつはっ」

猫は酔っている様だった。

微睡み、目を薄っすらと細め、一途に、真っ直ぐに、その夜空に放たれた花火たちを見上げていた。

その表情と声に、王様は花火から目を下げ、心悸亢進。

何故かずっと、彼女を見つめていたくなつた。

「初代王様はぶっっちゃけ1人で輝^{にやん}いていた人だったからにやー。マジウケるにや、みんなや初代が何かすると、決まってそっちの方を向くんだにや。その光と声に惹かれるんだにや。あの歌声とかにや、マジでやばいにや」

お前もその中の1人なんだよ、猫。

「たーまやー、かーぎやー、にやー」

誰からも愛されて、でも、独りぼっちのあの光。

誰からも愛されて、でも、独りぼっちのあの星。

誰からも愛されて、でも、独りぼっちのあの花火。

輝いて見えるけど、誰も傍にいない星。

背伸びしても届かないから、見つめていた。

名前もない、呼ばれないままで何光年、旅をしたの？

初代。

逢いたい。

自分だって、息子である自分だって、逢いたい。

猫と同じ位、大好きなんだ。

けれども、

2人の大切な星だけど、とても遠い。

目印のない2人だけの秘密の星、目を凝らして探す2人が、此処にいる。

逢えない所にいる。

けれども想っている。

けれども逢いたいから、生きている。

だから。

「猫」

「なーんっだにゃんっ」

彼女はとても上機嫌だった。

良かった。

機嫌が直って良かった。というか、忘れたようだ。

猫が嬉しいなら、いいや。

彼女の胸に、今も響くたった1つの花火。

彼女の心に、今も輝くたった1つの花火。

彼女の瞳に見えているたった1つの花火。

——いつか、君にも見える花火を打ち上げたい。

「……………えっと」

「ん、王様、なんか顔赤くにゃいかにゃ？」

「な、え、は、花火のせいだ、戯け！」

「たわ？」

「も、もう私は寝る！」

「まっただ光ってるにゃよー」

「いい！」

ああ、子供みたいだ。

猫にはどうも心を乱される。

こんなんで大丈夫だろうか。

いや、いい、いいんだ。

……………いいんだよ、もう！

とかいって。

相変わらずきっかりと、子供が寝る時間に床につく王様であった。

出発は、明日の朝、夜が明けた頃——青空が、見える頃。

004 Love Lone Star (後書き)

イントロがとても綺麗な曲です、宇宙に漂っているような、そんな。

G A R E N T T I M Eでのスペシャルライブ映像では、サビまでのゆったり感、七さんグランドピアノ似合いすぎです。そしてサビに入った瞬間のあの壮大な歌声！感動で涙します。

おかもっちの軽やかなギター捌きとコーラスにも必見必聴です（笑）

カップリング曲にしては惜しい程、本当に良い曲ばかりですね！

それにしても王様、実年齢マジで鯖読んでんじゃないかとハラハラわくわくしますね。

005 Float World (前書き)

……長いです。

005 Float world

愛に満ちた時間ときは、いつまでも続きやしない
愛に満ちた時間は、いつまでも続きやしなかった

けれど、

汝きみがいつかふと淋しくて
振り返るその時に抱きしめたいから、

どんなに孤独わたくしが身共を支配しても
誰かに心は明け渡せない……

・

・

・

……たとえ、汝うぬでも……ね——

『貴様らが何を致そうが、俺様が何を致してやろうが、世界はまわり続け変化など何もない』

戌亥は無愛想で無器用で無遠慮で無口な奴だった。

戌亥は奇っ怪な男だった。

戌亥はいつもちよつと不機嫌そうだった。

というか、何と言えはいいのだろうか、見た目からして、喋り方からして、何か、全てが奇妙で、変で、可笑しな男だった。

『世界つつてもお前様のことじゃねえよ、おいセカイ、そして金架かなか、聞け』

俺の金色の髪を右手でクシャクシャと少し大雑把に撫でながら、胡座を講いた膝にちよこんと座っている小さなセカイにも反対の手で同じ事をする。彼女はきやらきやらと可愛らしく笑っていた。

ゆるゆると着ている萌葱色の着物そして羽織、無地の薄青蛇の目傘を部屋の中でも何時でも差して肩に引っかけている可笑しな背格好。

いつもはとても、というかなかなり寡黙で、無口過ぎて、其処に居ないんじゃないかというほど口を開かない、ただ其処に居るだけの1日に1回喋るかどうかというくらいこの男は、たまに突然何の前触れもなくペラペラと饒舌に喋りだす時がある。

『衝動に任せて全てを終わりにしたくなる時はないか？』

だがそれらはとても納得のいくものでも誰の為になるでも、とにかく利害の一致しないものばかりで、多分聞いても聞かなくてもいいことばかりだった。

『愛情は、友情は、哀情は、真情は、心情は、厚情は、情熱は、情動は、底なく与えてゆける方が良い、そう存じないか？』

『俺様は何を許容ゆるしてやればいい？』

『足りないモノは何だ？』

『貴様らは未だ知らない場所へ行こうとしているんじゃないか？』

『彷徨えば、違う場所なら、知らない場所なら、何かあると期待しているんじゃないか？』

『だが、その場所へ行くというイメージは、曖昧なんじゃないか？』

親が子供に教えることでもない。

ただ俺とセカイに対して言い聞かせているだけで、違う誰かに言うようなことで、ただ彼が言いたいことを言っているだけのようだった。

誰に言っているのだろう。

それが気になって、まだ幼い頃から俺達は戌亥が喋りだすと耳をしっかりと傾けるようになった。

別にそれだけで戌亥の傍に居たわけではない。

その大きな手で撫でられるのが、とても気持ち良かったから、とても言っておこうか。

俺もセカイもそうされるのが好きで、戌亥が大好きで、何を考えているのかよく解らないけれど、彼の傍にいつも居た。

けれどもまあ、そんなことで解るはずもないし、もしその誰かに言っているにしても、その誰かに言っているようには聞こえない時もあつた。

俺達に言っていることなのに、俺達に言つべきことではなくて、俺達に聞かせていることで、俺達は聞いているけれど、でも、独り言のようで。

声に抑揚はなく感情も感じられず、その狐の面を付けた男の表情は勿論読めず。

なんたつて左目はそのお面で隠れ、右目は包帯で包まれており、頬が染まつたこともなく、口元が綻んだこともあまりない。

それでも義父である。

『狐に抓まれるんじゃないやあねえぞ貴様共。人生戦くな、戦え』

ちよこんと首の後ろにある1つに纏められた黒髪。

それは、俺のとも、セカイのとも同じような色の髪で。

孤児であつた俺とセカイを育ててくれた、無償に優しく、無性に心配性で、無愛想に、無器用に、無遠慮に、大切にしてくれた家族。どこにいるんすか？

生きてるっすか？

俺を許して、くれますか……？

「……………」

ふわりふわり。

ふわふわ。

たゆたうように、漂うように、浮かぶように。

朦朧と混沌とする真っ白な空間の中で、流れていくように。

その心地良さを感じる空間で、心も身体もユラユラ軽い……そんな中で金架という名の少年は、目を覚ました。

「……………あれえ？」

と呟く。えらくはつきりとした、呆けた呟きだった。

彼は仰向けに寝ていた。

目に見えるのは真っ白い天井で回る麦色のファン、大きく広く白いベッドから体を起こし、その明るい日射しが降り注がれる窓の向こうに目を移すと、青い空、太陽の恵みを受けサンサンと輝く巨大な樹木は風で揺らめき、空を舞う鳥たち、ユラユラ波打つプール、そして、遠くには、碧々と海が広がっていた。

「お、おー」

南の島？

ナニコレ外国？

すげえ、テレビん中みてえ……。

涼しい部屋の中、窓から視線をゆつくりと白い壁へ、前に戻すと、
「え」

少年がいた。

一言で言えば、真っ黒な少年だった。その真っ白な部屋の中に墨を落としたような。

その言葉通りの漆黒の髪、かなりのハネツ毛で、猫の耳のように跳ねている、そして後ろで長く1つに縛っており、猫の尻尾のように伸びている。歳は10歳位、小柄で、まるで肌を隠しているような黒い無地の大きめの長袖のなどの全身黒づくめの装い。

その漆黒は、純白とは、真逆のもので。

シルクとは、正反対。

そして、でも、瞳は金色で、太陽のようにキラキラと輝いていた。まるで、獲物を狙うかのように。

漆黒の中に佇む金。

瞳の中には、金架が映えていて、彼の紅い瞳には、自分の首筋にナイフを当て、鋭く睨み付けるその少年の姿があった。

……え？

気配とか？ 重さとか？

感じなかった……。

ていうか、世界最大大ピンチって、やつですか？
と。

危殆に瀕する、あわやと思った瞬間。

どんっ！

と。

何かが落ちた音がした。金架がそちらへ目を向けた時には、その少年はもう動いていた。

「しるく！」

幼い声色。

しるく？

「おい、大丈夫か？ 怪我はしていないか？ だから言っただろう、

お前は寝相が悪いんだから、ベッドは向いていないと……」

かなり取り乱していてまごついていいる、そのベッドから落ちたモノへ必死に問いかける少年。それに対して、その者は無言だ。金架は自身のベッドからおり、隣のグシャグシャと乱れているベッドの上へ乗り、その少年達を覗いた。

「あ……シルク」

これまた真っ白なシーツにくるまれた、もう周りが真っ白で保護色過ぎて真っ白すぎる女性、クルシマ・シルクが、その少年の腕の中で小さく寝息を立てていた。

とても無防備に。とても無邪気に。子供のように、女神のように。彼女が無事なのを確認した後、少年はホッとして、柔らかな顔つきになり、静かに溜め息を吐いた。

「良かった。怪我はない。全くお騒がせな奴だよなあ、シルクは」
まだ年端もいかぬ幼い子供に、心配されているぞ、シルク……。

そんな金架もとりのあえず安心して、その少年に声をかけた。

「なあお前、シルクの知り合いか？ お前、誰だ？ えっと、俺は、シルクをたす」

「五月蠅え餓鬼黙れ死ね」

その朗らかな表情から一変。

少年の顔は歪みに歪み、躊躇なく呪詛を吐いてきた。

？

理解に遅みがかかった。

「ごちやごちやゴチャゴチャ五月蠅えなあ、黙るか静かにするか出来ないワケ？ 全くダメだなお前みたいな餓鬼は。猫は抜き足差し足が得意なんだぞ、お前がボクを認識するなんて百年早えんだよ」

……子供に餓鬼^{ガキ}って言われたぞ……。こいつ可愛い顔して飛んでもねえ奴だ……。

「ったく、シルクも苦労するぜ。お前のような野蛮な野郎が勇者とは、世も末だな。鬼なんぞ、劣った邪悪な存在がどうしてボクの眼前にいやがるんだ。人に誇れるような経験なんてない癖に、処置無

しな感じに救われやがって…… 本当に不愉快だ。…… だが、シルクを救ってくれたことだけには感謝してやる、ボクに感謝されることに感謝しやがれよ。そしてそれごときで図に乗るなよ、ほんとは過大評価も甚だしいわ」

その幼い声色で、流暢に完璧に一度も噛まずにガンガン上から視線で来る少年。

…… ああ、こういう、キャラか…… OK、理解した。それと…… ほんとになんだ、こいつ。やっぱりシルクの何らかの関係者か？

「なあ、アンタ、なんていう名前なんだ？」

「…… 人の話全っ然聞いてねえだろお前。それと愚問だな、偉大なるボクの名を知りたいのなら、自ら名乗りやがれド阿呆」

うつわ。そういう台詞、本当に言う奴いたんだ、初めて見た。ほんとにマジでこいつのテンション丸わかりしてきたぞ。

「あ、ああ、悪い。俺の名は金架、金の架け橋って書いて金架だ」

「ふーん、架け橋、ね……」

「で、で、アンタはなんて名前だ？」

「あ？」

聞き返された。

「何っ故ボクの大切な真名をお前に教えてやらなきゃいけないんだ。お前に名乗ってやる名など無いわ」

本日最大の歪み顔で言い放つ少年。

…… こんのガキ……。

ヒョイツ。

「うつわあ！ 何しやがるこのやつ、降ろせ降ろせ、死ぬ、死ぬ、この盆暗、鬼、餓鬼、鬼畜野郎ー！」

「五月つ蠅え、黙るか静かにするか黙るか出来んのか、こんのガキが！」

金架はその少年の首根っこを右手で掴むと、ヒョイツと持ち上げた。少年はジタバタじたばたと激しく抵抗するが、軽すぎる少年がどう足掻こうと、金架のモチベーションは特に変わらない。

「黙って聞いてりや年上に対する態度がなつてねえし口も悪いなあ、どうやってこの部屋に入った！」

「何ほざいてやがる！　ボクは123歳だぞ！」

「ああ？　妙に語呂が良いなあ？！」

「お前より年上だ、お前より偉い！」

「嘘付け嘘を吐くのが下手なんだよ！」

「敬え、年上敬えー！」

「ああ？！　やる気かこの野郎！」

「ボクに勝てる奴なんて、この世に2人しかいねえよ！　そしてそれはお前はじゃねえ！　馬あー鹿！」

「馬鹿つて言つた方が馬鹿なんだよ、マヌケ！」

「フーッ！」

「ガー！」

「やれやれ喧しいよ、汝達。朝っぱらの方だし、隣の、お部屋の方に迷惑に、なるから、とりあえず静かに争いなさい」と。

もう途中で子供同士の喧嘩のようになり始めた頃、朝だからなのか、矢庭に、いつもよりかなりゆつたりとした彼女の声が流れた。その瞬間、彼らの口は止まる。

「シルク！」

と、その瞬間に、少年は金架に宙吊り状態にされながらもその浮いている宙で一回転、さながら逆上がりをするように一回転し、そのままの勢いで金架の顔面に黒のスパイクシューズで華麗に蹴りを入れた。読めなかった突然の出来事に金架の理解はすぐには及ばず、咄嗟に右手を放した。そして少年は床に着地すると、シルクの元へ駆け寄った。金架は唸るでも怒鳴るでもなく、ただ蹲っているだけだった。よほど痛かったのだろう、なんとたつてスパイク以前に靴。

「お、おはよう。げ、元気か？　てよ、ち、調子はどうか？」

噛み噛みの噛みっ噛みの少年。

どうも多重人格の恐れがあるぞこいつ……。

金架はそう感じ取った。そしてそれに対しての答えを、シルクはいつも通りの笑顔で言った。

「お早う、調子かね？ 身共は低血圧だからね、最も低いよ、ああ、金架もお早う」

「……………」

「ん、返事がないね、汝はただの金架かね。ああ…………この金架、どこに廃棄すれば、良いものかねえ。困った困った」

「……………」

「その辺のカラスかア리가、片付けてくれるだろうか」

「…………鬼…………」

「何をほざいているのだね。鬼は汝だろう、身共は人間だ」

「そっちじゃねっすよ。危うく卒倒するところだったっすよ…………」

「ざまーみろっ」

「様を見る」

「なんで2人して言うんすか?!」

「はは、でもまあ冗談はさておき、汝よ、すっかり金架に謝意を表しなさい。悪気あつての身体を傷つけるという行為は、身共は、悪いことだと思っんだ、悪いことをした時に何て言えればいいか、賢い汝には解るだろう?」

その少年の肩に手を置き、優しく静かに言う。まるで、母親が子供に、親が子供に言い聞かせるかのように。だが対する少年の方は、やんちゃ盛りの時期のようにすぐには素直にならず、なかなか謝ろうとする気配がない。そして。

「い、いくらシルクが言ったって、ボクはこんな木偶の坊に言う言葉なんて、ましてや謝るなんて…………天地が引っ繰り返しても一切もうない!」

突然一目散に部屋の入り口の方へ走り出していく少年。が、一瞬ピタッと止まり金架の方へ目を向け、

「馬鹿阿呆餓鬼」

と、一言ドライに捨てて台詞を吐いてドアから出て行ってしまった。

その時、首からチラ付く首輪に付いている鈴が、シャラシャラと音を立てる。

鈴の音と共に走っていった少年を呆然と見送った後、金架はシルクに問いかけた。

「あのー……あの少年って、誰っすか？」

「そうそれは丁度二千年前の昔の戦役の第一次世界大戦とかその辺りのこと身共はまだ十にしか満たぬ小さな子供だった時出会ったあの子は」

「今21世紀っすよ」

今度は一度も言葉を切らず、だがゆったりとわざと輝かしく語るシルク。金架はそう言いながらバスルームへ向かい、掛けてあった白いタオルで顔の汚れを拭った。

本当に何だったんだあいつは……。

久しぶりにあんなに叫んだ気がする。

バスルームから戻ってきた金架に、シルクは視線を向けた。

「……あの子は、稀生きぎだよ」

「キキ？ 稀生って、あの、もしかするとあの黒子猫？」

「いえあー、正解」

「123歳？」

「まさか、言っただろう、子供だから、0歳だって」

「なんか人間なんすけど」

「そりやそうだよ、稀生だもの」

「姉さん絶対っ对えー寝惚けてる……あー、それーにしても」

視線をシルクから奥の窓へ移す金架。

「なんか超南国っすよねー、外とかめっちゃ良い気候じゃないんすか？」

その稀生のことで少々苛ついている心を抑え、気晴らしとでも言うように、数本のヤシが生えているのが見えるその透明で大きなガラス窓の取っ手に手を掛け、金架はノリノリで勢いよくそのバルコニーへ続くドアを開け放った。すると、部屋の涼しさと外の温暖と

言うより熱帯な湿度高温過ぎるその蒸し暑さが相俟って、

「暑うつっ！」

金架は一瞬で窓を閉めた。

「んなここ暑っ！ や、ここ日本じゃねえ、沖縄でもねえ、マジで外国？！ な、なんすか此処どこっすか？！」

「Singapore」

「？」

かなり巧妙な英音が聴こえた。身体をシートで包んだシルクからだった。……ミノムシのようだった。

「まあまあ、聞いて驚いて、見て笑いなさい。いやあ、とりあえず、汝の在宅がある日本にでも、行けたら良かったんだけどもね、ucciかりucciかり、熱帯の島国、シンガポール共和国、通称シンガポールに飛んでしまったよ」

「し……？」

暫くしてからの金架の反応だった。

「うん。汝から見たら外国だね。でも大丈夫、汝が住んでいた、そして身共の住んでいた世界だよ」

……。

……俺の？ 住んでいた……生きていた？

頬をつねってみた。痛い。

夢じゃ、ない。

……帰って、来れた……！

あの空間にいたのはほんの少しだけの時間だったのに、17年間暮らしていた日本でもないのに、何故だかとても懐かしく感じた。

そしたら。

「あ……れ」

目頭が熱くなった。

なんで、だろう。

「本当に済まないね。でも、シンガポールは飛行機でなら、7時間位のフライトで、日本に行けるはずだからね……ん、どうかしたのかね」

「な、なんでもないっす！ 続けてください」

持っていたタオルで顔を覆っている金架を不思議に思ったシルクだが、立ち上がり、こちらへ歩きながら、そのまま言葉を続ける。

「汝には悪いのだけれど、諸々の準備が、必要な為、とりあえずはもう1週間程滞在して、その後は飛行機で、日本に行くつもりだよ」

「……ってか、飛行機？ あれ、魔法とか使わないんすか……」

「なんでやねん」

ようやくタオルから顔を離れた金架。その目が赤いのは、瞳が紅いからではなく。

「まあ、先ず助けてくれた、ささやかなお礼だと思ってくれたまえ。外国旅行、初じゃないのかね」

「おお……はい！ 外国は行ったこと無かったっす！ 遠出って面倒で」

「だね、それには賛同するよ。大丈夫、偽造パスポートと、偽造出入国カードに、抜かりはないよ」

「……それ、魔法っすか？ もしそうだとしたら、かなりしょーもないことで使ってるっすよ……」

「まあまあまあ。細かいことを気にする男は、嫌われるよ」

少しの笑みを浮かべてそう言う金架に、シルクは間一髪入れずに言葉を返した。

彼は本当に、嬉しそうだった。

「んんー……じ、じゃあ観光観光！ 海行きやつしよう！」

「無駄に丁重に断ろう」

「え、なんで?!」

「私は泳げないのだよ」

「……マジ？」

「私を殺したかったら海へ、連れて行くと良いよ……あ」

「物騒つすよ……」

と、彼がシルクの方を向いた時、驚愕のあまり金架は目を見開いた。

先程シルクが嘆詞を上げたのは、彼女は歩いている途中、まるで自身を守るように包み込んでいた長いシーツに足を取られて躓いたらしい。世界最高の魔法使いというわりには、結構色々ズレているしボケボケだ。

重要なのはそのあとである。

彼女は起き上がる為に自分の手で床をついて顔を上げた。当然シーツは床に落ちたままである。自身を包んでいたシーツの下にはまた白い服……と思ったのも束の間、白い服ではなく白い肌だった。クルシマ・シルクは何も纏っていなかった。すっぱだかだった。

「つて、なんで服着てねえんすかああああ！」

「ん？ ……おー……さあ？」

マジ顔だった。マジらしい。

「アンタ何でも知っている世界最高の魔法使いでしょうがぁ！」

「無知な方が、幸せなこともあるもんだよ。真実、ばかり、追い求めて彷徨つより、愚かでいたいもんさ」

「なんつでそう飄々と喋れてんすか！」

「汝はよく叫ぶねえ。それにしても、何故身共は、服を着ていないのだろう……ん、もしか、汝が身共を全裸に剥いたのかね」

「んなわけあつかー！」

顔を真っ赤にしながら、金架はダダダとクローゼットの方へ突っ走り、勢いよく開け、中にあった真っ白いバスローブを持つと、わざとらしい笑みを浮かべるシルクの元へ乱暴に投げた。

「それ着てください！ ったく、ビックリつすよ全く！」

「汝よ」

「なんつすか！」

「これは、大きすぎる。開かる率が、上昇するぞ」

「知らねーっすよ！」

単調な口調。だが、かなり悪戯好きに面白がっているように聞こえる。

「それでもって、いちいち可愛い。」

「じゃあ、服を、調達してきてくれたまえ」

そのほんとに大きいらしいバスローブを着込んだあとシルクは言った。

「……………」

「この宿泊施設から、出るために、身共は、バスローブを拝借するわけには、いかないだろう？ 身共を助けておくれ。汝は身共の為に、生きているんだ。人は弱さ故に、誰かの為に生きて、いるんだよ、頼む」

「……………あー」

「まあ、そんなつもりなつて、綺麗事を並べているようだけど、綺麗の方が良いと思わないかね。その方が、人は欲しがると思うよ」

「はあ」

「ついでに、稀生も、とっ捕まえてきておくれよ、腹が減っては戦は出来ぬらしいし」

「え、あの黒子猫食用…………？」

「非常食だよ」

「えー」

「冗談だよ」

「……………」

「稀生は初めての場所では、迷いやすい子なんだ。それに、あの空間から、出たばかりだしね」

「……………じゃあ、行ってくることにします」

感嘆の言葉も出ない金架に、シルクは言った。

「金架金架、身共はね、空間あそこには、百年位いた気がするんだよ」

「冗談に聞こえませんか」

また黄昏れるシルクにそう言って、金架はベッドから立ち上がった

た。そしてバスルームへ向かう彼を目で追いながら、シルクはそのまま語り出す様に口を切る。

「そうそう、たまに、あの世界には月が通ったよ」

「月……？ それは一体どうゆう……」

蛇口から水が勢いよく出る音がした。彼が洗顔をしている。

「よく解らないけれど、あの真つ白い空間せかいに、時々、灰色の三日月がぼかん、と浮き上がることがあって、夜空を通過するように、現れて、消えていくんだ。身共はそれを、夜が来た、と思うようになった、と言つか、自己暗示のようなものをした」

「……………」

「その月が次に現れたら、きっと外に出られると、そんな幻想を抱いて、月がくる度に、あと一夜で？ もう一夜？ と、祈るように月を眺めていた。月が沈んで、きつと、太陽が現れて、それまでに夜明けまでに、生まれ変わりたいなあ……って、何度も、何度も」
先程までというか、呑気で可笑しな事しか言わなかった彼女は、どこへ行ったのだろうか。

今では、何かに思いを馳せているかのように、うつとりとした表情で、幻想的で神秘的な世界を漂っているようだった。

何か、とは、やはり、あの真つ白い空間のことなのだろう……彼女を縛った、彼女を愛した、あの世界、漂う空間。

「めぐり来る明日を迎え撃てれば、私の心は満ち足りる……いいかい、金架。良い薬があるからといって、毒を飲んではいけない。明日があるからといって、今日をいい加減に生きてはいけないのだよ」
「う……は、はい」

突然の悟りにドキリとはしたものの、しっかりと返事を返した金架は、少し髪を整えた後、黒のチョーカーを付けて、エナメルディングブーツを履き、シルクを少し気にしながらも、本格的に出かける準備を始める。そして、気分的に外したいアクセサリ達を外していると、

「ところで汝も若いねえ。そのギンギラギンは、付けてて、傷みと

か、感じないのかね」

「ギンギラギンで……え、えー、慣れたっすよ」

「おやそうかね。慣れは怖いよ、愛にも慣れちゃいけないよ、あつはっは。それにしても汝、そんな稀生のような、全身真っ黒な装いでは、この炎天下の中、結構苦しいと思うんだがね」

「これしかないでしょうが」

「吸血鬼なのに、大丈夫かね」

「知ってるっしょう、十字架とか大蒜とか、そういうのは大抵映画とかの影響で世界中に広まっているだけで、俺らが怖いのは……怖いのは銀の弾丸とか位っすよ」

「じゃそのギンギラギンは耐性づけかね」

「え？ いやー、趣味っすけど」

「……まあ、汝は本当に、うん、吸血鬼らしくない吸血鬼だね、汝、どこぞの子爵かね」

「なんでそうなるんすか……」

一通り支度が終わった後、財布を持って入り口のドアに向かおうとした彼に、

「朝食バイキングが、終わるまでの時間に、帰ってきておくれよ。」

朝食時に、観光とか魔王についてとか、話してあげよう。問題は程々にね、行ってきなさい」

そう言っただけで柔らかな笑みで手を振るシルク。

「い、行ってくるっす！」

しどろもどろに彼女に言い、ボタン、とドアを閉めた後、カチャ、と幽かにロックのかかる音がした。自動ロックだった。

……………。

『行ってきなさい』

行っただけじゃい。

なんか……久しぶりに言われた気がするなあ。

明るい廊下を歩きながら、1人考え事を始める金架。
不意に右手の甲を見る。

何の変哲もない、だが稀生により流血していたはずのその場所。
今回は、治るの早かったな……。

いつもはどんな損傷でも最低でも半日はかかっていた、怪我の治り。短時間による自己再生機能と自己防御機能のフル活動、マクロファージの大量発生……のような。

人間の自然治癒能力ではなく、人間をはるかに凌ぐ吸血鬼の治癒能力、高度な再生能力。

健康優良児なのは確かに素晴らしいんだけどな。

生まれてこのかた風邪も麻疹にさえもかかったことのない彼は、次の心配をする。

そっか、家に連絡しなきゃな……戌亥、に。……ちゃんと、家帰ってるよな……。多分この時間は起きてねーだろうし、ぶっちゃけあの空間に入った次の日だから、今日は、平日か。だからセカイは学校だし……。てか俺完璧学校サボりだわ……。学校にも連絡しねえとなあ。1週間だから、インフルエンザにかかった、とか？シルクのことだから、偽の診断書とか用意出来そうじゃね？……。ロビ―とかで電話借りねーとな、携帯家だし。飯食ったあとで良いかな……。……。

……あれ、シンガポールって事は日本円通じんのじゃね？あ、換金？えっと、シンガポールドルにしてもらえば……。って、そういやあ俺、英語喋れねーぞ！

1番の問題だ！

うっわあ誰か知ってる人いねえかな……。……いねえよなんてって外国だよ。

シルクはあんなだし……。今から部屋に戻るとか、やべえ。

誰か、誰か！

そう、長い長い廊下で右往左往四苦八苦しているところだった。
「あれ？」

無調子な、知っている声でした。

無表情な、知っている人がいた。

「……カナちゃん？」

昔、屈託のない微笑みをくれていた、あの可愛いかった頃からがらりと色々変わってしまった、小さな彼女。

相変わらずクールでドライな表情を浮かべている、現在日本にいるはずの家族が、そこにいた。

神藤セカイしんどうだった。

005 Float World (後書き)

ご一読、ありがとうございました。

何か今回は無理矢理な感じがします。稀生は、シルクは、戌亥は、
そういう奴らです。

さてさて、この曲は本当に大好きな曲の1つです。

ゆりっぺの優しい歌声、素晴らしい音色、大絶賛っ。

七さんの作詞は凄いなあ……と改めて感嘆出来ます。

大好きだ、GARNET CROW！

「カラス、ね……そんなこと言われてもな」

と、本当に涼しい顔をして宝船室はそう短く答えた。

雲一つない青い青い空の上でキラキラと照りつける太陽の下、四方八方からの熱、どこまでも続く砂、砂、砂。なんたってその世界で1、2を争うほどの広さの砂砂漠、影も幻想もなく日中が長く、湿度と上からの直射日光とクラクラするような眩しい光、熱い大地。そんな中室は顔しか出ていないようなマントですっぱりと身体を包み込み、熱を集めているはずの黒を基調とした服を纏っているにもかかわらず爽快感な言動だった。

魚々子はというと、肩まで出している真っ白なワンピースにもかかわらず体中が熱く汗が頬を伝い、銀色の首輪にまで伝う。一見重そうで実は意外と軽いその首輪は実はひんやりとしているらしいのだが、まだギリギリ熱射病防止の帽子があるにしても、暑過ぎるらしい。細い足はヒョコヒョコとふらつき、蒼の瞳は潤み頬を染め、けれども一生懸命歩いていていた。ローテンションの割に、言動はハイテンションだった。

その真横を歩く宝へ魚々子は言う。

「みず……そう、水だよ！　やはり生き物として生きるのならば水は重要必要不可欠だね！　ありふれた当たり前の存在だけれど、無くてはならないんだよ、何時でもね！　もう今だったら水の中に飛び込んでも良いよ、魚々子の身体の中の水分を100パーにしても構わない、なのに魚々子の水分はきつともうすぐ50パーを切るよ、もう酸素と水素だけだよきつと！　ありがとう、水素と酸素、ありがとう、水素が生まれた、きつと生んでくれた大宇宙！　アルケよ、魚々子をどうにかして助けて！」

「……大丈夫？」

宝のリアルな心配だった。

「もう何でも良いからオアシスじゃなくてもいいから、骨休めの出来る影があれば、涼しい所ならどこでも良いからどこか素晴らしい夢のようなパラダイスはないの?!」

「あるね」

「そつかそつかやつぱり3日中歩いていたんだから流石に村とか無ければ誰もこんな砂漠を横断してまで海に行こうとは思わないよね……え？」

と、魚々子は途中で言葉を止めてずっと下を向いていた顔を素早く上げた。

ほんの遠くに、あともう少しだけ歩けば良い所に、たくさんの緑が茂っているのが見えた。人が住んでいそうな家々も見えた。そして、その周りを碧い碧い湖がグルリと囲み、島のような村を包むようにキラキラと輝いているのが見えた。そして、一端で河になり、遠くまでそれが続いているのも見えた。何故この砂砂漠がアネクメネと呼ばれているのか疑問が生じるほどのエクメネ、オアシスだった。

「君はずっと砂ばかり見ているから無駄口が多くなるんだよ。実は少し前から見えていたんだけど、ナナコが音を上げるまで、ちよつと黙っておいたんだ」

輝かしい笑顔で言う宝。

「タカラ……。そこは笑顔でいう所じゃあない……」

魚々子はまた、顔を下げてそう言った。

「今日も広がるライトブルー！ ホットな気候と私の情熱！ 溢れ漲るグリーンネイチャー！ みずみずしくスイートな？ぎ立て果実たち！ そうこの場所は、終わりなきパラダーアイス！ ……お、ちよつとちよつとそこの色白アーンド漆黒バケイショナー？ 美味しい水にふかふかベッド、毎夜繰り返し返すパーティタイム、我が家の新鮮フルーツたちは、いかがかしら？！」

それが自分たちに言われていることだと理解した宝と魚々子は、

即座に意味が解らなくて固まってしまった。

……なんだ、この変に威勢の良いお姉さん。

2人して同じことを思った。

ストリートブラウンの髪を包むバイオレットカラーの薄いフード、勝気そうなトパーズブルーのツリ目、フードから垣間見える金色のアクセサリが首元と腕と耳を飾り、灼けた褐色の肌がよく見える艶めかしい露出の多い装いと、彼女は砂漠^{ベトウィン}住民らしい異国的文化であふれていた。

そして言ってることが訳わかんない。

気さくだが、テンションが普段の魚々子のようなようだ。

老若男女様々な人々が活気に行き交うその通りの、太陽を反射して更に眩しい真っ白な石畳の1階部分が青果屋の建造物前。店頭には色取り取りで光を十分に浴びた新鮮かつ豊富な青果物達が整然と隙間無く陳列しており、カラフルで見えているだけでも楽しく、人々の足を止め人々の目をも保養している。

「なーんて、ていうか旅人よね？　そしてヒマそうね！　あのね、私、正直な所貴方達の旅の話を、異国の話が聞きたいのよ！　勿論ただじゃないわ、此処に並べられているどれでも好きなフルーツ達を食べながら私も貴方達に面白い話を聞かせてあげる、店番は彼……や、もう閉めちゃう、歓迎するわ、いえーい、一石三、四、五鳥……！」

「はあ……」

「それってほんとぉー?!」

未だに受け入れ体勢のなっていない宝を後目にその女性の言葉で心も身体までも一気に生氣に満ちた魚々子は、子供らしく目をキラキラと輝かせ喜色満面で高揚し、身軽にピョコピョコ跳ね始めた。
「わぁーいわぁーい！　甘い、果物……そうだよなそうだよな、欣快に堪えないね！　なにこれ天からの素敵な贈り物？　えへへ、古代ギリシャでタレスが『万物のアルケーは水』とか言っていたから、ある意味あっているけれどさっきそのアルケーに神頼みをした

ら本当に違う意味でもう恩恵を授かってしまったよ！ 火とか数とか色々がアルケーと説かれているけれど、もう私はアルケーに全身を委ねるよ！ 合点承知い、任せて、ナナコが色んな事お喋りする！」

「あら元気良いわねー、久しぶりに楽しくなりそうだわ！ 私の名はカーミリアンよ、リアって呼んで」

「私はナナコだよ！ ナナコで良いよ、宜しくね、リア！ ……ほら、タカラもしっかり挨拶しなきゃ駄目でしょ？」

「え？ ……ああ。えーっと」

なんか話がどんどん進んでいつているんだけど。

ブンブンと握手をしている彼女たちに、出遅れというか、完全に流れに乗せられた宝はとりあえず目の前の女性に右手を差し出した。「僕は宝船宝です、タカラで大丈夫です」

と、タカラはその際リアをジッと見つめた。その視線に直ぐさま気付き、目がバチツとあったリアはしどろもどろに「ど、どうしたのタカラ君」と尋ねると、タカラは「いえ、すみません」と視線をふっと逸らし、そして言葉を綴った。

「以後宜しく、リアさん」

「——ドッカンだったの！ 太陽の下巨大な破裂音と共に轟音雑音が鳴り響いて、もう観光気分だったタカラは啞然としてその場で立ちすくんでしまったの！ 旅行先の事故っていうのは本当に災難だよ。でもそこに格好良く満月をバックに夜空からムーンサルトで舞い降りたナナコがね、あむあむ、リア、これとこれ、なんてい

「果物なの?!」

「ふふ、どちらもカジュールよ」

「え?! 確かに色は一緒だけれど……もしかして、熟した期間が違うとか?」

「そうよ。品種や産地などによっても異なるけれど、未熟なものはリンゴのようにサクツとした歯ざわりでほのかに甘くて、熟すと果肉は凄く軟らかくて甘味が強い独特のトロツとした食感になるの。

乾燥させてドライフルーツにしたものは、非常に甘くてねっとりとした食感があつて、私はこのタイプが1番好きね。冷やしてそのままも最高だわ!」

「うんうん! ナナコは冷えた柔らかいのが好きかな。これこそほつぺたが落ちる賜物だね! それでね、こう、ポーション! パシャーン! とその悪の秘密結社であるスパイとか兵士とか敵を次々と薙ぎ倒していったナナコは超格好良かつたんだよ! ね、タカラ!」

「そうだね。けれどもナナコ、フォークをこっちに向けないで」
のんびりと。

話に入れないタカラはのんびりと、紫色のカジュールの実が刺さったフォークをこちらへピシツと向けている魚々子に注意する。右手で古いテーブルに頬杖を付き、左手でフォークをペン回しのように弄び、ちよつと眠そうな、笑顔。

その部屋は表の南国太陽ムードとは打って変わって薄暗く言つてしまえば粗末な部屋だった。だがそんな部屋でも少女達の話は咲くに咲き誇つた。

「タカラ君、どうしたの?」

「そつだよどしたのタカラ! 一緒に喋ろうよ! 話に入ってきてよ! んー、でもそう言えば真つ正直に言つて、タカラは本当に人と喋らないよね! どうして? 人と関わるのが苦手なの? そんなんじゃあ人間社会生きていけないよ、仕方なくお付き合いをしないといけない時もあるんだよ、今は違うけど! いざっていう時に助け合える友人を持たないと長く生きられないよ!」

「いいよ。どうせ僕、大学にも友達いないから」

笑顔で優しく応える宝。

「いーやあー！ タカラがパワフルネガティブだあ！ う、ううん…… タカラはそう思っていないかもだけれど、きーっと周りの人達はタカラを憧憬の的的な眼差しで一目置いていて、きっーと友達だと思っっているよ！」

「友達を作ると人間強度が下がるって、元吸血鬼の偉人が言っていた気がする」

「あは、タカラ君、まだ若いんだから諦めては駄目よ！」

「あっはっはっは」

きつと面白い冗談だろうと笑うリアに、力無く宝は笑った。目が笑っていない。

宝はそのまま視線を風の通り抜ける小さな窓の外へと移した。

船が。

船が見えた。

深く情熱的な赤のグラデーションを背景に、眩しいほどの白い帆が掛かった帆船が見えた。横帆で、基本の全装帆船^{シップ}で、ブリッグの型の小さな小舟が、こちらからはつきりと見えた。

少し色褪せた布がかけてあり、まだ未完成なのかそのまわりにマストの一部や木片などが散らばっているのも見えた。

「リアさんあの、あの船は——」

「ん？」

と、リアが聞き返した時だった。

「くおーごー！」

聴き慣れない音そして。

1匹のヒトコブラクダが、突然勢いよく入ってきた。

2メートル程の巨大なラクダがギリギリ部屋の中にいて、しかも、砂埃を避ける為という睫毛が普通より異常に長く、刺さりそうなのにつて、そして真っ黒な瞳がとてもつばらだった。

「あ、彼はラクダのナディム。私の友達で、砂漠の船よ。なっっちゃ

んって呼んであげて」

「メスなの？」

「オスよ」

「あはっ、かーわいいー！ なっちゃん、ちっちっち」

「ぐ……ちよっと待ってナナコ先に僕の心配をして」

魚々子とリアがゆったりのほほんとしている中、宝の目線と声は下からだった。

ラクダの右足の下敷きになっていた。顔を伏せている状態で、動かない。

「きやあー?! ごめんなさいタカラ君！ なっちゃんどいてあげて！ 全く、貴方の男嫌いはよく解らないわ！ ほら、早く」

「くるごあー」

リアが何と言おうとナデームは動かない。というかのんびりと喉を鳴らし誇らしげにドヤっとしていて瞳は更に輝きを増す。

「なっちゃん！」

「大丈夫だよリア。杞憂に過ぎないよ、タカラはね、すっごく強いからこれくらいじゃあ死なないよ！ だってナナコをずっと守ってきてくれたんだ、最強伝説は始まったばかりだよ！ 美大生を甘く見ちゃあ駄目だよ、あ、それでもまだナナコの方がムーンスルトは得意かな！ タカラはちよっと抜けているからね！ でもまだまだ全然ティーンエイジャーだからね、ナウいよ！」

「でもなっちゃんは、昔大勢の山賊を相手に1人圧勝していたわ……」

微動だにしないナデームをポカポカと叩くリアに対し、魚々子は満面の笑みと力強い言葉でちよこんと立っている。リアは宝の方へ視線を向けてみる。ナデームは何故か右足で軽めにゲシゲシと宝を踏み始めた。その度に宝はぐえつとか、ぐあつとか辛うじて叫んで地味に動かない。

……。

「ははっ……やるねなっちゃん。でも僕はこれくらいじゃあぐえっ」

「もー、情けないなあタカラは！ 全く、色々な名前が廃れちゃうよ？ んー、なっちゃんお願い！ タカラがリアルに死んじゃいそうだからどいてあげて？ タカラは今ここで死ぬべきではないんだよ、これから先、生き別れの双子の妹と出会って、でも再会の後すぐに敵に殺されちゃって実はクラスメイトが敵の幹部で、えーっとえーっと、100年前に三行半を突き付けたはずの自分の弟子からの復讐戦で戦って、実はそれは中ボスで本当の敵は自分の父だったというそしてその父は3回変形して一番最後の奴にやられるっていうRPGな感じで死ぬんだから！ うわ、かっこいいー！ ナコはタカラを見直したよ！」

「くーくかー」

「……ナナコ、そんな安い設定で僕を殺さないで」

「くるくふぁー」

「そんなことないよ！ 誰もやったことのないことだよ！ 復活の呪文なんてサイトに沢山載っているよ、それでもその一部始終全ては私が稗史として後世に伝えるからさ！」

「ふふ、あはっあははは」

と。

2人のやりとりを見て、リアは思わず笑ってしまった。腹まで抱えている。それはそれは、無邪気な子供のように。

「あは、あはははは、あー、もう久しぶりだなあ。こんなに笑ったの！」

「え？ リアは今までも超絶笑っていたよ？ 相好を崩すなんてことなかったし、完爾として笑っていて、凄く楽しそうだったけれど――」

それを聞くと、リアはまた妙に「そ、そうね！」と慌てふためいた。「働き詰めで疲れているのかしら！」とまた笑顔になる。宝はやっと退いてくれたなっちゃんから抜け出した後砂埃を少し払った後、再度先程の窓の向こうの船を見ていった。

「リアさん、あの船見に行ってみても良いですか？ 建築科のこと

は知識だけのものなので、その実態を見てみたいのですが」

「え？ あ、で、でも、あそこ、えーっと、幽霊が出るって言われてる……そう！ いわゆる幽霊船的な？ もう夕方だし……未完成だから、物が倒れてきたりしたら危ないかも……この前私も危なかった時があつたし」

「それってほんとあー？！」

また、魚々子が先程のように目をキラキラさせながら満面の笑みになった。今度は手のフォークを皿に置いていたので、安全なそのままブンブンと両手を回す。

「幽霊！ ヒュ〜ドロドロ、うらめしや、ってやつだね！ うわあ、ナナコ初めて幽霊見るー！ 幽霊船と言えば柄杓、柄杓を用意しなければ駄目だよ！ 科学的根拠とか超常現象とかどうでもいいから、やっぱり自分の目で見たものを信じないとね！ ど、ドキドキの対面だね……やっぱり銀の十字架を付けていくのは、確かに厄除け的なノリにはなるけれどそれはきつと幽霊に失礼だよ！ 幽霊に逢いに行くのなら、それ位の礼儀にはかなわなきゃね！ ねえねえリア！ 早く行こうよー、タカラは美術的センスとかを見に行くだけだから、放っておいて幽霊トークに花咲かせよ！ いや、幽霊の理にかなって、花を枯らすのかな！？ あれリアの船なんですよ？ 見せて見せてー！」

「え……えーっと」

「リアさんマジでお願いします。建築科と言っても造船技術はあっても先ず船を造った方は見たことがないんです、竜骨の設計図さえも本でしか見たことがありません。これは好機と言っても過言ではありません」

「でも結構拙い、わよ……」

「何を仰っているんですかリアさんらしくもない、素人だろうと専門家だろうと創ったモノには全てその人の想いや魂がこもりそれを知ったり見たり聞いたりすることはとてつもなく、というか素晴らしきことで、先人の道を歩めて可笑しい方ですがその技術を盗

むことができますし、芸術は数学者にしか解らないなんて事はないし僕は僕なりに見たいんです。芸術家の、僕の意欲と好奇心は動き出したら止まりませんよ、今だったらなっちゃんを投げられます」

「わかった、わかったわ……」

大人しい少年というイメージだった彼の早口だけれど正確だけれど意味の分らないけれど真っ直ぐに瞳を見つめてそれが本物だというような希望と、幼き少女の確固たる想いと憧れと、その満面の笑みの二重攻撃を受けては引き下がれない。

この2人は同じような好奇心の塊なのだな。

とリアは思い、

「分かったわ、2名様、格安造船見学ツアーへご案内！　いくわよ、なっちゃん」

少し力んだ声でなっちゃんの手綱を持つと、手招きで宝達を外へ呼んだ。

そこは少し歩いた所にありすぐに着いた。

窓から見えた小さな帆船。

けれども、だからこそその存在感は圧巻するほどだった。

シンプルで慎重すぎるほど丁寧な造り、一般よりは低いが夕焼け空へと伸びるポール、鮮やかな朱のグラデーションに染まりながら、触らなくても解る頑丈さがそこにあった。辺りには木片が当然のようには散らばっており、船には数本の太い木材が立て掛けられている。

「おお……」

と、宝は感嘆の声を上げてしまった。不覚にも、だ。

「うおー！　すごい！　リア天才ー！　タカラよりも天才の域だよ！　それにすごく綺麗！　凄いね、この船は愛されているんだね、素敵だね！　リアに会えたからこの船を見ることが出来たんだ、砂漠の道を選んだからリアに会えたんだ、タカラと旅を続けていたから、こんなに素敵なことが起こったんだ、凄い！　この世界は、全部素敵で出来ているのかも！」

「いやぁー……ナナコ、大げさだよ」

「そんなこと言ってもダメだよタカラ！ 私の好奇心は止まらないよ！ 凄いな、この世界は美しいモノが沢山在りすぎて嬉しいな、そう思えるって凄く素敵だね。そしてそれを誰かと分かち合えるなんて、何て素敵なことなんだろう！ うわぁ困った大変だ、素敵な物が無限過ぎる！ どうしようどうしよう、悪いことと良いことは続かないって言うけれど、確実に良いことは続くね！ あ、幽霊見なきゃ！ 中に入れば見えるのかなぁ？ ねえねけどうなのなっちゃん、リア！」

「わわ、ナナコちゃん、そんなに引つ張らないで！」
「くるるふーっ」

リアの手とナディムの手綱を握り勢いよく走り出す魚々子。宝はそれを横目で見ていた。

その次の瞬間――

「え？」

――大人数が勢いよく走ったからだろうか、地面に揺れが生じその立て掛けられていた木材達が一斉に音もなく、丁度前を走る彼女たちへと崩れ倒れかけるその間。

「ナナコ！」

宝は必死で手を伸ばした。

だが届かない、遅い、遠い。

脳裏にあの赤が過ぎる。

また、あの赤が。

――また、助けられない――？

魚々子のたった小さな一言が鼓膜に染み込み、砂埃と巨大な轟音を立て、木材達は完全に崩れていった。

確かに、いくつかの木材達は地面に転がっていった、いくつかの

木材は止まった。

——いや、止められている。

見えたのは、地面にペタンと座り込んでいるリアと魚々子。雄叫びを上げるナディム。そして、彼女たちがまともに受けるはずだった木材を両手で掴んで押さえている1人の青年。

その青年は砂漠住民らしいだがそれ以上のラフな格好の細身で、優しい笑みを浮かべていて、その両手で軽く木材を押し、木材は音を立てて横に倒れた。

そして、遠くの夕焼けが綺麗なほど透き通っているその身体。

ナナコは目を見開きゆつくりと上からその青年を見た。

足がない。

「ぎ、にゃあああああ？！ お化けえ？！..」

半泣きでリアにしがみつく魚々子。宝が駆け寄る。リアは呆然とその青年の姿を見つめ、そしてか細い声で呟いた。

「.....うそ.....ライド.....？」

その青年はまた小さくと笑うと、スッ.....と色褪せるように消えていった。

それは、とても切なそうで悲しそうで、儂い笑顔だった。

ある日のことです。

この村に、顔は良いけど甲斐性無しな青年がいました。

しかし彼は働き者で、毎日仕事に明け暮れていました。

そんなある日、彼の村に1人の旅人がやってきました。村総員で歓迎し、宴が開かれ、皆で夜半まで盛り上がり、旅人の色んな異国の話を聴きました。

その青年はその異国の地に惹かれて焦がれ、いつか、出たことのないその村から違う場所へ、どこか見知らぬ場所へ旅立ってみたいと思うようになりました。

彼には将来を誓い合った娘がいました。

恋華やぐ夜半に、彼はその娘に言います。

“いつかこの腕で大きくて素敵な船を造るんだ。この村から、この広大な砂漠の外へと出るんだ”

そうして、その娘とだけの秘密にして、船を造るために、彼は毎日働き続けました。

そうして、島を出る日を胸に、彼は生きました。

“ええっと、異国の人は何て言っていたっけな。そうそう、す……ストローラー？ ドリーマー？ まあいいや、異国の言葉は面白いけれど難しいね。船はまだ完成していないけれど、夢を思い描くことは、とても楽しい、そう思わない？”

彼は、来る日も来る日も懸命に働きました。

彼はどんなに忙しくても笑顔を絶やさず、決して夢と希望を忘れませんでした。

その美しい生き方を忘れませんでした。

その美しい生き方に、娘は憧れていました。

『外の世界は、どんな所だろうね。楽しみだ、楽しみ過ぎて眠れない。早く船に乗りたい。出来上がったら、お前を乗せて、“海”まで行きたいね』

そして。

そして、その船が出来る前に、彼は、永く眠った。

「——不慮の事故だったわ。落ちてきた部品から、彼は逃れられなかった。過労死と言っても言い。働き過ぎ、違う、働かされすぎだったの、彼は。私と同じように、物心ついた時から両親が、家族がいなかったから」

その船に向かって歩きながら言うリアの言葉を、宝達は静かに聞いていた。

「お互い唯一の家族みたいなものでもあったわ。だから気付かなかったのかもしれない、気付かなかったのかもしれない、お互いのこ

とを」

その船を見上げてリアは更に言葉を続ける。

「私は……彼の想いに応えられるのかしら？」

その瞳は一心に船を見つめていた。その想いは、一心に彼へと向けられていた。

彼女の想いは、本物だった。

それに答えるように、宝はリアの元へ歩み寄った。

「ええ、そりやもう。これ、その机の上に開いてありましたよ」

「これは……」

少し古びていて色褪せた設計図だった。船の近くに設置してある小さな机の上に転がっていた。その細部まで細かく書かれた船の設計図を愛おしくなぞるリア。そしてその中に、異国の言葉で書かれた拙い文章があるのを見つける。とても短い文章。でもそれは、間違いない彼から彼女に宛てられたものだった。

ライト
カーミリアン

その短い漠然とした文章を読み、リアは自然に、涙が溢れた。

嗚咽。嗚咽。

小さな嗚咽が繰り返され、リアは静かに崩れ落ちた。

どうしてすぐに気付かなかったのだろう。

本当に、本当に私は臆病だったから、彼の死に責任を感じていたから、恐くてこの船に近づけなかったから、私が触れてはいけないものだと、勝手に思ってしまったから……。

「……ごめ、ごめんね……」

か細い声で、そのまま涙を流し続けるリア。だが、すぐに彼女は目を強く拭い、顔を上げ、笑顔で宝達の方を向いた。

その設計図を胸に当て、彼女は意を決したように言った。

「私、彼の船でこの村を出ようと思うの。彼の夢は私が叶える、一緒に叶える、そして……『海』へ行くわ！」

「へえ……」

「おー、リアが人生に踏ん切りを付けたようだよ！？ いいねいいね、人が夢や目標を持ってそれに向かって突き進もうとしているの

は！ 何かを始めるに遅いなんて事は絶対ないんだよ、うん！ あの幽霊のお兄さんも、きつと成仏出来たよ、リアが無事で良かったときつと心から思っているよ、あの人は船もリアも心から愛しているんだね！」

「な、ナナコちゃん……そ、そう面と向かって言わないでよ……」顔を真っ赤にするリアの元へ、キュピンとした瞳のナデームが寄り添う。

「かーがーふあー」

「ふふ、勿論ナデームも連れていくわよ。私の頼れる護衛で、素敵な旅の同行者で、大切なお友達だもの」

「くっふふーお」

「さあつてーとタカラ君、ナナコちゃん。この件に少しでも首を突っ込んだんだから、ちよつと支度を手伝ってくれないかしら？」

「良いよ良いよ、合点承知い！」

「かーふあー」

「それはそうとリアさん店はどうするんですか」

「土地ごと売って旅費の足しにするわ」

「思い切りますね……流石、店を開いていただけのことはあります」

「当然！ 女はこれくらい、ど派手にかますわよ」

そう叫び、白い布を3人で一気に船から翻した。その立派な全貌が明らかになる。未完成と言っていたが、全くそれを感じさせないほどの美しい船だった。

心も身体も、言葉にも想いにも、彼女には未練や後悔はなかった。ただそこには、確かで確固たる信念が、その瞳に映っていた。

「出発は、明朝……広がるライトブルーの元！」

朝陽が昇った。

柔らかで優しい光だった。

まるで、これからの旅を祝福してくれているかのように。

「彼が旅立つのは、夢が叶うのは、今この日です。頑張ってくださいね、リアさん」

「ええ。本当に、感謝してもきれないわ」

「大丈夫！ ナナコが教えた旅の心得20をフルに活用すればとても楽しい旅になるよ！ なっちゃんという素晴らしい騎士がいるからね！ 頼んだよ、なっちゃん！」

「るっふ！」

「それでは、良い旅を。また会えることを楽しみにしています」

「タカラ君達もね。きつと、また会えるわ」

彼の小舟が。

河の上を、動き始める。

少しだけ風を感じて、朝の冷たい空気の中、ゆっくりと河を泳ぎ始める。

ライド、貴方と、貴方の船と共に、この村から広い世界に出るわ。

貴方の夢は、私の夢は、叶ったと、そう思うの。

さあ、今君と、この世界を泳ごう。

「タカラ君、ナナコちゃ……え……あれ？」

後ろを振り向くと、どんどん離れていく岸辺に、宝と魚々子の姿が見えない。

不意に、彼女は上を見た——虚空を、2人の姿が舞っていた。宝が魚々子を抱き抱えた状態で、針路はこちらだった。そしてそのまま、彼らはその船へと華麗に着地する。魚々子を腕から降ろし、何事もなかったかのように、宝は颯爽と口を切った。

「リアさん、正直な所僕はもう砂漠を歩くのはごめんなので、砂漠が終わるまでこの川沿いを乗せていってください。この船を動かした貸して事で」

「ああー！ やっつっぱりタカラも、流石にこの暑さには完敗なんだね！ KOだね！」

「ふあーふあつく」

「は……」

目をパチクリとさせるリア。そんな彼女へ心配そうに頭をすり寄せるナディム。少しの時間が経ったあと、彼女は笑って、ほんとうの笑顔で、いつものように威勢良く叫んだ。

「……OK面舵いっぱい！ ごゆるりとこの小舟に身を任せるがいわ！ この場所は終わりになきパラダイス、今日も広がるライトブルーの下、私は行く、『海』へ！」

人生山あり谷ありだ

私はどこかへ行くだろう

きっとお前は変わってしまうだろう

だが私たちは旅立てる

さよなら、

私の大好きな……リア

それじゃあね

ある晴れた夏の日

彼と彼女の旅が、始まりました――

――Bon Voyage！――

006 His Voyage (後書き)

おはこんばんちは。

久方ぶりの投稿です。

この曲はやはり南国をイメージさせる、明るい歌で、でも悲しい詩で。

ガネクロはこのようなケースが多い気がします。

爽やかで珍しいアップテンポな曲、けれどもとても深い想いが込められていて。

私は、この曲にとっても神秘的な何かを感じます。

今回もお付き合いありがとうございました。
それでは。

007 空色の猫

少しだけ無理をして

誰かに合わせてみたけれど

それほどにね、この世界は、狭くもない筈でしょう
それほどに、猫の世界は、狭くもない筈でしょう

いつか寄り添うように、

その影が2つ並ぶと良いね

ゆっくりでも、いいから

きつと、上手くいくよ

教会の鐘の音が、遠くから、はるか遠くから鳴り響き、かすかに
聞こえてきた。

早朝だ。

朝陽は優しく大地を照らし、空は澄んでいて、どこまでも広がる
蒼だった。

「起きた」

抑揚のない幼い声で一言、王様はムクリと起き上がる。厚めの綻
びた布を身体から剥がし、辺りを見渡すと、昨夜の残骸で地上は溢
れかえっていた。瓦礫の周りに数十本もの花火の跡、保存食のゴミ
などもあちらこちらに散らばっていた。

先ずは片付けか。

ゆつくりと立ち上がってその小さな身体を大きく伸ばす。陽の光はまだ弱いが眩しい。自然と王様は目を覆った。眠い目を擦りながら、火を熾し、そこへ湖の水がたつぷりと入った鍋を火にかけ、沸騰した所で火から離して冷まし、やっとのことで洗顔をする。

とても美しい湖だが、細心の注意は払わなければならない。

大きな漆黒の瞳に光が灯り、ようやく彼は覚醒を実感する。だんだん脳の方も起きてきた。

「はあ、相変わらず、どんなときでも真面目だにやあ」

「当然だ。物事には欠片に至る全てに道理がある。それを突き進むのが真つ当な人間の道だ」

「よくわからんにやあ。猫は猫だから、特に気にしなくても良いかにゃんにゃん」

「最低限の一般常識を持つていなければ、この世では生きてはゆけぬぞ、猫よ」

「そーいうときは王様に助けを求めるから大丈夫にゃん」と。

唐突に現れた猫に、慣れているのか軽快に言葉を返す王様。猫は昨日と変わらず明るく元気で王様の周りを踊るように回っているが、彼の方かというと、見た感じでは毅然としているが、やはりかなり内面ではテンパっていた。

朝昼晚いつでも猫は神出鬼没で、その度に彼は一驚を喫する。しかしそれを隠そうとするので、無反応だと彼女は思い込み、猫にとつてはつまらないのである。なので、彼女はいつか彼を魂消させようと考えているのか考えていないのか、挨拶はいつでも唐突だった。

「猫、直にこの国を出る。支度は整っているのか」

「猫はただの野良猫だからにや。旅は道連れ世は情けにや」

「結局私に頼るのではないか……」

このあと彼らは保存食などの粗末な朝食を取り、花火などのゴミを全て湖へと投げ捨てた。それでも水は変わらず美しく、ちっぽけな彼らなどまるで相手にしないようにただそこで碧く光っていた。

出来るだけ使えそうな物を最小限に探して寄せ集め、ひとつのリュックサックに纏める。王様に持たせるわけにはいかないし、自分は体育会系だから自分が持つという猫に、どこでそんな言葉を覚えただんだお前とはと、王様は荷を彼女に預けた。

さあ、出発の準備は出来た。

「そんでーもってー、最初はどこに行くにゃん？」

「教会」

「ああ、ああにやるほど。わかったにゃん。ほんじゃあれつつらーにゃん！」

またここへ戻ってくると思っているのか、猫は案外あっさりと先陣を切った。

あとはもう、城門のあった場所を越えて、外の世界に飛び出すだけ。

終わりの見えない旅へのスタートライン。

後悔はしない。

始まりは忘却の荒野。

終わりは青の桃源郷。

彼と彼女の胸に輝く、たった1つの光をさがして……

彼と彼女の胸に響く、たった1つの歌声をさがして……

ほら、空色の猫が、街を出る——初めての海へ、空へ、いく。

「ねーずみーがちゅーちゅーねーっこがにゃー！　くるくるまわってあっかんべー、にゃー！　いえー！」

「猫、道から外れぬようにな」

「わーってるにゃん！　みつずつみきらきらー、にゃいにゃいにゃ

ところばしごつまみっそにやい！」

歩き始めてわずか、猫は上機嫌に歌を歌い始めた。それは歌詞も曲調も全てハチャメチャだが、聞いていて不思議と悪い感じはなかった。というか、上機嫌な子供とその子供を心配する親、という感じで、旧態依然とした2人だった。

「にやはは、王様も歌おうにやー、楽しいにやあ！……あ、ダメにや。王様、本当に初代と王妃の息子かってくらい歌がぶきっちょーってか下手だったにや！ あつぶねーにやあ」
「ぐ」

知識は、持っているのにな……。

猫が冷や汗を掻くほど、それが彼の完全に不得意なものだった。

……やはり身体的に問題があるんだ……絶対。

とりあえずなんでも成長しない自身の身体のせいにする王様である。だからこそ、猫の方へ目がいつてしまう。

初代のように背も高くない。

初代のように魅力的でもない。

初代のように歌も上手くない。

初代は、もういないのに……。

相手にされないはずだ。

自分には、何も無いのだから。

どこか他人と違うことを自覚していて、他の人と同じように装うのに、それでも気づかれてしまう。

自分が自分であることを隠さないですむ、そんな時を夢見て、そんな相手との出会いを夢見て生きていく。

特異な自分を覆い隠してくれる時と場所と誰か。

傷ついたその分だけ優しさを感じるとか、そんな聞き飽きた偽善者みたいな言葉でも、心から感じているときがある。

でも、どんなに時が過ぎても、自分はきつとまた同じ苦しみを背負って生きていくのだらう。

そしてその苦しみに、背中を押されるのだらう。

それが自分の生き方だから。

その永遠は、耐え難い苦痛のようだ。

心の中にある傷跡を捨てられるとして、本当に自分は、最初から
そう苦しみのない生き方を選んだだろうか？

「王様！」

「うお、おう、猫。どうした」

いつも通り、平然と平然と。

「にゃんかおもしろいもんあるにゃ！」

と、猫が指さした先にあつたのは、どこか風変わりな、華やかと
いうか、金の銅像やら変な顔の動物のぬいぐるみやら虹色の切り絵
やら異常なほどに装飾が施されているプレハブ小屋のような小さな
建物が、草原のド真ん中に位置していた。よくみると、側面には派
手な看板が堂々と鎮在している。どうやら店舗のようで、だがあま
りにも怪しい雰囲気も隠しても隠しきれないというように滲み出て
いた。

「アララ！ 久方のお客さんネ！ 我^{わたし}の名前は楊^{ヨウ}あるヨー。お客さ
ーん、見てって見てってー」

独特な口調のどつぷり太った商人の男がその気さくそうな笑顔で
暖簾をくぐって出てきた。そして猫を一目見て更に言葉を続けた。

「あいやー！ べっぴんさんネエ！ ありやりや、よく見たら猫の
耳生えてるヨ！ しかも蒼い色だヨ！ 綺麗な色ネー。珍し珍しネ」

丸メガネをしつかりと固定し、

「ちよいちよい、七花^{チフア}！」

よく響く声で誰かを呼んだようだ。暖簾の奥から、これまた小さ
な女の子が現れた。金の鳳凰が刺繍されたシンプルな服を着ていて、
その小さな形の割には大人びた表情の少女で、こちらに気付くと小
さく微笑んだ。

「我の娘の七花よー、今年で11、ベリきゅーネー！」

「こんにちは、お客さん。パーパ、来ましたね、お客さんが、たく
さん。良いけいこうです、とても、それは」

七花と呼ばれた少女は、感情も抑揚も入っているが、何故かそれは妙に機械のような口調だった。

「ほら見てみなヨー、綺麗なお姉ちゃんネー、耳がもふもふヨー」

「はい、美しいです、それは、とても。最高です、もふもふ、みちたります、心が」

「にやつはー、くすぐ、くすぐたいにゃー」

3人してじゃれていた。確かに、猫の毛色は城下でもどこでもかなり注目の的であった。父も、あの母だってこの柔らかな感触には勝てないほどであった。その度に猫は気持ちよさそうに身を震わせる。それを見ているのが、とても心地よかった。

そして店主は王様の方へも向かい、まるで我が子のようにその頭をグシャグシャとする。

「はっはー、ボウズ羨ましネー。まだこんなに小さいのに、姉ちゃんについてって良い子ネー、よししょネー」

「ぬ、無礼だぞ……旅の商人よ。それに私は大人だ！」

「強がっちゃって、うちの七花の次のネーちゃんの次位に可愛いネー。やっぱり子供は小さい頃が可愛いヨー」

「パーパ、分かります、とてもそれは。この子は、私より下でしょうか、歳が。とてもしています、しっかりと」

「だからその、お前ら」

「にゃーん、王様はまだまだ子供だにゃーん！ おしごとがある日以外にはさっさと床に就くにゃん、にゃあは大人だから面倒をしっかりと見てあげるんだにゃん」

「美しいネー、姉弟の愛情ヨー」

「……………」

……国でもたまに身体的な理由でからかわれてきたけれど、ここまで悪意がないとどこか切ない。知らないということもあるし、自分はまだまだと言うことなのだろうが、こうなると私が損をしているかのようなのだが……というか、子供ガキの猫に子供と言われたくない。

やはり人は容姿で決められるのか。

流れるままにその場にいと、七花がこちらへ歩いてきた。両手には、その小さな手にすっぽりと収まる位の無色透明な水晶玉が、紫の布に包まれている。

クリスタル・ゲージング

「水晶占い。得意です、それは、わたしが。高めたいです、力を。

お客さん、実験台、栄誉あること、それは」

「え」

「うおーう！ キラキラしててキラキラにゃん！」

猫がその水晶玉をジッと輝く瞳で見つめる。そういえば此奴は光り物が好きなのだ。

「良いネ！ 七花、しっかりと視て、近い未来世界最高の占術師も夢のまた夢じゃないよ！ パーパは奥で仕込みしてくるヨー、お客さんごゆくりネー」

そう言つて、氣立ての良い笑顔で店主は奥へと続く暖簾をくぐつていった。

「はーん、占いかおしりにゃ、はーん、よく城でも王妃様が星占いやつてたにゃあ」

「はい、おこないます、瞑想を、本当は。守らなければなりません、沈黙を、かんぜんな。けれどもだいじょうぶです、別に。祈る、ただそれだけです、簡単。なにを、占いますか？」

「え、ええっと……」

「いいです。おそい、それは、あなた。もういいです、祈つて。日が落ちる、その前に、ただ、祈ってください。特別じゃない、あなたは、祈ります、懲りもせずに。神との意思疎通、ファイト」

「わかったにゃー！ むむむ……はー！」

確かに、最初は胸の前で手を柔らかく組み、目を閉じて祈りの体勢にはなつたものの、すぐにそれは変なモノへと変わっていった。

「猫、お前は一度もミサへ出たことがないんだ、そんな祈りでは」

「ハイ、よろしいです、良いでしょう、大丈夫、それでは、始めましょう、占いを」

「あれでよいのか!？」

「とどけば、おもいが、込められれば、おもいが、それでよいのです、ハイ」

「……はあ」

「はめはめにやー!」

猫はこちらの話を全く聞いていないようで、そっちのけですつと猫式の祈りを何も無い空へと捧げていた。こんな事でこの占いは成り立つのかと思った彼だが、とりあえず話だけは聞いてあげることにした。どうせ子ども騙しだろうと思ったのだ。

七花の方へ目を向けると、丁度、水晶玉を凝視していた顔が上がり、目が合った。

「水晶玉には、映っています、金貨のふくろが。高くつきます、あなたが、望むものは」

彼女は、突然そう言った。

……私が、望むもの？

それは、国の再建？

それは、旅の幸運？

それは、先の未来？

それは、何だ……？

その水晶玉は特に何も変化は見えず透き通っている。

やはり子ども騙しか……それとも、その手の者にしか、視えないのか。

先程とは打って変わって、真面目な顔つきの彼女に、思わず王様は息を飲んだ。

「嘘を吐きません、水晶玉は。かくじつ、それはとても」

「水晶玉には、映っています、閉じた扉が。何か、在りますか？押しとどめているモノが、あなたを」

「言っています、水晶玉は、けれども、水に流す、過去のことを。微笑みます、幸運が」

「告げています、水晶玉は、あなたの代わりに、下しているようで

す、決断を、すでに、誰かが」

惜しみなく続く言葉の羅列。けれどもとても短い、けれどもとても頑強に感じる言葉。その機械的な喋り。

何故か彼は聞き入っていた。

何故だろうか？

「水晶玉には、映っています、夕日が。ない、あまり、じかんが」
「夕日？」

彼は思わず空を仰いだ。まだ空は快晴の午前である。

「あなたたちは、目指している、今その場所、きつと、たどりつけない、すぐに。ただちに、動きます、よろしいです、吉」

「……それは、例えば夜までに辿り着けないかもしれないと、そう言う類か？」

「はい、そうです。きつと、後悔、得ません、せざるを。だから、有言実行、これ、一番です」

「にやーるほど、わーかったにや！ そんじゃあとつとと行くかにや、占いゴチだにゃん、にやーはっはっは」

突如話に入ってきた猫はそう言うのと、豪快に笑いながらルンルンとまた楽しそうに歩き始めた。相変わらず気紛れで気分屋な奴である。それを見ながら七花はしょんぼりと水晶玉をさすりながら言った。

「ああ……もふもふが、悲しいですね、別れは。ありがとうございます、ました、占い、スキルアップです。また、来てください、それでは、いつでも、どこでも、お待ちしています、お気を付けて、とても」
「う、うむ。店主にも宜しく伝えてくれ、失礼する」

王様少し急ぎ気味に深々と一礼し、猫を追いかけていった。2人が見えなくなった頃、店主が丁度店の奥から顔を出した。

「アラ、あの2人いつてしまったカ！。んー、ボウズは賢そうだがまだ子供だから心配だヨー。綺麗なネーチャンは、なんか心配だヨー。旅は危険ヨー、世は情け無いヨー」

そんな店主に、七花はやはり機械のような声で、まるで語りかけ

るように言った。

「パーパ、心配は無用です、とても。私には、見えます、よく。水晶玉には、映っています、2人、離れません、分かつまで、嵐が、2人を」

確かに1日中歩いた。

こんなに遠かったかと考えてしまふほどだった。

目の前に、一堂の教会が聳えていた。ツタの生い茂るレンガ造りの白い壁を基調とした外観、空高く真つ白な十字架が伸び、傾く陽に反射して金色に光る鐘、側面からはクリアストリーとばら窓が窺える奇抜なマゼンタカラーの屋根が可愛らしい小さな教会。

これこそ、朝の鐘の音の主の教会である。

……夜までにギリギリ着いた……先程の占い、本当に当たっていたのか……？

何をそこまで焦っているのか、彼は一度深呼吸をすると猫の方へ振り向いた。

「猫……、済まないが」

「いーんだにゃん、しょうがにゃいにゃん」

「し、しかしだな……今回は、大丈夫だ」

「うん、がんばれにゃん」

そう可笑しな会話が成立したあと、彼は勢いよくその錠前と鎖が力無く垂れ下がっている扉を叩いた。

何故か鼓動が高まり、幻のように、あの波の音が聞こえてきそうだ。王様は出てくるであろう人物を待つ。少しして、扉の奥からパタパタと足跡がきこえ、ゆっくりと扉が軋む音を立てて動いたかと思つと、1人の少女が、その扉からヒョッコリと顔を出した。それ

と同時に、扉の奥から1羽の金色の蝶が彼女の周りを舞う。

大きなワインレッドの瞳、長いストレートブラウンヘアを白いリボンでツインテールに纏め、上品なボルドーカラーのクロードイアドレスに身を包み、首元にさげるは十字架のペンダント、足下から覗くは白いソックスとウエッジソールパンプス。

小さいが凜とした雰囲気で一見ビスク・ドールのような崇高な彼女は、彼を一目見ると颯爽と口を切った。

「なんだ、今日は、1人で来たのかい、王子」

その愛らしい顔に似合わず少し背伸びをした感じの大人びた声で、なんだか上から目線のように偉そうに、その少女はそう言った。

思わず彼は後ろを振り向く。

猫は笑顔でそこに立っていた。

確かに立っている。

それを確認すると、彼は彼女の方を向く。

「久しいな、アンジェリーク・フォン・ブラウン」カルゼン「ブラッサー、祝福の宝石師よ。依然として何も変わらない奴だ」

「そりゃもう、36日位ぶりだよ、君。君だって背丈が全く変わっていない癖に。ま、立ち話もなんだから中へお入りよ。儼は正直な所、忙しい」

異常に長い名前の、彼より少し背の高い、異様な喋り方で彼に全く臆さず普通に振る舞う彼女は、軽い笑みで教会の中へと彼を手招きする。

彼はもう一度後ろを振り向き、そして流れるままに視線を前に向け、金色の蝶に続いて扉の奥へと消えていった。

そこには、外にはもう、誰も居ない。

・
燦然と輝く7つのステンドグラスからは彩りの光が降り注ぎ、高い天井には煌びやかなシャンデリア、身廊が奥へと続く礼拝堂の壁には巨大な十字架、人一人いない広大な、だがそれとして寂寞としている大聖堂。そこを通り抜け、アンジェリークは王様を奥のホワイエへ招き入れた。

程良い広さの空間で、そこは休憩所というよりも、どこかアトリエのような寂しい場所だった。

クリーム色の壁をオレンジ色に濃く染める太陽がその部屋唯一の窓から見え、ブラックブラウンの木の床には無駄に部屋の広さを感じさせるように、少し綻びたモダンダブルソファが1つだけ無造作に置かれており、部屋の隅には小気味良い音で揺れる振り子時計があり、その窓に向かって作業台のような机があった。数冊の本、真っ白な紙の上になにやら沢山のデザイン画、散りばめられたように転がる幾多の綺麗な石々、大理石で出来たフラックスやタガネが置いてある。

これこそが、宝石師アンジェリーク・フォン・ブラウン「カルゼン」ブロッカーの仕事台。

金色の蝶を先頭に、アンジェリークはその机に向かって古びた椅子に座ると、机の中から宝箱のような箱を取りだし、箱の鍵を開けた。ぎゅしりと詰まれた色取り取りの宝石達が顔を見せる。光を反射し、我こそはと光り輝いているようだ。

その箱から一つの何の変哲もない青色の石を取り出すと、その箱を机の端の方へ置き、反対の手に小さなループを持ち、近くに、遠くに、そして光に翳しながらループを通して宝石を視る。

ありふれた石のはずが、不思議とそれは美しい。

何故なら、このような少し離れた距離でもその石に十字架型の光の筋が見えたから。そしてようやく、

「まあ座りたまえよ、王子」

入り口付近で立ち尽くす彼へと入室を促した。それでも視線は寶石から一ミリもずれない。王様はその先程からの違和感を感じながら、やれやれとソファへ足を運んだ。そのソファは座る瞬間沈みはしたものの、独特の締めまりのある絶妙な堅さはとても心地良かった。昔はこの堅さが嫌だったのに。

大人になった、と言うことなのだろうか？

……何だか、変な気持ちだ。

ここは幼い頃よりよく父や母と来ていた。父の深い知り合いというよりは友達という関係で、遊びに來たり仕事を^{ミサ}見せてもらった時には祈りをしに來たりしていた。

だから真つ先に、ここへ來ることを思いついたのだろうか。

もちろん猫とも來ていた。

けれど、今の今まで1回も、猫がこの教会に足を踏み入れたことはない。

なぜならば、目の前の女には、猫は愚か、私さえも見えていないのだから。

「王子、君、話があつてここを訪れたんだろう？　そして何故王はおらん？　お前が一人で來るなんて尋常の沙汰だぞ」

背を向けてなおアンジェリークは面白がるように言葉を紡ぐ。寶石を弄るのが楽しいのか、それとも再会の人物への言葉の羅列か。不自然に彼女の周りを舞う金色の蝶が、さらに彼女の神秘邸な雰囲気^{ミサ}を醸し出しているようだった。

彼はしっかりと彼女を見据える。

本当に、人形^{ドール}のように麗しい少女。

彼は先ず、先程からの違和感を払拭するべく彼女へ向き合うことにした。

「国が滅んだ、先代は死んだ」

唐突にその言葉を告げる。

「私はもう、あの国の王子ではない」

金色の蝶が、彼女の肩へ止まった。

そう、あの国の、王子でも、王様でもない。

猫が勝手に呼んでいるだけ。

もうあそこには何も無い。

あの、湖の下に、全て沈んだのだ。

湖の中へ、その忌々しい戦禍^{つみ}を隠して、綺麗な碧を映すように。

忘れさせるように。

なにもかも、なにもかも。

——だからどうなのだろう。

この女が、あれだけ視ていた初代が消えたということに、どんな感情を持つのか。

彼女の“光”が消えたことに、どんな表情を見せるのか。

先代の“光”が消えた時のような顔を見せるのだろうか。

ただの興味本位も入り交じり、更に言葉を連ねる。

「滅亡といっても私がいるがな、生き残ったのは私を入れて2人だ」

「……」

「お前達の務めも概ね終わった。だから……」

「ふむ、そうか」

と、その一言だけを、淡々と、呟くように言った。

振り向かない。表情は、見えない。

「等々逝ったか。それにしても人は早いな。儂よりも先に逝くとは全く、最後まで恩を返さなかった奴だったな」

その紡ぎだされていく言葉に、何か表れはあるのだろうか？

その紡ぎだされていく言葉に、何か想いはあるのだろうか？

「そうか。あの女の所へ逝ったか。ほう……つまりだ」

そう言って、突然手に持っていたものを全てゆっくりと置き、スツと立ち上がった。彼女の様子を注意深く窺っていたので、咄嗟のことにただただ彼は驚いた。そして一番上の机の引き出しから、一冊の本を取り出した。

「ん」

とだけ言って半ば強引に押しつけるように、彼女はその本を王様

へと渡した。

埃など一切被っていない、しかしだがかかなり色褪せていて、端々に折り目などが見受けられる、小さな本だった。

意味の分からぬまま受け取った彼だが、それを四方八方から観察し、開こうとしたその時、振り子時計がゆっくりと時を知らせた。そして目の前を、いつまでもずつとアンジェリークの周りを舞っていたその一羽の蝶が、振り子時計が鳴った瞬間と同時に、部屋の入り口の方へ不自然に飛んでいった。まるで、何かの前兆のように。

「……ああ……もう、夕方なのか」

その光景を見送った後、本から視線を外し、かなり沈んだ口調で言う王様。その顔はとても暗くまるでこの世の終わりをしているかのような絶望的なものだった。

「はん、ざまーみる」

そんな王様を見てニヤリとアンジェリークはほくそ笑む。

と、その元凶である足音が、扉の奥から聞こえてきた。それはだんだん近づいてくる。そして、ドアから1人の女性が現れた。二十歳前半程か、その落ち着いた雰囲気と貫禄のある趣。

アンジェリーク同様首からさげるはアンティークシルバーのクロスネックレス、優しい銀色の瞳、美しいスノーゴールドの髪を聖帽ヘアバンドで包み込み、白い肌に映えるノルディックブルーのシスター服に身を包んだ清楚な女性。だがそのシスター服はかなり短い丈のスカートで、そこから同カラーのガーターベルトとオーバーニースックスで包まれた長い足がよく見え、凹凸のあるグラマテスな身体がくつきりと目に見え、聖職者であるはずの彼女が着るにはなにと艶めかしいものだった。

「うつひゃあゝお久しぶりですわゝ王子様〜！」

その甘いゆつたりとした声の主である女性が、凄い勢いで王様に突進した。そしてそのまま彼をその胸に抱きしめ、顔を赤らめ天使のような笑顔と声で言う。

「んー！ むー！」

勿論王様は声も出せないし何と言っても息が出来ないので必死に抵抗する。彼女の背は女性の平均よりは高く、そして彼は平均よりもかなり下回っているのだから自然と頭の位置には女性の胸の位置なのだ。至福であるはずのことだが、本来人は胸に理まれると脳内に走馬燈が過ぎるほどの苦しみに襲われる。そしてこれが彼女の毎回の挨拶であり、未だに対処出来ないのが更に苦悩であつた。

「これこれシスター・アマハ。彼が小さいから君が虐めたくなるのも分からんでもないがね。とりあえず殺人者と共には暮らしたくないのだよ」

「んゝ、人聞き悪いですわ、リノちゃん」

といって、シスター・アマハと呼ばれたその女性は渋々と王様から身を離す。直ぐに王様はその青ざめた顔で呼吸を整え、目の前の女性へ叫ぶ。

「こんの戯けがつ！ 死ぬわ！ 私を殺す気か！ そういうのは一人でやっていろ、私を巻き込むな！ だから夜までにここを去ろうと計画を謀った私の苦勞はなんだ！」

「そんな……そんな私めの身体は全ての皆様々に捧げる為にあるのです……いつでもどこでもお触りオーケーですわ！」

「……顔を赤らめるな笑顔で言うなこつちを向くな空気を壊すなどいつか息をするな失せろマジで！」

正直な所いち早くこの輝く笑顔で哀しいことを言ってくる女性との会話を終わらせたい、かなり低レベルな暴言を吐く彼だが、それを読んだアンジェリークによつて更に会話に拍車が掛かる。

「そうだ、黙れ残念シスター若しくはセクハラシスター若しくは18禁シスター」

「18禁?! まさかお二方様はもうそんなお年頃に?! よ、良かつたら私めのお古をこの身と共に、捧げましょう！」

「要らん」

「当に儼らは二十歳なんぞ越えとる」

「し、知らない間に大人の階段をお昇りなさつておいでましたとは

？！　どーしてお教え頂けなかったのですか？！　お二人がアレをアレしてアレしていたなんて、行く行くはこの教会を乗っ取るおつもりですか？！」

「ねえよ」

「とりあえず君はその行き過ぎた妄想癖やらなんやらをどうにかしたまえ」

最初から脱線しているこの状況はなんなのかいいつも通りに王様は考えに耽る。アンジェリークも張本人とはいえ流石に自分の行為を悔いたようだ、顔に疲れが見えた。

顔の高揚は最高潮に達し息も少し荒くなってきたこの女性、シスター・アマハは数年前から見た目も中身も一欠片も変わらない。それはアンジェリークにも言えることで、そしてそれは彼自身にも言えることだが。

「宝石師よ……此奴の頭の中は本当に一体どうなっているんだ……年中春か？」

「ただウザイだけの変態さ。おい、慎めよシスター・アマハ。神前だぞ」

「はっ、これは失礼致しましたわ。神様々へは祈り以外何もかもが許されないのです！」

「その身形自体が冒瀆だろう、いいかげん脱いでしつかりとした正装にしろ」

「脱、げ……？　それはそれはもうお誘いに乗ってOKどんなプレイでもばっちりというわけでございますわね！　良かった、本日ベッドは太陽の光を沢山浴びて準備万端ですわ！　今夜は不眠症決定ですわね！」

何に期待しているのか瞳をキラキラと光らせて言う彼女へ虚ろな目を向けた後、王様はアンジェリークの方を一瞥して溜め息混じりにアマハに言う。

「シスター・アマハ、頼みがある」

「はいなんなりと。幾数十人中最低矮小な私めではありますが、どう

ぞ脱がすなり触れるなり痛めるなり傷つけるなりなんなりと」

「……外にいる、いつものように頼む」

「……成る程お楽しみは夜と言うことですね、承知致しましたわ」
変に成立した会話の中色々スルーされながらも天使のような微笑
みで深く了承するアマハ。なんでこう、性格が異常に残念なんだろ
う。神も匙を投げられ采配を拒絶しているのだろうか。

「それでは行つて参ります」

彼に何か頼まれ、アマハは意気揚々とホワイエの扉から出て行つ
た。なんであんなに楽しそうなんだろう。彼女を見届けた後、再び
王様は背を向けるアンジェリークに向かって話を振った。

「先程私が来た時、何が見えた？」

「何を唐突に聞く。そうだね、晴れた空かな」

淡々と答えるリノ。

——やはりか。

王様は深く溜め息を吐いた。

空だけ。

蒼い空。

あの蒼の猫は、空にもう溶けてしまったのか。

あの蒼の猫は、その愛される毛色いろに、傷つけられているのか。

その空色という変わった毛色を覆い隠す晴れた青空へ、愛される
彼女は隠れてしまったから、

——この女は、やはり今も、先代しか見えていない。

彼の顔は沈んでいった。静かに、小さな変化で。その時である。

かぶ。

かぶ、と。

左耳にくすぐったいというか甘く痺れるような、まるで体中に電
気が走ったような熱い感覚がした。

「ほわあああああ？！」

「にゃん？」

猫が、王様の左耳を噛んでいた。

といつても甘噛み。挨拶ではないが、それだけでも彼は異常なほど硬直し、勿論子供が驚いたような声で、顔を真っ赤にして突然無音で現れた猫へしどろもどろに叫ぶ。

「ま、猫！　わ、わわ私にな、な何をする？！　離れろ！　音も無しに私の前に姿を見せるでない！」

「にゃん。猫は抜き足差し足が得意なんだにゃん。それに初代が言っていたにゃん。王妃様と王様は超絶似てるからこうすると喜ぶらしいじゃんかにゃん」

「母も私も喜ばんわ！　お前、確かに父は畏敬の人物の部類だが可笑しい所は見習わなくて良い！」

「あにゃ？」

彼にとつて、シスター・アマハよりも強敵が現れた。

蒼の髪を翻し、きょとんとしたあと無邪気に笑う猫と王様の後ろで息を切らしたアマハが入室してくる。

「はあ……はあ、あわわわ、猫ちゃん速い……王子……いえいえ、王様、猫ちゃんを連れてきましたわ」

「ご苦労……」

「ちよいと君たち、なにをそんなに急かされているのかね」

王様と叫び声とアマハの声に不機嫌顔で振り向いた彼女に、しばらくぶりの表情が灯った。

アンジェリーク・フォン・ブラウンⅡカルゼンⅡブラッカーの、焦りと理解と困惑の初めての吃驚顔で、息を飲み、青い髪の猫をマジマジと見つめ、初めて見たというように目を見開き、その震える声で彼女は言った。

「……………空色の猫……………」

リズライト・キャット

007 空色の猫（後書き）

この歌は、風の中で流れるように前へ進むような感じだと思います。

ゆりさんの歌声は相変わらず最高ですね！

空色の猫さんには幸せになって貰いたい、GARNET CROWの曲たちはその後の物語というのにもイメージが広がりますね。この歌は歌詞がとっても好きです。

今回も物語とは雑な感じになっちゃいましたけれど、頑張りました。

さてさて『Smiley Nation』& LiveDVDの発売が間近に迫ってきております！

オフィシャルサイトの予告映像で更にテンションが上がりますね！新曲めっちゃ良い歌です、PVも可愛いですし、何より元気が出ますし！

もう聴きまくって歌えるほどですよ。

是非是非ご視聴あれ！ です！

そんでもって聞いてください！

『GARNET CROW livescope 2010+ Welcome to the parallel universe!』の

ジャケットのゆりさん、格好からしてめっちゃ可愛いですよね！思わず惚れ惚れです！

それでは、長々と失礼致しました。

また次回お会い致しましょう！

変わることに、変わらないこと——どっちが大切だと思う？

シヤリ、シヤリシヤリ。

三日月が昇る夜空の下、その小さな帆船はゆったりとその砂漠で囲まれた水辺を走り、弱々しい月明かりと薄緑色のランタンが灯すその中で、3つの影が闇に混ざりながら揺れ動く。

1つはラクダのナディム。

1つは宝船宝。

1つはカーミリアンと魚々子が2人で毛布にくるまり塊となったもの。

「ひーあうあうあう、砂漠の夜は案に違わず格別に寒いね。流石に吐く息は真っ白にはならないけれど、昼との寒暖差が激しいって言うのは体験しないとわからないものだね！ 無知よりも、知識を持っているだけでは、知っているだけでは何の得にもならないとナナコは思うよ、やっぱり自分の肌で感じなきゃ！ ……うう、まだ前向きに考えれば涼しいと言っても過言ではないけれどやっぱり寒いよ……実はナナコは暑さだけでもなく寒さもダメでね、今リアがつついてくれなかったらきつと何も喋らなくなると思うよ！ ああ、夜の女神・ニユクス様！ とつとと世界を巡りに巡ってナナコをその朝陽で温かく包んで！」

「でもナナコちゃん結構元気ね。私は慣れているから良いけれど、外から来た人にとっては大事なものね。そのままなっちゃんに寄りかかっていると良いわ」

「うん、ありがとう、リア！ 本当に、親切で気立てが良い娘さん
って感じだね！」

「だって友達じゃない、当然よ」

「友達……そっか！ 友達かぁ、えへへ、うーれしーな！。ナナコ
は記憶無いから、初めてのお友達って感じかな！」

「え……あー、そういえば！ タカラ君が友達、じゃない？」

「タカラ？ タカラ？ タカラって……お友達なのかな？ どうな
のかなぁ、うむむむ。何か、一緒にいるだけって感じなんだよね。

なんだろう、なんだろう。まあいつか。じゃあ友達って事で！ ね
ーえ、タカラ今何しているの？ 何それ」

「ん？」

と、宝は顔をこちらへ向けたが、カッターを走らせる左手はその
ままだった。彼は相変わらず涼しい笑顔で、その型を削っている。
周りにはその破片や粘土、道具箱が置かれていた。

「あぶな！ タカラ手止めて！ いきなり話しかけたこつちも悪か
ったけれど手を止めて！ 芸術家ワールドが最小限なのは良いけれ
ど、超恐い！ 手え切ったらどうするの！」

「ああ、大丈夫だから気にしないで、慣れてるから」

「見てるこつちが恐いんだって！」

それを聞くと、やれやれというように、彼はカッターを床に置い
た。その代わりに道具箱から、肌の色を取り出した。それを注
意深く見ていたリアはまさかと思い、宝に言う。

「……ねえもしかしてそれ、人の腕？」

ナナコは思わず、ひいっと小さく吃驚の声を漏らした。左腕だ。
爪や筋はないものの指先まで繊細な作りで施されており何故か今に
も動き出しそうで、きつとあれで肩を叩かれたら余裕で恐怖を感じ
るに違いない。綺麗な人間の肌色に近い腕、だが普通の人間のもの
よりもいくらか小さい。

「はい。石塑粘土と木粘さんを混合させて造りました、まだ途中で
すが」

リアの質問に即答し、まるで玩具のように、粘土製とは思えないまるつきりそのまま人から切り取ったような腕の形をしたそれを軽く宙に放り投げてキャッチする。

「タカラ、それ、前から、造っているやつ？」

「うん。球体関節人形の。今削っていたのはスタイロフォームでの展開模型で右足の部分。女の子の身体だから基本的に造りやすいんだ」

震える声で聞く魚々子に丁寧な答える。リアは感嘆の声を上げた。

「へえ、凄いわ。本物の人間とそっくりよ」

「いやあまだまだですよ。この世には不思議なことに、人間みたいに動く人形がいますからね、それに比べたらまだまだです」

「どうして造っているの？」

「大学の課題の1つです」

その質問にも即答した。

「他にもたくさんあるんです。デッサンとか模写とか特に水彩とか有り得ない位に。ほぼ全てのジャンルをコンプリートしなければなりません」

「今学校お休みなの？」

「えへへ。リア、タカラはねえ、優秀すぎて大学から追放されたの！」

「え？」

「ナナコ、違うから」

やはり輝かしくいつの間にかこの世界へ飛んでいったような魚々子へ宝は訂正を入れるが、彼女の夢見がちワールドは広がり続ける。毛布から飛び出て、甲板の上を行き来する魚々子。ナディムが小さく欠伸をした。

「やつぱりさあ、勇者には障害があるんだよ、恋にも障害がないと盛り上がらないしね！ 幼き頃に両親に他界され天涯孤独でこの世を涙と共に生きてきたタカラ少年、最初は平凡な学生だったんだよでもね、ある日空から女の子から降ってきてねそして覚醒すると目

の色が変わるんだよ！ 魔界の悪魔と契約を交わしたから！ 過去に触れられたくない秘密があるもんね。そんでねそんでねー、敵の女の子は、チェンソーがお友達って子なの。普段はおしとやかなんだけど戦闘になると違う人格がこう、でてくるの！ やっぱリラスボスは自分の父を倒した自分の影だよね、だって自分の親父は魔王だもん！」

「まあリアさん、ナナコの冗談と嘘八百で固められた空間は放っておきましょう。それで、もう訊きたいことはないですか？」

再度カッターを持ってスタンバっている宝。これはもう訊くべきではないな、とリアは宝に断りを入れ、魚々子をこちらの世界へ連れ戻しに掛かった。

宝は特に2人を気にする様子もなく、ただただ、その左手を動かした。

語りかけるような眼差しで、1人座って見上げる、その先には――
！。

ずっと、見ていたんだ。

ずっと、壁の片隅で色褪せた、一枚のポスターを見ていたんだ。

8歳の時である。

とある夕暮れ時。

セント
聖ルーテシア芸術女学院、COD学園と並ぶ世界三大芸術施設。

それは、最大級の、未来の巨匠を育てるキャンパス。

それは、きつかけ。

それは、夢を持つ者達の聖域。
サンクチュアリ

それは、夢を見つげるための舞台。

それは、青春の真っ只中。

その、リリイ・ホワイト学院付属景彩美術大学けいさいの学園祭へ、宝船は意味も分からず目的もなく何故かそこにいた。

わけでもなく、その出身者である両親に連れてこられたわけだが、人の波にのまれにのまれ、いつの間にか1人ではぐれていた。幼い少年だったが特に慌てもせず、けれどもまだまだ年相応の落着きなさがあつた。

あどけない表情でキョロキョロと辺りを見渡していると、オレンジに染まる壁にふと目が止まつた。

見上げて、見る。

青空があつた。

青空だつた。

その奥まで向こうまで突き抜けるような、目の醒めるような魔法のような大空が広がっていて、今にも届きそうなその空の下に、一人の少女が居た。同い年位の、すみれ色の髪を翻しこちらへ手を差し伸べている笑顔の女の子。

胸が高鳴つた。

まるでそこだけ世界が違ふと思つた。

そこだけ、その世界が創られた。

だから、その子のミッドナイトブルーの瞳を見つめて。

手を、思わず伸ばしてみた。

届くかもしれないと、

左手を、その子の白い手へ――

「――行けないよ、その世界の中には。絶対にね」

「え？」

思わず声のした方へ振り向き顔を見上げると、一人の男性が、丁度宝と相対位置にある休憩用の長椅子に腰掛けていた。白い杖を頬杖置きに、こちらへ微笑んでいる。けれどもその長い前髪でしか

りとした表情は分からず、ただ若いということだけは分かった。どこか、貫禄がある。

と同時に、その左手はその少女に触れた。

紙の感触がした。冷たかった。温かくなかった。人ではない。

絵、だった。

もつと上を見上げると、小さめに景彩大祭という文字があつた。

どうやらポスターらしかった。

だからとてもビックリした。

まさか、絵だったなんて……。ポスターに描かれているだけの、ただの紙に描かれたはずの蒼い空なのに。

絵の中の少女は、写真みたいに、映像のように、本当に、そこに居るみたいで。

「お前さん、そんな所で突っ立っていないでさ、こっち来て座つたらどうだいよ」

「え？ あ、はい。しつれいします」

言われるがままに、ちょこんと行儀良くその男性の隣に座った。家族以外の人と話すのは慣れていないので少し緊張していた。横目でちらりとその白い杖を見て、おじいさんみたいだな、と宝は思った。そしてその髪色はすみれ色だった。そのまま、絵の中の少女のような。

「あの絵ね、自分が描いたんだよ実は」

唐突にその男性は自身を指さして言う。思わず宝は再度絵を見てそのあとその男性へ目を向け、

「と、とってもきれいな絵だと思います」

そのままの率直な感想を告げた。

「まあ嘘だけど」

「え」

「ごめん嘘、本当は自分が描いた。ちょっと昔にね。誰かが剥がし忘れたんだな、いや、自分の絵が凄すぎて剥がさなかったのかな？ うわお、夕暮れ時のロマンチックストーリーがそこにあるように

目に浮かぶねー」

「はあ」

「それにしても素敵な感想ありがとね」

「……」

読めない笑顔とその言葉で、幼い彼の頭の中は少し混乱し始めている。

初対面なのになんでこんなにおしゃべりしてくるのかな。なんで杖をつかっているのかな。なんでぼくに話しかけてきたのかな。あの絵は……どうやって描くのかな。

絵なのに不思議だなと思った。

どうやって描かれているのだろうと思った。

こんな絵を、描いてみたいと思った。

同じ感動を、してみたいと思った。

「んーとねー、あの絵の中の子は自分の孫なんだよ」

「そうなんですか」

「可愛いでしょう。ていうか、見惚れてたでしょう、空よりあの子に」

「え、いえ、そ、そんなことは！」

「いいのいいの。可愛いから自分もあの子をモデルにしたんだもん。お前さんも可愛いな。子供は良いな、本当に」

顔を真っ赤にしてたどどしく言い訳をする幼い少年に、気にすることなく楽しんでいるかのように飄々と語る男性。

「会ってみるー？ 何もかも可愛いよー。まあ自分の血筋だしー？」

「そ、そうなんですか」

「あ、そーだ。友達にでもなってあげてよ」

「えっ、友達、ですか？」

「またも唐突な提案だった。」

「うん、どうせお前さんにはもう一回出会うから、そんな時にも。超人見知り激しいから友達出来ないんだよねー、一般的じゃないから。自分の絵を良いって思うんならきつと話しが合うと思うよ、う」

ん」

「友達……よ、よろこんで、おうけいたします」

「うんうん。あ、そーだ。あとあの空の描き方も教えてあげる。水彩だからすぐ覚えられるよ、お前さんでも」

「え、あ、ありがとうございます！」

トントン拍子でどんどん話が進んでいくのに懸命についていく宝。その顔は喜樂に満ちていた。

「お前さん名前は何て？」

「ぼ、ぼくの名前は宝船宝です！」

「宝船……ああ、それなら自分の教え子じゃね、あ、へえー。うん、お前さん、いつでもここへ来て良いよ、超歓迎、決まり！」

「い、いいんですか？ あ、ありがとうございます！」

キラキラした純粋な笑顔でお礼を言う宝。対してその男性は、その杖を勢いよく危なげに振り回しながら言う。

「いやいや礼には及ばないこともないってー。うん、お前さんならよく出来上がりそうだなー。将来が楽しみだー。さしあたってさ、自分、お前さんのお願い訊いただろ？ ちょっと自分からも頼みあんだけど」

「は、はい、なんででしょうか！」

「あのね、お前さんは、これから自分の孫に出会って友達になるだろう？ それで、もし彼女が突然いなくなったとしても、必ず見つけて欲しいんだけど」

「え、友達だから、とうぜんできます！ そんなことでいいんですか？」

「うん良いお返事だね。いいねえ子供は本当単純で純粋で、羨ましい限りだ。じゃあ指切りげんまん」

特別でもないことだと思ったので、そしてそれが自然だと思ったので、また子供らしいあどけない笑顔で男性と小指を交わす宝。その笑顔を見て、男性も更に微笑んだような気がした。

「さて、と。じゃあ頼んだよ、たか君。またね」

と、その男性は杖を使ってゆっくりと立ち上がり、背を向けて歩き出した。その背中に向かって、宝は焦って思わず椅子から飛び降り言った。

「あ、あの、あなたのお名前は?!」

「自分?」

その問いにその男性の足が止まる。と同時にこちらへ振り向き、指をこちらへ差した。宝を越えて、何かを指しているようだった。後ろを振り向く。そこには、宝を困り顔で探している両親の姿が映った。

「あ、おかーさん、おとーさん……あ!」

再度その男性の方へ目を向けると、もうそこには先程の彼はおらず、帰り支度を始めている人々が散らばって歩いているだけだった。壁には一枚のポスターがあるだけ。オレンジ色は、いっそう濃くなっていた。

それから1年経った。

それから5年経った。

そして、あの日から10年経った。

久方のリリイ・ホワイト学院付属景彩美術大学で、彼女に出会った、いや、見つけた。

一目で、何故かあの絵の中のあの子だと解った。

腰まで伸びたすみれ色の美しい髪を白いリボンで結い上げ、ミッドナイトブルーの瞳に光を灯し、清楚で可憐な佇まい、凜としたあの絵の面影が残る横顔で、太陽の光で輝く白い花が舞う人々が散らばる道を、せつかくの綺麗な空が見えるのに、雨も降っていないのに、モノクロの軌跡がはしる傘を差して、ゆったりと上品に歩いてくる彼女と、擦れ違った。

……あの子だ……!

運命なのかなと思った。

まさか本当に出会えるとは思えなかった。

手にしている画材を全て落としそうになった。

可愛かったから、思わずそっぽを向いた。

必死に、桜に見惚れているフリをした。

けれども、目が合ってしまった。

僕が彼女の方を見たら、彼女も振り返ってこちらを見たから。

深い青に、捕まったような感覚。

そして、彼女は笑った。

「貴方、宝船宝？」

「え？ あ、はい！」

力んでしまった。

ゆったりとして、落ち着いた雰囲気、澄んだ音色のような声。

話しかけられてしまった。

会話をしてしまった。

どうすれば、いいのだろうか。

しかし宝が思考を巡らせている間に、

「そう」

と彼女は一言、じつくりと上から下まで宝を見つめると、一礼し

て直ぐさまその場を立ち去ろうとした。

まるで興味が無くなったかのように。

彼女の瞳から彼は消えた。

けれども、宝はいつの間にか、歩んでいた。

「あ、あの！」

彼女の足は、

「その傘、僕がデザインしたんです！」

ピタリと止まった。

「あ、あああの、それで、きき君がこの大学の入り口にある大きな白い花の木の絵を描いたん、でしょう？ どうやったら、あんなに綺麗に描けるんですか？ その、君と話がしたいんです……」

景彩美術大学内は、至る所様々な創作作品で飾られ彩られている。

どこへ行っても誰かしらの創った素晴らしき世界がある。自然と調和してそこに在る作品たち。大学内には自然も溢れかえっている。そしてその花緑の中でも一際大きな白い花の木が、大学の西側に聳え立っている。

太く強固な幹のはるばる上空に、満開の白い花。誰でも見上げなければその姿は拝めない。樹齢七千年以上の、母なる大地に根付く大樹。それは、景彩美術大学のシンボルでもあった。そしてやはりこの大樹は幾万人以上もの人々によって描かれている。そしてその玄関口の壁にも、実物大で巨大な白い花の木の絵が咲き誇っていた。縁に入った絵ではなく、直に壁に描かれた、本当にそこで咲いているかのような、白い花の絵。

誰でも最初にこの絵を見る。

誰でも見上げて、感動する。

宝船宝もその一人。

だから彼女は、その意味でも有名だった。人としても、能力でも存在でも、色々で、有名だった。知っていたから。きっと知らなかったら、もう彼女と一生会えないかもしれないと思ったから。

話繋ぎの為の話なのだろうが、思っていることも言っていることも本当で、少しでも彼女のそばに居たいと思ったから。これが吉と出るか凶と出るかまで全く考えず、ただ叫んだ。

「僕と、友達になってください……！」

その手を差し出した。下を向いてしまう。赤い顔を、見られくなかったから。彼女の足がこちらへ向いたのが見えた。

「私と？」

「はい！」

そして、彼女は開口二番にこう言った。

「手、逆」

「あ、わわ、ごめん！」

焦って、いつも通りに左手を出してしまった。何とも失礼な態度を取ってしまった。慌てて右手に換えて顔を上げると……

「……嬉しい」

彼女も下を向いていた。そしてゆつくりと僕の右手を掴む。

とても、あったかい、というか、僕の熱や鼓動の速さが伝わるんじゃないかと心配になったが、そこまでいかず、彼女の右手もとて
も熱かった。

「ねえ」

そして次の瞬間に。

「その……キミが、ボクの持っているこの傘をデザインしたって……
……それって、ほんとおー?!」

満面の笑顔。

満開の白い花のように、突然その顔を上げて、女性らしい朗らかな
笑みから先程とは打って変わって子供のようは無邪気にその目を
輝かせて、興味津々という風に、天真爛漫に、繋いだその手をブン
ブンと振り回す。勿論宝はされるがままに上下へ揺れた。

「うわわわわわわ」

「本当にキミが“光と色彩の魔術師”と謳われる宝船宝なんだね！
じゃあたかくんって呼ぶっ、ボクは、河魚・リライ・ホワイト、
河魚って呼んでも良いよ！ うわあうわあ、ボクのなかで一番の有
名人というか憧れというか凄い人と凄く偶然に出会っちゃったあ！
たかくんこそ、このデザインはあまり見られない稀なモノだと思
うんだけど、どうやって頭の中で想像したの？ どんな辞典にも
本にも載っていないでしょう？ 基本の応用？ インスピレーショ
ンが有り得ない位だし独特なのになんだか色んな類の人達に愛され
そうなデザインだね！ キアロスクーロ素描だよ？ とりえず、
ボクはこの傘を一目見たときから一目惚れしちゃっておじいさん
にお強請りして貰っちゃったんだよ！ それにしても、画壇の楽園、
ボクの庭へようこそ！ ボクにも見える人が来てくれて嬉しいよ、
これからよろしくね、たかくん！」

「あ、はい……河魚さん」

「んー、確かにボクの方が1つ年上だけれど別に敬語なんていちいち使わなくて良いよ。どちらかといえばボクは名前オンリーで呼ばれる方が好きなんだよね！ 河魚で良いよ！ 遠慮し過ぎるのも遠慮しなさ過ぎるのもどっちも嫌いだから、その辺の塩梅は頑張つてね！ じゃあさっそく大学へ行こうよ！ 本当はボク、朝一で帰ろうと思つたんだけど、気が変わったよ、さあさ、はやくはやく！」

こうして僕とキミは友達になった。

こうしてボクと君は友達になった。

心の奥底から、こんなにも人を想つたのは初めてだった。

心の奥底から、こんなにも感動したのは久しぶりだった。

そう、欲しいだけあげるよ。

君が全て持てるというのなら、

そう、欲しいだけもらうよ。

僕は全て、持てるから。

そして、1年が経った。

河魚・リリイ・ホワイトは、僕の目の前から姿を消した。

「あとの鳥が先になるとは、このことだ。いい巨匠になったもんだよね、お前さんは。はあー、やれやれ全く困ったモノだよ。未来が本当になるなんて。どこ行っちゃたのかなあ、河魚は。大体の検討つて言つたら、この世界のどこか、としかわからないなあ」

「本当ですね。貴方の予想はいつも大当たりでとても感銘を受けます。しかし、貴方は解っていて、知っていて何もしないなんて、それには如何せん煩わしさを感じます」

「だからちゃんと頼んだじゃんか、頼つたじゃんか。たか君、怒るのは解るけれどもしょうがないだろう？ あの子は普通じゃないんだって。だからお前さんに色々頼んだんだ。もう一族では、あの子もあの子の中も手に負えないんだよ、この自分でもね。でも大丈夫、

あの子が居なくなつたのは気紛れに近いからさあ、お前さんが嫌いになつたとかこの場所が嫌いになつたとかは絶対に有り得ないから安心してね」

「いえ、1度目の再会をしたときから貴方のことはよく解つていましたから、貴方の言葉は信じられます。けれど、貴方の心は相変わらず信じられません。虎にして冠す、貴方はあの頃から全く変わりませんね」

「いつやーそれほどでもないこともないよ！　ということだまー、2度目の再会を祝して、自分との約束きちんと守つてね……宝船宝君。成績体力共にオールファーストクラス、無遅刻無欠席、滾滾と泉のように溢れるアイデアからの最高傑作の創造、完全無欠で非の打ち所がなさ過ぎな君だからこそ、あの子と友達になつてあの子の世界に入り込んでくれたお前さんだからこそ、頼めるよ」

リリー・ホワイト学院某所。

景彩美術大学からかなり離れた場所に位置する名門。

世界の五本指である大富豪。

その一角に宝船宝は居た。

正確には呼び出しをされた。

その部屋は、広すぎず狭すぎずけれど違和感など一切与えないとても居心地の良い空間、そこでその声と宝は2人だけだった。

しかし宝と対峙する相手の姿は、見えない。位置は判る。そこにいるのは判る、けれども見えない、変な人だった。

「これだけ言つといて寝鳥をさすようだけれど……1、2年の猶予をあげるからこのキャンパスから外の世界へ行ってくれ。けれどもお前さんの才能を持続させる為に度々というか定期的にお前さんに課題を課すからね。お前さんはある意味で自由、ある意味で縛られている、つまりそれは自由つて事なんだけれど。いやあまさかこんなにもお前さんを下に使えるなんて思いもしなかったよ。これからもずっとよろしくね。久方の外の世界であり、お前さんが好きになるうとした、君が嫌いだった世界だけれど、その中で……あの子を

見つけて、連れ戻して、自分を安心させてね、必ず」

「はい」

「絶対無いと思うけれど、サボったり、何か可笑しいことしたり何か命令に背いたり、とりあえず自分の計画を狂わせるような動きを隠れてしたとしても、自分はいつでも視ているからね。あ、何か特に怪しいことはないからね！　ただの監視だから！　疚しいことは何も無いよ！」

「どうぞ。いくら貴方が虎視眈々と僕たちを狙っていても、奪つても、見つめていても、期待していても、何もしてやりませんから。彼女にとって、過去でも未来というモノでも、僕は決して無くしはしないし、貴方にも何一つ渡しません。でも、貴方は一応僕の一歩の恩師ですからね。どうせこの先も視えているのに、貴方は一体何をしているんです？　全く、貴方がその立ち位置ではなかったら、余裕で何万回も殴っていますよ」

「……やばいなー、今日自分だけ誉められるんだよー。くくく、さあ！　光と色彩の魔術師、絶遠の黒、芸術家、宝船宝君。お土産にはそうだね、健康グッズが良いかな。お留守番は任せてくれよ、じゃあいつてらっしやーい！」

そうやって、無邪気に手を振る姿が見えたとき、その姿が彼女と重なって、本当に腹立たしくなった。

自分には出来ないことだから。

君にしか出来ないことだから。

自分は束縛を受けているから。

君は自由を受けているから。

自分はもう諦めようと思っている最中だから。

君はまだ、当分諦めないつもりらしいから。

自分は年だから。

君は若者だから。

自分は忙しいから。

君はいつも暇そうだから。

自分はあの子を愛しているから。

君はあの子を自分より愛しているから。

次々と立て続けに止まらないほどの、彼の聞き分けの良い言い訳を散々に聞いて、軽すぎる身体と軽すぎる僕の心を背負って、彼女の心を、身体を見つけて、彼女の瞳にまた、僕は映らなければ——
そうしなければ——

——彼女の世界は。

「凄いの凄いの、凄いのが来たよ！ リア、あれ何？ キラキラキラキラ、凄い！ まるで、不思議の世界へ迷い込んだみたいだね！」
「砂漠の蝶ね。ということは、喜んでクルーのみんな！ 森が近いわ。だから、砂漠の終わりも近い！」

「うわーお、やたー！ 始まりが来れば終わりもある……終盤にこんなサプライズのノリがあるなんて、ナナコは心の底から感激するよ。苦しみの後には幸せがやってくる、良いことも続かないけれど、悪いことも続かないんだね！ なんだか、これが終わりということに気が付かなければ、いつまでこのきらめきの世界にいられるのにな、超絶名残惜しいよ。ね、タカラ！」

「うん、そうだね」

笑みを浮かべて応える宝。

そしてそれ以上の、とても嬉しそうな、満足げな笑顔。

その光の中で、魚々子はきやらきやらと駆け巡る。ナデームがくる——と気持ち良さそうに鳴いた。

本当に、あの子に似ているなあ。

ずっと聞こえている、その声。

“……きやああー！ 見て見てよ、たかくん！ まるっこくて弾んでおっきーのが行進してきたよ！ 何あれ何あれ、白くて緑でクルクル回ってる！ まるで首の長い金魚のよう、うん、もっと近くで見たいし聴きたいし触れたいし愛でまくりたい！”

子供のように、傘を振り回しながら無邪気に叫ぶあの子。
今日だって、聞こえてくる。

“このボクの溢れまくる好奇心を止められる人なんて、この世に1人としていないと確信するね！”

笑顔が可愛くて、清楚に振る舞う癖に珍しいモノがあれば直ぐに突進していく。

全く、あの子の傍にいと本当に疲れる。

“……ほら、たかくんも早く、来て……！”

そう言っ僕僕の横を駆けていってしまっ

それで、

それで。

彼女は、

彼女の世界は、

赤く、紅く、赤く――。

「……………はは」

宝は力無しに薄く笑った。

ああ、そうだ。

「本当に、悪い子だなあ……………」

思い出したくないのに。

あんな、あんな、

息が苦しくなってきた、

目が重い、

体中から、熱が奪われていくよう……

あんな、あんな、

一面の、あの子の、赤、なんて――。

――ねえ、君はいつからそこにいて、僕の心^{なか}に住みついていたんだ――？

「ターカラ?!」

「……あ、え？」

「タカラ、どうしたの？ 大丈夫？ 汗かいてるけど……もしかするとやっと、最後の最後でこの気候の恐ろしさでも分かってきた……?」

冗談交じりだが、自分の世界から出てきたとても心配そうな魚々子の声に、宝はハツとした。

「ああごめん。大丈夫、全然」

「ちゃんとした言葉喋ってよー、タカラ。全然っていうのは、否定語だよ!」

「うん、大丈夫だよ、ほんと……」
目に見えぬモノ、築き上げたんだ。不確かだけどね、全部在るから。

いつの時代でも似たようなもんだ。

自分の立った位置で正当化していく、醜い人間。

僕は人間だ。

だから君と仲良くなれるかとても不安だった。

君も人間だ。

だから僕と仲良くなれるかとても不安だったろうね。

でも大丈夫。

僕は必ず、君を見つかるからね。

君は必ず、僕を見つけて笑ってね。

だから、待っててね。

世界の果てまで、例え異世界の果てへ、行っても……。

「はい！ ナナコは今から宣言します！ お腹が空きました、だから寝ます！」

「意味が分からないよ……」

「だってさ、この光と星をダブルで寝転んでみるとか至福過ぎない？！ 今にも届きそうな、光だね！」

「うん……そうだね」

「こんな景色を、世界中の人に見せたいね！」

大丈夫だよ、魚々子。

僕かあの子が、いつか、この美しい景色を、世界中の人に見せるから。

僕はまだ描かないけれど。

美しいその考え方は、とても好きだよ。

美しいその生き方が、とても好きだよ。

人間って、綺麗だね。

人間の形をした、人間の心を持った君は、とても綺麗だね。

だから君は、僕の旅の終盤には、絶対、いないから……——せいぜい楽しんでくれると、嬉しいな。

「それではナナコはベッドへ直行します！ おやすみなさい！」

最後まで元気な魚々子へ、リアと宝はそれぞれおやすみの挨拶をした後、走る魚々子を見送る。

それにしても、魚々子は眠くなってくると言葉数が減る。それはそれで静かだよいのだが。

すると、リアが遠くを指さして静かに言った。

「ほら、見てみて。本当に少しだけれど、森が見えてきたわ。青々と広がる森、あれが一応砂漠の終わりよ」

「はい、本当にありがとうございました、リアさん。とても素晴らしい運転でした。この先も良い未来が見えます」

「ふふっ、ありがとう。まあとりあえず、別れの、そして再会出来

るよう祝杯として、盃でも酌み交わしましょうか！」

「お手柔らかにお願いします。それと、ナナコが起きてきても飲ませないでくださいね……面倒なので」

久しぶりに楽しい酒になりそうです、と宝は付け足し、道具などを全て鞆へ片付けながら、しっかりと微笑んだ。

朝陽が昇る頃に辿り着くらしい、海のように広がる青々とした森。そこを越えたら、海へ行けるだろうか。

そこを越えたら、2人はどうなってしまうのか。

その先は、あるのか？

芸術家と人魚は……願いを、叶えられるだろうか？

それはきっと、神様にしか、ワカラナイ。

008 Picture of world (後書き)

はいつ、お疲れ様でしたあ！

この曲はですね、歌詞も勿論好きですが、一番はこのメロディー構成です！

初視聴で心を奪われました。

歌詞が、メロディーが、心の奥底まで染み渡ります、そんな一曲です。

サビ最高です！

そして、とても綺麗な曲だなあと思いました。

流石GARNET CROW！

ライブめっちゃ行きたいです！

暑い日が続きますが、皆さんも毎日ガーネットで楽しんでくださいね！

悩み下手な、悩み上手な僕らは、どうやって生きればいいの？

どんな規則ルールにも、

どんな束縛ルールにも、

どんな自由ルールにも、

耐え兼ねられる、受け入れられる

だったら、生きて良いよね

だってこの世界は、それほどの大きな器を持っているのだから

こんばんわ、はじめまして。

今日も明日も明後日も、いつでも元気、世継よじぎちゃん、だよ！

ちよっと聞いてよ聞いてよ、世継ちゃん本当は初回の第1話から語りまくるはずだったのに、ほら初期の話って、3組とも完全に2人の世界って感じでしょ？

そこで世継ちゃんが何らかを語っちゃったら世界観ぶち壊しじゃん？

だからさ、やっとなんていうかー、今頃っていうか、世継ちゃん初登場だよ！

姿を見せるのはまだ大分先の話だけれど、とにかく世継ちゃんは何か語りたくて語りたくてしょうがないんだよ！

だから自己紹介もせずにベラベラ喋っているけれど、聞いてるフリして聞き流してくれても良いからさ。

とりあえず一瞬でも良いから耳か脳に入れればいいよ。

聞いてくれればいい、無視は一番の敵対行為と見なすからね！

ということで世継ちゃんの本名は大宅世継^{おおやけ}、世継ちゃんって呼んでね。

世継ちゃんも××ちゃんのこと××ちゃんって呼ぶからさ！

かれこれ語り部やってるよ。

主に、世界の歴史を語るよ。

まあ語り部って言っても語彙も文章力も凄く程度が低いから、バラバラの文章を最後は無理矢理纏めちゃうけど。何でも知っているけれどちょっと語るの下手かな。

何でも知っているから言葉はポンポン出てくるけれど前後のくっつきがあんまりないと思う。

これでも語り部の頂点なんだけどね。

そうそう、10こ年下の弟みたいな夏山繁樹^{かざんはんじゅ}っていう奴に世継ちゃんのこと聞いたらきつと笑顔で毒を吐いてくるからそういうのが好きな人は聞きに行くと良いよ、是非に。

ちなみに確か40こ年上の可愛い奥さんもいたからね。

孫もいたよ。

ていうか、大宅世継なんて大層な名前だけれど全く別の人物だから安心してね、読み方から違うしね、繁樹ちゃんも！

同姓同名ってやつだね！

見た目はこんなに可愛い女の子だけれど、手を出したら許さないよ、世継ちゃんの身体じゃないからね！

ていうか世継ちゃん今年で1200歳のジジイだから気を悪くすると思うよ、精神だけの存在だけれど！

自己紹介はこれくらいにして、じゃあ今日は2つ語るね。

××ちゃん、心して聞くように！

えっとね、奇跡の吸血鬼、ていうか可哀想な吸血鬼もときだね、

その金架ちゃんが自身が吸血鬼だということを悟ったのは、遅かれ早かれ彼が9歳の時だった。

今も可愛いけれど、あの頃のちっちゃい金架ちゃんも可愛かったな。

自分のことを人間だと思って、吸血鬼だと知らずにのうのうと生きていたなんて、何とも愚かだね、絶遠の白も言っていたじゃん、無知は罪とね。

ある日いつものように彼は隣の部屋へ向かおうとそこへ続くドアを通り抜けようと、ドアノブを普通に特に力も入れずに回したんだ。するとどうだ。

ドアノブは確かに回ったよ、けれども、一緒にそのドアまでも回してしまっただ。

ぐるんと気持ちいい位にね。

だから周りの壁もバリバリ崩れていったよ、2メートルあるドアは音を立てて床に倒れ、その半径分そこには綺麗に穴が開いた。

まだまだ子供だったし一瞬の出来事だったから、金架ちゃん最初ぜんぜん理解が追いつかなかったんだけれど、ちよっと経って、やっと顔を歪めてね、やっちゃった……みたいなの。

その時は彼は一番最初に何を思ったと思う？

あのね、“戌亥とセカイに怒られる……！”って。

あとね、“戌亥とセカイは、許してくれるかな……”って。

どうしようどうしようってあたふたしてたよ、腕に付けてた銀色のリングがチャラチャラ音を立ててさ、あれ見たときは笑い転げたよ、ほんと可笑しかったー！

子供の感性ってよくわかんないね。

だって何？

6つも年下のまだ3歳のセカイちゃんに怒られるって、何？

どんだけ怖がってるんだよ！

戌亥ちゃんに怒られたような試しがないのに、どれだけ家族に対してビクビクしてんだろーね！

世継ちゃんは亭主関白だったからよく解らないな！。

まあとにかく子供がそんな事態にどう対応したらいいか何て分かるわけ無いんだから、オロオロしていたら戌亥ちゃんが帰ってきてね、あ、セカイちゃんはお昼寝してただけだけど、轟音が鳴り響いたのに起きやしなかったんだよ、どんな夢見てたんだろうね！

何も言わないでただ黙っている金架ちゃんとその有様を見た戌亥ちゃんね、とりあえず気にした様子もなくてね、まあ当たり前行動をするわけだよ。

金架ちゃんの心配ね。

親として当たり前だとも思っただのかな？

全然似合っただけだね！。

それに部屋なんて幾つもあるんだからさ、今その部屋、壁の破損そのまんまで使用禁止ってなってるだけなの、その手の職人に直してもらえよっ！　という話じゃん？

金はあるんだからさ！。

で、突然の馬鹿力にビックリしている金架ちゃんにね、何の感情もない声でね、お前は吸血鬼だって言っただよ。

元から知っていたみたいだね、戌亥ちゃんは。

何それ、じゃあ金架ちゃんが気付かなかったら、バレなかったら、一生言わないつもりだったのかな？

何かそれ、ヤダねー、相変わらずシャンとしない男だ。

まあ別に金架ちゃんも全く気付いていなかった訳じゃあないんだけれどね、いつも以上に喉が渴くんだった。

でね、戌亥ちゃんは金架ちゃんのリングを手を取るとね、効力が切れてきたかって呟いて、色々ジャジャラたくさん銀のアクセサリ類を金架ちゃんにあげて、何時如何なる時もいづれかを付けてるように言っただよ。

何が何なのかは、さっぱり、ということにしておこう。

でも、自分を、化け物である自分を人間だと偽って、黒い羊のように、空色の猫のように、全く、そんな生き方が許されると思って

いるのかな。

あれ、何かなんか意味あつてないかな？

まあまあこれが、金架ちゃんが不良みたいに身体を傷つけるようにアクセサリを付け始めた誕生秘話！

そうそう、世継ちゃんのお話は、本編と関係凄いあるけれど、ガセネタかメタ発言か何かだと思って良いからね。

だめなんだけれどね！

まあそういう運命なんだよ、世継ちゃんが今それらについて語るのは。

そうだ、そう、メタ世界、夢オチって奴。

ごめんねー、時オチと同じ位禁じ手で。

次はねー、セカイちゃんなんだけど、超可愛いよねあの子、超美少女、超恐いけど。

硝子陶器のような彼女。

でも少し叩いただけでは壊れないから、思いつきり叩かないと破壊は出来ないんだよねー。

そんでもって凄く危ないんだ、何がって、身体だよ。

別に人間だよ？

危ないのはその細ささ。

いや、弱さかな。

よくいるだろう、学生達でさ、クラスにめっちゃ細い子とかさ、モデルとかも足細い腰細いスレンダー言うだろ？

男子とかさ、ゴボウとか鉛筆の芯とか呼ばれている輩おるじゃん？その類じゃないんだよあの子の細さは、というか弱さ？

同じ事2回言っちゃった。

前者の細い子達はちゃんと少しでも肉や脂肪がついているだろ？セカイちゃんにはそれが全くないんだよね、ゴボウとかそう例えるならセカイちゃんを使うと良いよ、脂肪とかで綺麗な足に見える彼らと違って、セカイちゃんは正直な所角ばってんの、骨、そう骨！骨の筋が見えるんだよ。

肌はまだスベスベだろうけれど全然綺麗じゃない、気持ち悪いって言ってもいいくらい。

例えるなら拒食症の人みたい。

テレビで見たことあるでしょ？

まああれよりはほんのちよつとは肉はついていてくれどさ。

で、立って歩いているだけでも恐いというか、体育の時間とか普通に彼女はやっているつもりだろうけれど周りの冷や汗半端無いからね。

二の腕とか太もとか何て言うの？

彼女には存在しないと言っても過言ではないよ！

女の子特有の柔らかさも丸い感じもなくなってるね、まるで木で出来た人形みたいだよ。

でもさ、あの子を見ていると大抵思うよ。

生きてるな、って。

それでも顔は全然やつれていないからさ、まあでも身体発展途中にあんなだったらきつとあまり長く生きれないと思うけれど、体質だと思って安心しなよ。

××ちゃんが安心して何も変わらないけれど、少なくとも世継ちゃんの世界は変わるんじゃないかな。

きつと彼女も彼もそれが当たり前となってきたよ、もう。

きつと彼女も彼もそういう運命なんだから仕方がないことなんだよ。

まああんまりこういう話をするとな数名の輩に世継ちゃんフルボッコされる可能性があるからさ、今日はこれでお終い！

あー、楽しかった！

話語るんじゃないのかよ！　っていうツツコミがあるかないかなんだけど、まあもちろん世継ちゃんが語るのはちゃんと物語だからさ。

今まで話したことも、これから話すことも、今話していることも、全て物語。

物語だからさ。

だって世継ちゃんは語り部だもん！

また語らしてね、また聞いてね、気が向いたら××ちゃんの話も聞いてあげるからさ！

世継ちゃんの本編登場を楽しみにしていてね！

何食わぬ顔で初めましてって言うから！

じゃ、世継ちゃんは可愛く去っていくよ、もう朝になっちゃうからね——じゃあ、またいつかの夜に！

「久方ぶりだね」

開口二番に、邂逅一番に、神藤セカイはそう言った。

相も変わらず一言しか喋らない。

ボソッと、儚いというより消えるように。

リン、と鈴が鳴って、それ以上鳴らないように。

本当は、言うつもりなんて更々ないように。

無表情。

というより、人の目を全く見ない。

相手の目でもなく、そっぽでもなく、明後日の方向でもなく、未来でもなく。

感情がないのではなく、本気ではないような。

そんな感じの、ただの義理の妹。

肩の辺りで切りそろえられた烏の濡れ羽色のストレート、吸い込まれそうな黒い瞳、こんな酷暑の中でも汗1つかかない涼しげな顔で、どこか妙に浮世離れた、少女。

ただお洒落には気を遣うらしく、サスペンダー付きのデニムの足下にはパンプス、サ克蘭ボのペンダントが揺れるＴシャツの上には薄手のキャンディー柄のパーカーを羽織っていた。

サイズが少し大きめ、まるで服に着られているようで。周りの夏景色とは似合っていて特に何も無いけれど。

いつも制服姿しか見ていないから、新鮮な感じで、可愛いのだが……。

「……お前、それ暑くね？」

金架の開口一番だった。

本当にそのまま思ったこと。

「そ？」

セカイもそのままを返した。

そのまま思ったことを。

「だってよ、気温じゃねえよ、湿度もあんだぜ？ お前灼けたくないからいつも肌隠してんだよな？ まあこんな格好している俺が言うのもなんだけどよ、なんだこの国、恐ろしいな！ほんとに同じ地球にあんのかよ」

「あるけど」

「今一応は春だよな、なんでこんな、こっちの国の春暑いんだよ」

「シンガポールに春はないよ」

「マジ？」

「一年中夏みたいなものだもん」

「あ、そうだった。四季があるのって日本位だった！畜生、何て度忘れた。なあ、こっちの飯って美味しい？」

「結構イケるよ」

「そっか……オレ、生きていけそうだぜ……」

「良かったね」

浮き沈みある金架とは対照的に、スパスパと言葉を切っていく新藤セカイ。クールドライである。

いつも通りの義兄妹のふれあい、日常会話のようだった。

焦点の合わない、交流。

「てかよ、セカイ、なんでお前ここにいんだ？ 昨日は突然いなくなった上一晩帰ってこなくて悪かったけどよ……」

「昨日？」

「おう。戌亥に連れられて近所の境内行つたる？ 春休み前にアイツはなにをぬかしてんだかつてさ。まあそうすると、なんでオレもここにいんだって話だけだよ。オレの話は良いんだ、よ。お前なんでここにいる？」

「修学旅行だけど」

「……は？ しゅ？」

「言つてなくてごめんね」

修学旅行つて。

修学旅行でシンガポールかよ。

あれ。

セカイの私立校じゃあ、4月に行くもんじゃ……？

「あれ、今…… 3月だよな？」

「4月だよ」

「……………」

「カナちゃん、放浪生活していたから時間軸可笑しくなつたんじゃない。カナちゃんがあの神社で行方不明になつてから、祐に一ヶ月は経っているからね。放浪生活は楽しかった？ まさか海外にまで飛び出しているとは思わなかったよ。いつパスポート取つたの？」

これってかなりの計画的実行だよ。おとーさんももうかれこれカナちゃんのこととは諦めちゃつて、先々週から仕事で北海道行っちゃつたよ。意外と1人つて、寂しかった」

誤解しないで頂きたいのは、しっかりと一言一言の間にオレの沈黙という相槌が入っているので、神藤セカイがこんなにも喋ることはないと心に入れておいて欲しい。

昨日から、一ヶ月も経過している……？

え、ちょ、それ可笑しくね、マジで。
あの短期間で。

一ヶ月。

全然そんな感じはない。でも確かに、妙な違和感はある。

セカイは嘘をつかない。仮にもしそうだとしたとしてもこいつがここに
いるのは可笑しい。

ということは現在は4月下旬。

終業式も入学式も何もかも全部パス。

修学旅行が去年の9月で良かったぜ……。

でも知らない間にオレは高校3年生。

知らない間に、セカイは小学6年生。

だからか？

あのとき、懐かしい感じがしたのは。

あのとき、懐かしく思ったのは。

ああ……やばい。

これは、やばい！

「それマジな話！？」

全ての思案が終わり結論に至った金架は、セカイの目を見て彼女の肩をがっとう掴んで叫んだ。肩が小さいのでガツシリと掴まれ、大きく揺れたセカイは特に身体的な反応はせずけれども呆れた色で言った。

「一体どこ行つてたの、カナちゃん」

「ええっと……」

あの空間。

真っ白で何も無い、何も無い空間。

あの、神社の鳥居を潜り抜けた瞬間、世界が白くなったと思つたら、シルクがいて……。

「あー！ そうだシルク！ 忘れてた！ あとあんのガキ！」

「カナちゃんうるさい」

「あ、すいません……」

「何かあったの？」

「お、おー、あ、そうだ。セカイ、お前さ、何でも良いから服貸してくんね？」

「いいけどなんで？」

「……良いんだ……」。

つくづく意味が分からん奴である。

良かった。まあコイツの方が小さいけどシルクも同じ位だから大丈夫だろ。

しかしどうする。

シルクのことは言わない方が良いと思う。何故だか、言わない方が良いと思う、コイツには。

多分、いけない。

色々と面倒だし。

「オレはあるガキとシンガポールに来ている」

「うん」

「そいつは、黒い服しか持ってきていないから暑くて死にそうらしい」

「うん」

「そいつは、オレとこの世界の破滅っていうか滅亡を食い止めるべく異世界からやってきた奴なんだ」

「へえ」

「アイツがいなくなったら、悲しむ奴がいるんだよ……それにオレは、アイツがいなくちゃ駄目なんだ。セカイ、お前の為にも、この世界を救いたいんだ。なーに、戌亥には心配かけさせねーよ。必ず帰ってくるからよ……」

「おおー」

「てことで服貸してくれ」

「わかった」

あっさりと。

嘘と真実を織り交ぜて即興で作った話を聞いてのセカイの返事だった。

「ついてきて」

自身の部屋へ行くのだろう。クルリと後ろを向いて歩き始める彼女に、金架は色々言いながらついていく。

「いやあ悪いな、時間大丈夫か？」

「今日の出発も遅いから大丈夫」

「そうか」

「はやく行くね」

「なんで」

「朝食会場にルームメイトを待たせているから」

「え、ごめん」

「べつにいいよ」

そして、1つの部屋の前に辿り着く。

そこは、2つ隣だった、先程、金架が出てきた部屋の。

おおぅ……！

何故か金架は身構えてしまった。

「靴もいる？」

「あんの？」

「それ相応は」

「じゃあ頼む」

「待ってて」

セカイはポケットから一枚のカードを出すと、部屋のノブの辺りにカードを宛てる。すると直ぐにロック解除の音がした。そしてセカイは扉の奥へと消えていった。

へえ、カードで開けるんだ。なんかかけえ……シンガポールですげえ。

「はい」

何て感嘆に浸っていると、さほど時間のかからぬ間にセカイが出てきた。ご丁寧なことに紙袋に入っている。それを受け取ると、金

架は二カツと笑って、

「さんきゅーな！　じゃ！」

と言つて、踵を返してその場を離れようとした。

「あ」

だがしかし足は止まった。彼女が呼びかけのような声を思い出したように上げたからだ。

「何？　セカイ」

「あのね、おとーさんがね」

「戌亥？　うん」

「えーっと」

「おう」

「自分の年の数のマ―ライオンのぬいぐるみを……」

「おう」

「買つてきて欲しいんだって」

「へえ、また」

「おとーさんっていくつだったっけ？」

「あー」

うん、わかるわかる。小学生の頃、オレも戌亥の年忘れてたことがある。その頃の子供って親の誕生日すら知らないよな……。まあ、戌亥は俺達と同じ7月生まれだからそれ位は覚えていけるけれど。

「33だろ」

「そっか、ありがとう」

「いやいや」

「えっと、じゃあ、カナちゃんいつ帰ってくるの？」

「1週間位先には」

「そっか。じゃあ私は先に日本へ帰っているから」

今度こそ本当に別れようと、セカイは朝食会場の方向らしい右へ、金架はセカイが去るのを待ってから部屋に入る為、その機会を待つ為左へと進んだとき、また。

「カナちゃん」

「ん？」

「今頃なんだけど」

「おう」

オレの受け答えの後セカイはオレに質問をした。

とある質問。

それは確かにどうでもよいもので、気付かなければ訊かないし気付いてもどうせ訊かなくても良いことだろうと思う。

でもその質問に答えずに、オレはその長く白い廊下を一切セカイの方へ振り向かず走って行ってしまった。

そんな金架の去った後を見つめるセカイ。

彼女にとってありふれた質問だったのだが。

首を傾げていると、後ろから彼女を呼ぶ声がした。

「セカイちゃん」

「あ」

「もう、遅いから迎えに来ちゃったよー」

「でも、ルーム長はどこだーって先生が怒ってて面白かったよー」

「ああごめん」

「いいいいいよ。さて！ セカイちゃんのバイキングは私たちがするからネー、いっぱい食べなきゃ駄目だよー！」

「そっだよー！」

「……………」

笑顔の友人2人に手を引かれ、神藤セカイは何事もなかったかのように、歩を進めた。

ということ、彼女が去ったのを確認して、再び金架は自身の部屋の前に来た。

どうして、彼女はある事を訊いたのだろうか。

“今頃なんだけど”

別に普通なんだけどな。
なんで訊いてきたんだ？
でもって……

“ どうしてカナちゃんは、おとーさんのこと『お義父さん』って
呼ばないの？”

でもって、なんでオレはつい走ってしまったのだろう。
でもって、なんでオレはつい逃げてしまったのだろう。
すっかり過ぎる。
とにかくだ。
服ゲット。
先に、シルクのとこ行っちゃお。

「お帰りと、言ってあげたいところだけど、^{うぬ}汝よ」

「……はい」

「入れて欲しいかね？」

「ええまあ」

「どーしよっかなー」

「なんなんすか……」

勿論シルクが鍵を開けなければ自身のいた部屋には入れない金架。
彼は現在、扉の前のインターホンから聞こえるシルクの声と会話し
ていた。

なんだこの状況。

鍵忘れた奴みたいですね格好悪い。

「あの、服を持ってきたんすけど」

「稀生は？」

「わかりません」

「素直だね」

その声が途切れたかと思うと、ドアのロックが解除された音がした。ドアノブを回してみる。開いた、普通に。中に入る。バスローブに着られているシルクが立っていた、柔らかな微笑みで。

「……あー、どぞ」

「ん。ありがとう、金架。この短時間によくやったね。危うく身共は兎になる所だったよ」

そう言つて、金架から紙袋を受け取ると、シルクは洗面所の奥へと消えていった。戸が閉まる音がする。それを聞くと、金架は思いつきりベッドに倒れ込んだ。乱れているシーツが更に乱れシワをつくる。

なんだかドツと疲れた、朝なのに。

シルクの笑みを見たら、ドツと安心した。

なんだって、自分はこの世界に一ヶ月もいなかったのだから。

今日が4月1日でもない限り、あの懐かしさを感じてしまった限り、窓の外に臨める空と海が、蒼々と、碧々と、変わらず永遠に輝いている限り、それは本当だと、彼はやつの事で確信に至った。

でも一ヶ月もこの世界から外れていたことは、とても多くの人に迷惑をかけたことだろう。

でもセカイはあまり気にしていない様子だった。

そりゃそうだよな、だってアイツは、昔から俺の事キライなはずだし。

だからきつと、目を合わせてくれねーんだ。

……戌亥は北海道か。また遠い所に行ったなあ。

無事だったんだ。

良かった。

……………。

シルクは知っていたのかな。

知ってるか。

アイツは。

アイツは凄いな。

アイツは、何でも知っている、世界最高の魔法使いなんだから……

……

「そんなことはどうでもいいのだよ汝。そんなことより、なんだねコレ。汝は、身共を、ロバート・ワドローかカンザキと、間違えているのかね、ああ、今時の若い子は、この姓名は、知らないか」

と、シルクの言葉が頭上から降ってきた。その口調は相変わらずだったが、閉じていた目を開いたその先に、彼女の微笑みの上の怒りマークを見た。見えた、何故か。シルクがベッドの上で、仁王立ちしていた。

その格好に目を見開く。

セカイの服じゃないことは一目で分かった。

その小さな頭に収まるスタンダードなグレーのワークキャップ、シンプルなTシャツ、真っ白でその中心には黒い文字で、『In its purest form, prayer is conversation!』（もつとも純粋な形式において、祈りとは対話である！）』と記されている。ウエスタン調のネイビーブルーのジーンズが伸びる足下にはホワイトレザースニーカー、最後だけは流石にセカイのものであったが……つかここベッドの上だけ……。

全体的に、サイズが半端なく大きかった。

良く言えば、小柄な体躯を生かして、ファッションとして、大きめの服を格好良く着こなしてる！　って感じ。

悪く言えば、子供が親の服を勝手に着たら大惨事って感じ。

Tシャツは肩からズリ落ちそうでハラハラする。半袖なのに半袖に見えない。ていうかTシャツなのにワンピースに見える。ジーンズなんて下で3回ほど折ったと見受けられる。

可愛い。

でも本当に一種のファッションに見えて、似合ってるていうか力

ツコいい。

これじゃあ一見少年だ。

スケボーでもやってそう。

ただその真つ白な髪の左側に黒く細いリボンが揺れていたの、ドキツとした。

ていうか、その服……………オレのじゃねえか！

「まあ良いけど、ねえ。小さいサイズよりはマシだよ、んー、落ち着くつちやあ落ち着く」

「へえー、それは良かったっす」

「なんで棒読みなんだね」

「いやあーなんでも」

「なんで、目を合わせないんだね」

「や、その、シルクがビツクリでなんやら」

「違う違う、さっき」

「なんすか、さっきってー」

「義妹御と、目を合わせない汝はなんなんだね」

「え」

「目を合わせていないのは、汝だよ、金架」

その言葉に、一気に自身の身が引けた感じがした。

セカイが目を合わせないのではなく、

オレが、目を合わせていない。

オレが、焦点をずらしている。

成立しているようで、成立していなかった、会話。

オレが創り出していた、世界。

「世界はまわると言うけれど、世界の果ては、一体どこなんだろうねえ……………さて」

ぴょんつとシルクはベッドの上から飛び降りた。

「稀生を探しに行くよ、目星はついてる」

でも。

でもオレは別にセカイを嫌ってなんかいないし。

義理の妹だからって、だからって、べつにそんな。

べつにそんな、

いや、そんな。

オレはどこかアイツが嫌いなのか？

どこだ？

いや、そんなことは、ない。

わからない。

わからない。

わから、ない。

「ああそうだ」

そんな金架を更に畳み掛けるように、自然な会話のように、金架の目をのぞき込んで、笑顔で。

「身共は知っているよ。汝が、何故神藤セカイを苦手、いや、恐いと思っっているか。そして、あの狐、緑玉の狐、戌亥のことを、何故、

“父”と呼ばないのかもね」

「！？」

金架は、声にならない声を上げた。

恐いと思った。

初めて彼女を恐れた。

でもそれよりも、違う感情が勝った。

それは込み上げてくるほど笑みが浮かんできて、それは強く思うほど煩わしくなっ

金架の頬は瞳と同じ色に染まった。

なんだそれ、なんだそれ。

……知りたい。

知りたい、知りたい。

知りたい知りたい知りたい！

どうしてオレはセカイが恐いんだ？

どうしてオレは戌亥を父と呼ばないんだ？

どうしてオレはシルクと出逢ったんだ？

どうしてオレはここにいる？

どうしてオレは吸血鬼として生きているんだ？

どうしてオレは生まれたんだ？

何でも知っているんだろ？

何でも教えてくれよ、オレに！

「いいよ」

やった！

「でもね、知るということは、知識を得るということは、どれ程恐ろしいことか知っているかい？」

なんだそれ。

そのとき、金架の世界が反転した。

「12匹の生命が言うわけさ。あれこれ好き勝手にね。

猫は知らなくても良いという。

亀は知る価値もないという。

魚は知りたいという。

熊は知れば世界が歪むという。

蛇は知ることこそが運命だという。

犬は知るだけなら良いという。

蝶は知らなくても知っていても良いという。

狐は知るべきだという。

兎は知ることと知らないのでは違うという。

龍は知れば縮小あるいは要約されるという。

虎は知りたくなくても知ってしまうものだという。

鴉は知らない方が良かったという……。

さて、汝はどのパターンかな？」

動物占い？

「違うよ。確かに、習慣と暗黙の了解から生まれた刷り込みには変わりないとしても、ただね、汝、落……着……いたかね？」

「……あー、うつす」

金架は、シルクの下で息を整えていた。落ち着いた雰囲気彼の

腹に座り見下ろしている。彼が彼女に近づいたとき、シルクはその無駄のない華麗な動きで、どうしたらそんな細い腕にそんな力があるのかと思うくらい、彼を宙へ投げた。その腕を決して離さずに、綺麗な弧を描いて、フワリと彼を着地させた。

「汝、確かに、吸血鬼の真の力を、開花させていないとはいえ、弱いよ、弱すぎる」

「はあ、すいませんねえ……っかしーなー、オレ武道は全部入っているハズだったんだけど」

「それはまた、暇な、学生だね」

そうしてシルクは立ち上がる。あの白い空間で、何事もなかったかのように胡座からスツと立ち上がったときのよう

に。改めて、さあ行こう、金架」

深く被り直したキャップから垣間見えるニヤリ顔、拍子抜けした少年の表情、本心が見えない台詞、真っ直ぐな問い掛け、魔女と吸血鬼、小さな手の平と、大きな手の平、白と。

「ほら立ちやがれ」

「やがれって」

悪戯好きな子供のようにほくそ笑む彼女を見ながら、金架は立ち上がる

として、転けた。

かけられた足によって、シルクの。形通りに悪戯った。この野郎。クク……やっぱり、汝は最高だよ……なんで引つ掛かるのかねえ

……」

「……」

やっと立ち上がった金架に、今度こそ手を差し伸べた。

「悩み下手な、悩み上手な汝らはね、はみだしたままでも良いんだよ。出る杭は打たれるって？ 高木は風に折れるって？ ただの負け犬の遠吠えとも思っていればいい、言わせておけばいい。大切なのは、自分をしっかり持つことさ、周りに流されないことさ。そうしないと、自分で自分を殺しかねないからねえ」

「なんすか突然」

「誰だつて、誰よりも人一倍優れるものがある。誰よりも人一倍劣るものがある。そりや当たり前さ、十人十色選り取り見取りな人間がたくさんいるからこの世界は面白いんじゃないか、だから楽しいんじゃないか、だから苦しくても悲しくても生きていけるんじゃないか、だから愛せるんじゃないか、そう思わないかね？」

「そつすね」

「それに身共は、いまのままの汝が、好きだよ」

「！」

知ることつて、凄いな。

でもさ、知らなくても良いんじゃない？

今を生きれば良いんじゃない？

知りたいとか、知らないといけないとか。

なんかもう、どうでもいいや。

「とつとと、稀生見つけて朝ご飯、食べよう？」

「うつつ、わかりました」

「返事は、はい」

金架は何か重いモノが抜けたようなとても晴れやかな面持ちで、ゆつくりとその大きな手を伸ばし、

「はい、シルク」

その小さな手を、握った。

009 CANDY POP (後書き)

私の中では、GARNET CROW の中でとびきり幸せな曲だと思っ曲たちがあるのですが、

コレはその中の1つに入ると言っても過言ではありません。

イントロから、ああ……幸せな曲キターって気持ちになります。

そしてこの曲は、私が GARNET CROW のCDで一番最初に買った『晴れ時計』の中の収録曲なんですよ！

私にとっては特別に思い出深い一曲です！

大変素敵な曲です。

名探偵コナンで次なるGARNET CROWのOP『Mystery』が流れているらしいですよ。

ご試聴あれ！

ではでは、サイト内蔵しいですが、これからも宜しくお願い致します。

010 雨上がりのBlue

夏の繋がりを感じていたい

ここはまるで、はやい夏がきたみたいだ

おんなじ過去とぎを

ぼくらは共有すいしてしまったから、

もっともっと、

その未来みきのほうへ

手を、伸ばしたくなるのに、

それでも伸ばさない、臆病なキミに……

「うおっ?! びつくりした!？」

自身達が泊まっていた部屋から出て、同じドアが続く白く涼しい廊下から外に出れば、もうそこからは外の世界、ロビーも外と面していて暑い温度と湿度が感じられ、目の前には青々と生い茂る自然林と海が広がっていた。

入り口から(っっていつてもシンガポールのホテルに扉のような入り口など存在しない)歩を進め、坂道を降りると坂の下にはバス停が見え人がまばらにいて、そしてその奥にはもっとそれ以上の人がいた。

そこへ行くと、ホットドック屋やジェラート屋が开店準備をしているにもかかわらず多くの人が賑わっていて、どうしてここに大勢の人がいるのかと言えば、その先にはこの島唯一の水族館があるからだという。

そしてそこへ向かう途中道端にいたのが、蛇使いの男だった。首や目の前の籠でたくさんの蛇がその舌をチルチルと動かし、その胴体をつねらせている。その隣は観光客が首に蛇を巻いてみた、という感じの写真がたくさん貼られている。皆笑顔だが首に巻かれた蛇の身体のように顔が少々青ざめている。勇気ある臆病者とはこのことだ。

金架は開口二番に言った。

「リアルだぁー！」

すると男はニツコリと笑顔になって何かを喋ってきた。

「え、なんて？」

「良かったねえ、金架。汝が観光客だと分かって、世界共通言語である英語を、とても流暢に、使ってくれているよ」

「え、え？」

「今の時代、バイリンガルじゃ駄目だよ、せめて、トライリンガルまで、いけないとねえ」

「え、なに、トライアングル？」

「とりあえず、異文化には触れて、おきなさいな」

「お、おう」

触ってみた。

「おー」

意外とぷにぷにしておすべすべしてる。鱗をスーツとなぞり、蛇がこちらをチラリと見たので慌てて手を引っ込めた。

「シルク！ クリアしたぞ！」

「よかったねえ」

「意外と蛇って大丈夫かも……」

「そうだね。身共の知り合いの蛇さんだつて、見た目と言動でとても恐怖を感じるけれどね、中身はとても繊細で、臆病なんだよ」

「え、何？」

「なんでもないよ。とにかく、人は中身と云えど、大抵の第一印象は、外見で決まるからね、気をつけなさい」

「は、はあ……」

「さて、水族館へ行こうか」

意外と歩くのが速いシルクの背中を、金架は追いかける。小さな筈なのに、その後ろ姿はとても頼れるものが見えた。

「しょうがない。汝が日常でのごまかせない費用を出してくれる代わりに、身共が汝と世界を繋いであげよう」

「あざっす……ていうか、何力国語いけるんすか」

「国の数くらいかなあ」

「……………」

「ほら汝、1人25ドルらしいよ。ホテルで換金したろう」

「あ、はい」

そう言つて、金架はダボツとしたズボンのポケットから、派手なデザインがあしらわれたポールスミスの長財布を取り出した。相変わらず肌触りは最高である。開けると、中には日本円の紙幣が十数枚、そしてシンガポールドルであるカラフルな紙幣も十数枚。そこから青色の50ドル紙幣を抜き取った。小麦色の肌をした係員から笑顔と共にチケットを渡される。それらを素早く財布へしまつと、チケットの一枚をシルクへ差し出した。

「どぞっす」

「ん、ありがとう。それにしても汝、たくさんお金を、持っているね」

「そっすか？ 普通だと思ふんすけど」

「……………」

「ああ……戌亥の実家が、なんか、金持ちみたいっすよ」

そう言いながら入場口へと向かう金架。目の前では、“アンダーウォーターワールドインシンガポール”と英語でかかれた碧い看板が、入場者の好奇心と意欲心を駆り立てるべく頭上に鎮座していた。「それにしてもマジでここに奴はいるんすか？」

「うん。ああ、ほらいた」

「え」

入場口を挟んでシルクの右手が示す方向に、確かにいた。

その猫の尻尾のような黒髪を揺らし、入り口のそばにある大きな水槽のてすりに両手をはりつけ、先程の醜悪な態度には当て嵌まらない、その金色の瞳をキラキラ輝かせて頬を紅く高揚させ、それは嬉しそうに、かなり恍惚とした表情で口をおおいに緩めて、水中を行き交う魚たちを俊敏な首の動きで追っている。

なにかうずうずとしているのが目に見える程、足が浮き足立っていた。

……子供？ いや、猫？ あ……猫、だよな、うん。

シルクの方を見てみた。

彼女は彼を見つめていて、そして、フツと柔らかく笑った。

しょうがないなあ、みたいな。

え？ なにそれなんなのそれ。

それになんか異常にイラッとした。

「おいお前！」

「にやつ?!」

にゃ？

大失踪。

叫んだのとこちらを見て身体全体で吃驚を表現した後、脱兎のごとくその少年は駆けだした。

……………。

「シルク！ アイツ、逃げたぞ?!」

「当たり前だよ、汝。全く、何か言動を起こす前には、目先ではなくその先のことを、今の若者には、考えて欲しいモノだよ」

言葉ではやれやれというものの、態度は断然落ち着いていて目線の先には先程貰ったパンフレット。金架もつられて目を落とす。

「お、すげえ！ 水中の、トンネル！ 80メートル以上だつてよ！ うお?! ピンクのイルカ、だと!? 見てえ超見てえ！ てかシンガポールすげえ！」

「そうだね。身共はただ知っているだけで経験はしていないからね

……どうせ稀生は、ここから出ることは出来ないんだから、ゆつくりまわるとしようかね……あ、駄目だ。朝ご飯を食べねば身共の1日は始まらないよ……」

「バイキングだったら……明日も食えると思うんですけど」

「そういえばそうだったねえ。そうだそうだ、身共は何を勘違いしていたんだろうね、何か衝動のようなものに突き動かされたとき、すぐ動かなければならないわけではないのに、なんでだろうねえ、何か焦っているのかねえ？」

「さあ……」

と、金架が稀生が走っていった方向へ細く目を向けると、彼は氣付いているのかは知らないが、隠れているつもりなのだろうが完璧に見え見えの状態でイソギンチャクの水槽の隣の水色の壁からじつと、その金色の目で稀生がこちらの様子を伺っていた。

戻ってきてるし……。

「シルク、あいつどうすりやあいんだ？」

「放っておけば付いてくるもんだよ、身共はクリオネが見たいからサクサク行くよ」

「あ、ちょ、待ってくださいよ！」

ということ水族館を回ることになった。

あれ？

朝っぱらだというのに水族館の前の人ばかりよりはないが中は人々で賑わっている。

「きたきた！ 80メートルの水中トンネル！ 乗るぞ、シルク、乗るぞー！」

「やれやれ」

「おーすげえ！ でも日本のと比べるとどこか地味だな！」

「……やれやれ」

ハイテンションな金架、笑みを絶やさないうシルク、後ろをチヨ口チヨ口としかめっ面で追いかけてくる稀生。

なんだこの距離感。

動く歩道の上で、金架は四方八方を見渡す。後ろの方で稀生も乗ってきた、泳ぎ回る魚を相変わらず俊敏に、瞳で追いかけている。シルクはゆっくりと首を動かしながら見る。透明な水の中を色とりどりの美しい魚たちが泳ぎ回る。エイが頭上を通り、たまにサメが横をその鋭利な歯を光らせながら通り過ぎる。こちらに付いてくる魚や見つめてくる魚、可笑しな魚がたくさんだった。

「彼らはいいいねえ」

「ん？」

不意にシルクが言った。

「人間以外の動物が、どこまで色んな概念を持っているかは身共でも少し不可解なんだけれどね、彼らは、この水の中の彼らは、泳げばぶつかる水槽の中で、ガラス越しに見る世界、身共達のいる世界の中にいると思ひ込んで、自由に生きていると思ひ込んで、無様に泳ぎ回っている。羨ましいよ」

「？ どこがだよ？ なんだそれ、えーっと、牢の中にいるみたいなノリ？ あー、わかんね！」

「あつはつは、汝はまだ若いからねえ。存分に苦しむといい」
「えー」

「夢い命だと知りながら、どうしてだろうね。グルグルグルグル、その終わりのない問いかけは堂々巡り。いつの間にか生きてて、いつの間にか死んでいるって、嫌だね。気付いたらもう遅いってことじゃないか」

「シルク、左！」

「ん？」

突然金架が叫んだかと思うと、丁度その水中トンネルの曲がる瞬間の角っこに真つ暗闇の空間が広がっており、そこからサメの鋭利

な齒がまるでこちらを狙っているかのように浮かび上がった。

「ひ」

「な、な、な？ 超ビックリしねえ？ あはは、ここ面白えなあ！
なあ、シルク」

「え？ あ、うん」

「シルクがビックリするとこ初めてみたな、新鮮だな！」

「金架、汝ねえ……」

「な？ とりあえず暗い話止めね？ いいよいいよいち何か罪悪感みたいなの被んなくなつて！ シルクはシルクだろ！ 何あつたかしらねーけど、終わったことじゃん、しらねーけど」

「んー……」

と、シルクは困つたように笑つた。帽子に手を当てて、深く被ろうとする。

「まだ終わつては、いないかな」

「お、今度はシルクが困つた。あれ、もしかしてオレ変なこと言つたか？」

「いいや？」

「え、じゃあ……」

金架がシルクに触れようとしたとき。

「よくもシルクを困らせたなー！ それに何変な服着せてんだー！
離れろ、鬼ー！」

「どわあー！」

しっかりと助走してきたようで、稀生が勢いよくジャンプして金架の頭部へローリングアタック的攻撃をかまし、そのまま頭部へへばりついた。当の金架は両目を押さえられ何が起こつたのか理解出来ず反撃さえも出来ない。

「お、おいシルクつ、本当にコイツを勇者にするのか？ あのおぞましい空間から出られたのは良いが、コイツはそれだけの奴なんじゃないのか？ 今も突然触ろうとしたしなー！」

「稀生、とりあえず降りなさい。見上げるの、疲れるんだよ」

「あ！ ごめんよシルク。とうっ」

と、可愛らしい声をあげて飛び降りたのは良いが、水中トンネルの中はオレの身長もあるのですっごく狭いし下は動く踏段だし他の客もいるしで、バランスを取るのに全神経を使ってしまった。危ねえ。

とりあえず水中トンネルのゴールに無音で辿り着き、やっと安定したと思ったらまたきた。

「全く、他の人間もいるんだから、迷惑かけるなよな、鬼」

「いやお前のせいだろ」

「違う！ お前が存在しているせいだ！」

「酷っ?!」

「万が一、いや、億が一、いや、兆が一でもボクはコイツに何も言わないぞ！ 出来ない出来ない、出来るわけがない、お前に！ お前が、シルクの重荷を全てはぎ取ることなんて」

「てい」

やっと稀生は止まった。シルクが稀生の頭上に手刀を打った。

誰から見ても判るような、とても軽く優しい攻撃。稀生はビックリ顔で止まっている。

「いいかげんにしなさい、稀生。今のもさっきのも汝が悪いって言うているだろう？」

「……………」

柔らかい笑みを向けているのにとてもしの通ったその強い言葉に。優しくなれないときや、されない歯がゆさ。

悪あがきの後の、この寂しさは何だろう？

稀生はだんだんと、うりゅーっと、目に涙が溜まってきていた。

コイツ黙ってればほんとにかわいい子供ってそーゆーもん。

「さあ、ゆっくりでいいよ。こういうときは、何て言うんだっけ？」

「うっ……………」

「そうそう。自らの行動に、忸怩たる思いを抱いただろう。さて金架、聞いてあげておくれ」

「お、おう」

改めて稀生と対峙する。流れる雫を精一杯両手でせき止め、本当に先程からの態度を反省したようである。上目遣いで、震える声で、必死にその言葉を発した。

「ごめん、なさい」

目線をずらさず、とても素直な、真実の言葉。

「え、いや……オレも悪かった、かも、だし……」

なにこれすげえ照れる。でも確かに、オレも大人気なかったし……。

…。

どちらにも非はあつたんだよな。

結局、素直なのが一番だな。

「ごめんな、猫」

そう言つて、金架は稀生の頭を優しく撫でた。とても穏やかな顔で。対する稀生の毛並みはとても気持ち良くて、彼自身も気持ち良さそうに唸つて、笑顔になつて、言つた。

「謝つたな？」

「え？」

「あーあ、やつとか！ せつかく僕の方が一歩引いてやつたんだからさ、感謝して欲しいところだよ、全く。猫の耳でちゃんと聞いたぞ、お前が悪かった、つて。さあ！ もっと謝れよ！ 泣いて這いつくばつてボクが許すまで無様に懇願しろお！」

高らかに伸びやかに、相も変わらない可愛らしい悪役顔で周りなど気にせずに叫んだ黒猫の少年。

前言撤回。

「んだとこの野郎お……！」

取っ組み合いスタート。

結局、ほんとに素直が一番だった。

「クリオネって意外と、可愛いねーえ」

そんな彼らのそつぽでは、楽しそうに他人事のようになんだかもう諦めたようにシルクが1人クリオネ観賞に浸っていた。

・
・
・
全てを見て回り、水族館の入り口から出た瞬間、
「暑っ！」

シンガポールは建物内はどこでも冷房がガンガンに効いているが、外は勿論自然のままに極暑の高温多湿、そして。

「え……孔雀！？ え、動物園から逃げ出してきたのか？」

親子らしい大きな孔雀を先頭に小さな孔雀がとてちと付きながら普通に優雅に堂々と道路を横断していた。餌をやっている人さえいる。金架は啞然としていた。

「コレは自然現象だよ金架」

「ばねえっすシンガポール」

「リスも見られるらしいよ」

「みてえ」

シンガポールは確かに大きな樹木や巨大な植物や色とりどりの花と自然に溢れかえっているが、動物も自然レベルなのか。野性的すぎて日本人的にはドギマギ的な展開だぜ……。

ライオンとかは、さすがにいないよな？

「さてと」

歩きながらシルクが言った。

「これから、バスに乗ります」

「どこ行くんだ？」

「昼ご飯を、もとい朝ご飯を取りに」

「どっか行くのか？」

「この近くにね、レジャーランドがあるらしいよ。遊園地みたいな。」

そのピザが格別に美味しいらしい」

「マジか！ 行こうぜ！ 恐ろしく腹が減っているんだ！」

金架も高校生男児である。腹の空きようは凄いのだ。そして稀生は首を傾げる。

「ぴ、ざ？ シルク、それには、タマネギは入っているのか？」

「そうだねえ、入っているやつがあるかもしれないから、稀生には特別に、ツナサンドとかを買ってくれるよ、金架が。これも美味しいらしいんだ」

「へー、お前も使えるもんだな」

「五月蠅えよ猫。ていうか、好き嫌いするなよな」

「なっ。知らないのか愚か者、猫はネギが嫌いなんだぞ！ ボクを殺す気か、この殺人鬼が！」

「うまいこといつてんじゃねえよ！」

「ほら汝達。バスが来るから、とっとと歩きなさいな」

気だるく揺れる3つの影。

日はまだまだ高く、サンサンと大地を焦がし、雲は大きくなっていく。

暑過ぎる。

雨降らねえかな。

金架は密かに思ったが。

傘ねえわ。

ということに気づきその思考を中断させることにした。

稀生を見る。

……そういえばこいつどうやって水族館入ったんだろう……。聞かないことにした。

セントーサ島。

シンガポールの南に位置する人工島で、唯一のリゾートアイランド。

シンガポール観光の定番で、8つの有料施設とミュージカル・フアウンテンなど無料のアトラクション、3つのホテルに、シャレーのような簡易宿泊施設、ゴルフコースにサッカー場、キャンプ場、そして白砂のビーチとバラエティに富んだ島。海外からの誘客を目的に整備された島だが、最近^{シンガポールアン}は現地の人のためのレジャーアイランドという色彩も強くなり、ビーチやシャレー、キャンプ場などは現地の人で賑わっている。

南国気分が滞りなく味わえる夢の島。

「入島料がある代わりに、島での交通費は全てタダなんだ」

「すげえな。それにしてもバスって天井開いてないのな」

「当たり前だよ。どうしてわざわざ、日に当たらなきゃいけないんだい」

だって外国のバスってなんか2階とか吹き抜けじゃん筒抜けじゃん。

風とかあたって超気持ちいいの。

ああいうのって、憧れる。……でも確かに日射しは嫌だな。それにしてもシンガポール、バスの中まで冷房ガンガンだな。

がいこく、すげえ。

「……つかバス速くね？ 恐いんだけど、対向車とか来たらやばそうなんだけど」

「けど、なんだい。シンガポールではそんなのお構いなしでいつでも夜でも、猛スピードだよ。カーブとか楽しいと思うよ、スリルあつて」

「命を大切に！」

てことでバスに乗って移動中。

山の中じゃないのに緑に囲まれているところが凄すぎる。小学生の頃登ったことはあるけれど、今じゃベランダから見下ろすくらいだもんな。

バスの中は混んでいて、いや混んでいるとかそういうレベルではなく、店員オーバーなのにそれ以上人が乗っていて、運転手さんもほんとに特別にお構いなしで、だからこうやってオレがシルクと稀生を壁際にしてオレは他の人の背中に押されている訳なのだけれど。

「こういう場合は本気で、気を抜かない方が良い。スリや盗難なんでも、この国では日常茶飯事らしいらね、人混みを利用するのがスリの常套手段だけれども、外国じゃあ開けた場所でも彼らは狙っているよ。カバンは、リュックとかみたいに背負うタイプではなく肩掛け鞆などにするのなんていうのは、常識だよ」

シルクは度々色々教えてくれる。

旅行の楽しさと怖さ。外国という、言葉も通じず土地勘も湧かないのなら尚更である。でもそんなことを余り考えることなくしっかりと対策した上でやっぱり楽しむのが一番であるらしい。

やっぱり、何でも知っているって、便利なんだなあ。

知らない世界でも色々安心である。

と、周りの景色に少しずつ建物が増えていき、明らかここアミューズメントパークだろみたいな場所に出た。そしてバス停に着いたらしく、バスが止まった。

「タワーハッカーがある！」

搭乗率600%くらい（流石に屋根の上に人はいないが）なんじやあないかと思うくらいにギョウギウ詰めバスから降り、呼吸出来ることに感銘を受ける。

でもバスから急に降りたからその外の暑さでやられそうになる。

20、いや25 は越えてる……いや、30、35 は越えてる！

超真夏日！

温度計や湿度計などなくとも分かるその暑さはずっと変わらぬまま続く。

「ここは夏かよ……」

誰にも聞こえないような細かい声で、金架はボソツと言った。

レンガ造りの道を上がっていけば、その広場の中心に位置する噴

水に向かつて流れる小川の美しさに心を奪われ、そして開けた場所に出たと思えば、頭上には真つ青な空が広がり、雲がゆつたりと多く流れていた。

「色んなアトラクションが意外とたくさんあるけれど、今日はよしとおいた方がいいかもねえ」

「えーなんでー」

「お前は聞いていなかったのか？ シルクが朝ご飯にすると云ったら朝ご飯なんだ！ ボクのおねえちゃんも、朝ご飯は食べないと一日死ぬって言っていたぞ！」

「それなんか違う」

「あれあれあそこ」

シルクが人差し指で指した先にはカフェチックな売店があった。お洒落な白い椅子とテーブルの上にはディープグリーンの日除けパラソル、というセットが幾十にレンガ造りの広場の上に置かれ、鳩が所々を歩き、人々が歓談し、またそれだけでも絵になる。その一角であるテーブルにシルクは向かうと、

「稀生はここで良い子にステイ、わかったね？」

「おう！ 承知した！」

犬かよ。

「シルク座つてろよ。注文だったらオレが」

「ほう。汝はもう英語を熟知したと」

「すいやせんお願いします」

そう言つて、金架とシルクは売店まで歩いて行つた。何か中学生の頃物を買うときの英語はやった気がするのだけれど忘れていたわけではないのだけれどさ。話題変えよう話題。

「稀生つてタマネギ食つとどうなるの？」

「死ぬのかな……？」

「え、なんて悲惨な」

「でも、タマネギ以外は、ちゃんと何でも食べるから逆に、ビックリ」

「すげえ」

「金架も嫌いなモノはつくらず、ちゃんと何でも食べられるだろうねえ？」

「……いやあ、でも戌亥は嗜好食品はいいって……」

「稀生にはあんな大言を、していたのにねえ。何が嫌いなんだい」

「……………紅シヨウガとか」

「……………」

「わ、笑うなよぉ！」

そんなこんなで売店の目の前へ辿り着く。頭上のパネルにはその店？1のピザや季節のピザなどのイベントメニュー、そしてカウンターの上にはオールメニューの写真と英語の詳細と代金が載っていた。普通サイズは11ドルであることは金架にも理解出来た。

「どれでも好きなものを選ぶがいいよ」

「なんつつーか、どれも地味だな……」

「写真写りはね」

「んじゃこれでいいや」

「ほう。これはタマネギ入っていないから、いつか。よし」

適当に指でさした物をシルクが店員に注文した。先払いらしい。

金架は10ドルと2ドルを店員のお姉さんに渡した。お釣りに1ドルが返ってくる。1ドルは金貨のようだった。少しカッコイイと思った。

「れ？シルク達の分は？」

「汝はイタリア人かね。1人一枚なんて多いよ、身共は汝のを、少し分けてくれるだけで、構わないよ」

「ふーん。で、11ドルって日本円で言う高いのか？安いのか？」

「このサイズじゃあね、うわお」

「え、お！」

お金のことは良くわかんないので少し不安になっていたのだが、少しして、売ってるおねーさんが笑顔と共に持ってきたその金架が

選んでシルクが頼んだらしい焼きたてのそのピザは有り得ないほど大きかった。成る程、シルクが分けて欲しいと言ったのに得心行くこれはでかい。でかすぎる。よくわかんないけれど日本円からしたら安いのかなと思ってしまふくらい。

「塩味とコクの効いたアンチョビは、ニューヨークの大好物、相性抜群のオリーブと一緒に、本場の味わいを召し上がれ、ということらしいよ」

のったりとしたシルクの説明通り、薄く焼き上げた巨大な生地クラフトの上には、トマト、アンチョビ、オリーブ、そしてたっぷりのチーズがこれでもかと贅沢にトッピングされており、メニュー表で見たものが嘘なのかというように、生地が薄い分かなりの厚みを帯びていた。じぶじぶとチーズが溶ける音が耳を刺激し、朝から何も食べていないのでそれだけでも食欲をそそる逸品だ。慎重に、稀生が何故かとてもいい子にして座るテーブルへ持っていく。

「おおー、でけえー！」

「すげえだろー」

「何をお前が偉そうに！ そんなことより水もってこい」

「ええ？ 水って……やっぱ買うのか？」

「はい、じゃあ2人とも、水を受け取って。ホテルの冷蔵庫に入っていたものだよ」

と、シルクがその両手にそれぞれペットボトルを持っていた。中身は透明な水。

「え。それどこから出しました？」

「気にしないーい」

「えー」

「シンガポールでは売られている水以外に、安全な水はほとんどない、らしいんだ。それに水分を取らないと、脱水症状になってしまったりしたら大事だからね。はい、どうぞ」

「あ、あざっす」

「ありがとう、シルク！」

稀生の両手に一本、金架の片手に一本ずつシルクは渡した。

「汝はすぐ喉が渴くだろっからね。保険だよ」

「？ はあ」

ペットボトルをそれぞれの傍らに置いて、金架の分だけだと思われていた巨大ピザはしっかりと何等分かにカットされていてみんなに分けることになった。タバスコも常備。これで、昼食もとい朝食の用意は調った。

胸の前に手を合わせ、シルクがこちらを見上げて言う。

「しっかりと手を合わせて、感謝するんだよ。私の栄養のために死んでくれてありがとう、貴方の命を頂きます、とね」

「深いっすねえ……今度投稿してみようかな」

「こんなの、誰でも知っているよ」

そういえばここ最近になって、“いただきます”なんて言っていない気がする。戌亥は常に無言だし、セカイとは時間が合わないし……。

年を取るにつれて、何か色々、忘れていつている気がする。

……。何を年寄りみたいなこと思ってたんだ。人間だから当たり前

……。あ、いや、オレ、人間、じゃあ、ねえけど。

まあ。

どの世界でも挨拶は共通、少し照れくさいけれど、久々に、シルクの真似をして、両手を合わせて、心から言えた気がした。

「いただきます」

「はい、いただきます」

「いただきー！」

「あ！ バカ熱いぞ！」

咄嗟に金架が叫んだのも遅く。

「にゃああああっいいい！」

ピザをパツと皿の上に落とし、稀生が飛び上がる。涙目になって、そのまま手を硬直させていた。

「ねね猫は猫手なんだぞこの野郎……」

「ちゃんと冷ましてから食べよ」

「うっ……ふー、ふー、ふー、ふー、ぱくり」

しっかりと冷ましてから自身で何故か擬音を出して頬張った稀生の不機嫌顔は、見る見るうちに輝かしいものとなった。

「美味い！」

つられて一口食べた金架も感嘆以上の声を上げた。

「ナニコレ超美味えハンパねえやべえまじ美味え！」

「ね？」

シルクがのほほんと少しずつ食べている横で、稀生と金架は半ばがつつくような感じでピザへと手を伸ばす。その間、金架も稀生も良く水を飲んだ。なんと金架は2本目突入、シルクの言っていたとおりで、彼は酷く喉く渴いていたらしい。

最後の一枚……になった瞬間である。

稀生と金架が狙いを定め手を伸ばしたその時、もう一つ伸びた手があった。

ガッ！

体格差ありまくりだが稀生と金架とシルクは3人でその最後の一枚をググググとピザが引き千切れないように力を加減しながら取り合っていた。その最後の一枚のピザは、何故だろう、一番大きいサイズであるように見える。

まさかの展開だった。

「おかわりが欲しかったら、どんどん食べるがいいさ。色々多寡は関係ないよ、なぜかって、金架が払うから」

「ええどうしよう」

「どうしようじゃねえよ。オレの金なんだから遠慮しろ」

「お前また偉そうだあ」

「つたりめえだこの野郎！」

「もーらいつと」

「あ」「あ！」

シルクであった。

「畜生……心理戦とは卑怯だぞシルク！」

「シルクの悪口言うな！」

「勝った者が正義だよ、金架。ありがとう、とっても美味しいよ」
上品に、それでもとても可愛らしい笑顔を見せるシルク。

「うがー！」

「ふんつ。全く五月蠅い奴だ……んん……」

突然稀生がクシクシと目を擦った。そして髪の毛に手を伸ばしたかと思うと凄絶な手の動きで髪を整え始めた。確かに見えている限りなんだか彼の髪を跳ねてきている。

猫だよ。猫だけど。

「お前、食事中に髪触るなよー」

「ボクは猫だからいーんだっ」

「意味分からんわ」

「金架。椅子をもっと、中に寄せなさい。濡れるよ」

「え……？」

急に。

急に周りがザワつき少し暗くなってきたと思ったら。

急に雨が降ってきた。

しかも次第に強くなっていく奴じゃなくて、バケツを引つ繰り返しているような、土砂降りだった。物凄い音を立てて、カラカラだった地面に強く雨を打ちつける。傘があっても意味がなさそうなほどの雨だった。

「お、おお……夕立？」

「違うよ。これが、シンガポール名物のスコールらしいね。シンガポールに来て、雨に、出会わない方が可笑しいと、言われるくらいらしいよ」

「というか名物じゃないけどね、とシルクは続けて言った。そして最後の一口を食べ終える。」

丁度屋根の下にいて良かったと思う。道行く観光客が慌てて様々な屋根の下に避難し、店員達は品物が濡れぬようにとせっせと移動

を行っていた。けれども空は、青かった。

ていうか。

「……涼しい！」

「まあその一言に尽きるよね」

ガッツポーズをする金架にやんわりと合いの手を入れるシルク。

雨とは災難なものだと思っていたが、この極暑多湿多熱帯地獄のシンガポールでは神からの恩恵、恵みの雨である。

涼しすぎる。

寒いくらい。

「あー」

と稀生は唸って先程よりも頻繁に髪を整えにかかっている。確かに、彼の毛は少し逆立っているように見える。雨だからなのだろうか、天然パーマ？

「すげえすげえこれが雨だな？　なんだか妙に髪がもにやもにやする……どうして上から水が降ってくるんだ？　空が泣いているのか？」

子供かよ。子供だけど。

稀生は度々色々シルクに聞く。

彼女の使い魔だという割には結構何も知らない。というか極度の世間知らずだ。猫といえどもこれはないと思う。そんなんでもいいのだろうか？　いやオレも何も知らないけど。

「そう、これが雨。冷たくて、突き刺さるようで、悲しいものや、温かくて、包み込むような、優しいものも雨、とにかく空からの雨滴によって構成されるものだけれど、生存に、必要不可欠な水、しかも飲用に、適した淡水を供給するという、重要な役割をもつんだ。雨が集まってできた水辺、地面にしみ込んだ後に湧き出す、泉や、それらが合流してできる川から、生存に必要な水を摂取する、人間においても同様さ。全てを流して、全てを持っていつてしまう。そして全ては、最後には海へ辿り着くんだ。帰り着く場所があるんだ……そうだねえ、空が、泣いているのかもねえ」

スウ……っとシルクは瞳を閉じてその雨を身体で感じるかのよう
に上を向く。聴き入るように、溶け込むように、パラソルに当たる
雨音が、静かに続く。そして。

「あ」

急に。

急に周りがザワつき少し明るくなってきたと思ったら。

急に雨が止んだ。

しかも次第ではなく、ピタッと。まるで時が止まってしまった
かのように、カラカラだった地面は今では半ばダム決壊状態、その
雲からまた覗いたサンサンの太陽でキラキラと光っている。新鮮な
気持ち心が埋め尽くし、さっぱりとしていて、またすぐに気温が
上がっているを感じた。何か、稀生は楽しそうだった。

「晴れた！」

「そうだね」

「あの雲追っかけたら、またあの雨に会えるのかな？」

「うん、そうだよ」

「なんだか雨上がりの空は気持ちいいな！ 良い体験をした、凄い
世界だな、ここは。あの空間よりはよっぽど良い！」

「大仰だねえ、稀生は」

「なんだかキラキラしたような空間。雨上がりはこんなにも晴れや
かで、清々しくて、気持ちを穏やかにしてくれて、なんだか未来へ
の希望が持てそうで、突き抜けるような空の青が自らの心の中のよ
うで。」

「ボク、またいつかこの雨上がりに会いたい！」

「夢がある……それだけでもいいのだよ、ね、金架」

「えええ何故オレ」

「済まないけれど、もう一つ、行きたい所があるんだ。付き合っ
てくれないかね？ そこで、例の件を話そう」

「なんだかその例の件がどんどん後々になって来ている気がしてた
けれど。」

やっと始まりますか、オレの魔王への勇者の道のり。

……ゲームでしかやったことねえんですけれど。

まあ出来る限り頑張ってみましょう。

「はいじゃあごちそうさま、言って言って」

「ごちそうさま」

「ごっそーさま！」

「はい、ありがとう、ごちそうさま」

「腹一杯！ ありがとう、シルク！」

「いえいえ」

巨大ピザに隠れていたこれまた巨大なプラスチックの皿とトレイとサーブスで空になったペットボトルを売店へ返却し、稀生は大きく背伸びをして、シルクは帽子を被り直し、金架は大きく欠伸をした。そして、歩き出す。

「さっきのバスに乗るよ」

「おー」

機嫌が良いのか、稀生がきゃらきゃらと走っていく。その後を気怠そうに2人が歩く。

「シルク、もう一本水貰って良いか？ 喉が渴いて乾いてしょうがねえ」

「そうだね。汝の場合はしょうがないからね。でも、飲み過ぎには注意だよ、はい、もう一本」

「だからどこから……さんきゅ、シルク」

「いえいえ」

嬉しそうにシルクからペットボトルを受け取る金架。のほほんとした空気が2人の間に流れた。その真ん中でなんだか腑に落ちないというような顔をした稀生が金架にアタック。

「バス停どっちだい」

「あっちだい！ いえーい、夏が近づいてきたぜ！」

なんだか妙に絡み合いながら歩く稀生と金架の姿を見て、シルクはまた、フツと笑った。

「やがて来る気紛れな運命セカイの中でも、それぞれの道に行く。頑張ろう」

誰にも聞こえないような声で、シルクはそう、呟いた。

010 雨上がりのBlue（後書き）

お久しぶりです。

この曲は、夏を迎える歌だなんて思います。

爽やかで、なんていうか恋人というか仲の良い2人で聴く曲、みたいなの……。

私は雨が降ってくると鬱になりますけれど（傘持つの嫌いなんです）、

雨上がりはとてつもなく好きです。

走りたくなるというか歩き出したくなる一曲ですね。

あ、シンガポールではリアルに孔雀いますので。

超ビックリしました。

可愛かったです！

その辺の文化とか国とか齟齬はないかと思われましたがあつたら教えてください。

GARNET CROW、

来月や来春に出るアルバム楽しみ過ぎて毎日が楽しいです。
楽しみですね！

それでは！

011 Secret Path

幾億もの彩光の内に1つだけ、私のために輝く光
幾億もの旋律の内に1つだけ、私のために歌う音

太陽に輝く色とりどりのガラスを
大切に集めていたのに

今はもう、ない

ねえ、君は覚えてる？

何もかも、何もかも、何一つ、思い出すことは出来る？

それは、たったひとつの、あわくてちいさな、せかいとせかいの
せんそうを、おわらせたウタ。

ザアツ。

その緑溢れる公園を、大きく柔らかな風が包み込み、さわさわと揺れる木漏れ日の下、雨の雫が滴り落ちたその先に、小さな王冠を乗せた黒い髪の少年が、小洒落たベンチの上に堂々たるその相変わらず似合わない姿で鎮座していた。

若くして王になった者。

その10歳位の幼き姿。

弱冠20歳の若すぎる王様。

そこはいつもの公園だった。

よく初代と猫と、たまに王妃と、あの王国から遊びに来ていた場所。

何か起こりそうな気がした。

何も起こらない気がした。

湖の下へと沈んだあの王国。

水面下の王国。

昨日の雨はもういない。

けれど、湿った土や石畳の階段の上の青空映す水溜りで、昨日雨があつた事を私は忘れない。

その天からの恵みで、その大地が、いつもの公園の緑や、我々が、潤い育つ。

神からの恩恵。

今日を生かされていることを、我々は忘れてはならない。けれど。

けれども、やはり私は、あの事だけは忘れゆくようだ。

王国が終わった日から、初代の記憶が曖昧になってきたのだ。
誰だっけ？

どんな人？

どんな声？

どんな容姿？

信じられない忘却だった。

消えゆく初代との毎日。

消えゆく父親との毎日。

虹のように消える日々。

泡のように消える日々。

何故だろう。

記憶には――猫しか映らない。

記憶には――猫しか見えない。

けれども立ち止まって少し思い出そうとすれば、だんだん思え返されるのだ。

たまには立ち止まってみなければ、わからないこともあると言うことだろうか。

……私も歳なのだろうか。いや、まさかな。

2日前、あの教会に赴き、そして今日で3日目の滞在。

「まあ狭っ苦しい粗末なお部屋ですが、ご自由にお使いください。
鍵は掛けないで頂けると嬉しいですよっ」

「ほんっとお前は言わぬが花だな」

それだけ言ってからシスター・アマハはあまり姿を見かけない。

あの宝石師、アンジェリーク・フォン・ブラウン＝カルゼン＝ブラッカーに限っては、猫の姿を見た瞬間なんだか妙にドギマギした後、2人の部屋を用意してくれたまえ、とそれだけ言ってそそくさとその仕事部屋を後にしてしまった。

その部屋はダブルサイズのベッドとクローゼットと机と椅子とが無造作に配置されてる殺風景だが小綺麗でさっぱりとした部屋で2人で過ごすには申し分なかった。

ということでは何か泊まることになった次の日の朝には、何かベッドの中に猫とアマハが居たので蹴り出して長い長い説教をし、そして何かもう1日泊まることになった次の日の朝すなわち今朝には、何か起きたときに丁度入室してくるアマハと目が合ってしまった猫がその扉を開けていたのでイラついて蹴り出して昨日よりも長い長い説教をくらわせてやった。

あのシスター、相変わらずである。初代はよくアレを受け入れていたものだ。

というか、アマハと猫、仲良いのか。

というか、猫と部屋が同室だった。

「にゃん？」

2日間、彼女は毎晩呑気にクローゼットの上で伸びをしていた。

あれ、この教会小さいなりに2人分の客室は用意出来るだろう普通。いくらあの宝石師が猫が見えないかもしれないとはいえもう認識出来たのだから客が2人だと理解しているはずだしあのシスターなら尚更……。

……あのシスターじゃないか？

「はあ……」

そして朝食を取った後、なんらかの儀式があるとかで教会を追い出されなればと近くにあるこの公園に赴いた今に至るわけだが。

いつも通りに、広い敷地内を誇る植物公園。色んな類の花が咲き乱れ、色んな類の鳥が飛び交い、噴水やガス灯などが完備されており、誰がこんな堅実にここを整備しているのだろうと思ったらそういえば何年も前に初代が個人で雇った名も知らぬ人物であることに気付く。

……解雇すべきか？

しかし名も知らない所在も分からない知っているのは、初代くらい。笑止の至りだ、まさか初代が知っていることを私が知らないとは。

「にゃっ！ 待つにや、ちょうちょさん！ ちょ、にやーはす神経質過ぎにや

！」

猫はベンチから少し離れたところで蝶を追いかけていた。あの長身に加え猫だからなのか敏捷で飛躍力などが普通の者とは桁違いなため、彼女はどこまでも蝶を追いかける。

空を見上げた。

まだ、お父上様があの王国の初代国王になる前、もうすぐである王国が出来る少し前のことである。

この公園に4人でお忍びで（ていうか初代が仕事をサボるために）、出掛けた時のこと。

「よ、クーちゃん。何してんのそんなところで」

「あ、お父上様」

あどけない顔が、アクアブルーの瞳に覗き込まれる。依然として綺麗な色だ。暖かい陽だまりの中の空の色。猫の毛並みと同じ色。それは整ったブロンドの髪によく似合い、そして金色の小さな王冠があった。お母上様と同じその髪色。

私ののは、黒。カラスのような黒。これは、お父上様方の言わば先祖返りのようなもので。

「だーからー、余分に言葉付けるなって言っているだろー。私のことは、いや俺のことは“父上”と呼ばえとなつ。ひーちゃんのこと、母上若しくはお姫様と呼ぶよーにっ」

「あ、いや、そのような失礼なことは……。……。あの、猫と母上様は？」

「む、様なあ……。まあいいけど。まっちゃんとひーちゃんならね、迷子にしてくれたっ」

「は。と言いますと」

「そーなるよーに操作してきたんだよー。ひーちゃん今頃、俺が突然いなくなつたから心細くて泣いてるんだろーうなあ……。地図も読めないしランドマークらしいモノは何も無い公園だからね。あの子、

泣き顔と困り顔と焦り顔が笑顔には劣るけれど超可愛いからさ、たまにそういう顔にしたいって衝動に駆られるんだよね、これが、好きな子を弄りたくなるってやつだな！」

「今日も輝いておられますね父上様」

とまあ父上様は、明るく爽やかなのは良いが悪戯好きな子供がそのまま大きくなってしまっただけの人である。つまりはこれでも大人なのである。一子の父親でもある。とある国の元王子でもあり、これから一国を統べる王にもなられるお方だ。何も考えていないように実は確固たる目的のもと行動しているその動きはいつも読めない。子供であり、大人であり、大きな人である。

それよりも、こんな凜々しく声に早く声変わりしたい。多分私自身が生変わったらこんな感じなのだろうが、何故いつまで経ってもこのような高い声なのだろう。加えて精悍な目付きも欲しいし、堅忍不拔で強靱な長軀も……これでは、まるで子供のようではないかつ。

「ひょーいつ」

「ええ?!」

と、お父上様は私を軽々と持ち上げると、自身の頭に私の手が乗るように、つまりは肩車の体勢で私を落着かせた。昔から何かとこの人は私を肩車する。

「一緒にひーちゃん捜しに行くぞー」

「あ、あの父上様……前々から言わせて貰ってますが、私18にもなつて汗顔の至りなのですが……あとあの高いのですが、高い、高くて恐い高い！」

「あつはつは！　そこまでひーちゃんとお揃いなのかなー、顔は俺似で中身はひーちゃん似、はあ、超最高傑作・俺とひーちゃんの息子、創始者・俺とひーちゃん！　大丈夫、俺は2人とも永遠に愛してるって。あつはつはつはつ」

高らかに笑うこの男の身長は180に近く、対する息子は130ちよつと。いくら息子が低軀でも肩車は戦々恐々に値する。しかも

シエイム・ボール
彼ら顔が激似なので一見トーテムポールのように、恥ずかしめの柱のようだ。もつとも、名前だけばくって意味的なモノは違うが。

漆黒の瞳には嘗てない長軀の世界が広がるが、高所恐怖症では長身になっても意味がないのではないか、とかそういう可笑しな事しか考えられないほどにかく彼は恐怖の中その小さな手で父親の頭に飾られている小さな王冠を驚掴みすることに専念した。

そして彼、１７らしいが微塵もその容姿にそぐわない小さな子供の姿でただの微笑ましい親子にしか見えなかった。

「ははは、はふえ、母上様ー！ ま、猫ー！」

「はいはい怖がらなーいつ。男の子は意地でも強くなんなきゃー」
この広い敷地内をグルグル散策し、もう一周するんじゃないのつというところで、もう頭の上の彼はその高さにごく僅かだが慣れたまず自身の父親の高さだと言うこと、そんな自身の弱さよりも、早く２人を見つけないという気持ちの方が勝ったのだ。

「れー？ 何で見つからんし」

「……あの、」

「おう、言つてごらん、クーちゃん」

「秘密の道の……中の」

「ああ！ 俺達で最初来たときに見つけて作った秘密基地のあるあの！ 確か——」

「——ここより北西の方角です」

「そっぴや、よりによつて北西か——じゃ、しつかり捕まつてろよー！」

そう、昔、猫が現れる前、この公園は広すぎるとかで集合場所を決めようという話になり、小さなポプラの木を発見してそこに定めようとしたところお父上様がその茂みの奥に小さな小道を見つけた。きつと、多分、この公園の見えるところどこを探してもいないというなら、そこに。

走ること数分。

何の変哲もない、あの小さなポプラの木が垣間見える茂みの前に

辿り着く。木は相変わらず小さいままだ。全く、少しは成長しないと茂みに隠れてしまっただろうが。

「……クーちゃんの問題ないとしても、俺が入れるかどうか」

「見つけたの去年くらいでしょう。杞憂に過ぎます」

「や、このまま」

「降りしてくださらないんですか……?!」
すると。

~~~~~

何か、小鳥のさえずりのような、美しい音色を奏でる音楽器のような、響きの良いハミングのようなモノが聞こえた。

「父上様、声が！」

「あいよー」

ポプラの木が多くなってきた並木道を越えて、サラサラと流れる小川の岩を越えて、あの日より速く駆けたこの小道、沈む夕日、ああ、覚えている。

鳥が惹き寄せられるように、動物が惹き寄せられるように、皆一堂にその場所へ向かっている。

「流石、俺の見込んだ歌姫だ」

そうお父上様が呟いた瞬間。

「う……ふにゅ……ひつく……ひ」

ブロンドの髪を左右で編み込んで白い花を飾り付け、純白のビスチエドレスを纏い、左手に薬指には小さく光るリングと首元には高貴なネックレス、ペタンと座り込んでいるそんな1人の清楚な女性、その中でも一番大きなポプラの木の下で白色の芝生で太陽の光に輝きながら、蝶々と小鳥と森の動物や花に囲まれながら可愛くむせび泣いていた。

「母上様！」

「う……あ、お前か。ど、どこに行っていたか心配したぞ……アイツも勝手にいなくなりやがって……でもな、ここにいる奴がずっと一緒にいてくれたんだっ。心細くなんて無かったぞ。きつとここの

整備をやってくれている奴だな、ありがとうな、お前」

「母上様……それ、ヤギです」

「え？」

深々と、その言葉に似合わぬ綺麗な所作で頭を下げていた彼女だが、確かにその先にはもしやもしやと草を食べるヤギがぼけーっとしてそこにいた。彼女が手を伸ばしてヤギに触れる。モコモコとした肌触りで、明らかに人間ではないことが、彼女の中で立証されたらしい。

「なんと……寡黙な奴だと思ったら。ヤギだったのか……」

「とにかく、危ない輩と一緒にではなくて安心しました。ねえ、父上様。父上様？」

下の父を見ると、彼は微動だにせずその光景をじっと見続け、そしてようやくワナワナと口を切った。

「あれ？ 女神がいる……うわあ、俺は女神を見つけてしまったのか？ あ、いや違うひーちゃんか……うん、間違いない、ただの清纯可憐なひーちゃんだ。ん？ やっぱ俺の目の前には妖精……？」

……妖精は色々見たことあるけれどこれは格別な……あ、違うひーちゃんか。ああ、焦った焦った、あっはっはっはっあれ？ 天使か、天使だ、なんて美しい天使が俺の前に降臨して……あ、いやいや違うわひーちゃんだった。あはははは、俺うっかりー！」

「ウザイわこの凡暗あ！」

殴音。

どかばきぐしゃつみたいなのじゃなくて、単音で、バキィ！

それと同時に発されたその言葉は、先程からあまり上品ではなくぶっきらぼうな、感情だけのモノに聞こえたが、先程からずっとドキドキの、とてもとても、ハッと覚めるような、この世のものとは思えないほどの絶世の恍惚ものの極上の、声の色も音も透き通っていてとにかく綺麗なソプラノ声だった。

そしてその殴音を出したのはその彼女が繰り出した小さな拳が木製のプレートを割った後であった。彼女としては実際、いちいち一

喜一憂していた彼の鳩尾を狙ったのだが間一髪でその者は丁度近くの花壇に立て掛けてあったプレートを自身の身代わりとして出し彼女の自分への攻撃を回避したのであった。

拳を戻すと、涙を溜める彼女はワナワナと言う。

「わわ、わたしを1人にするなどあればと言ったのに……どうしてそんなにイジメてくるんだ、お前、は。そ、そんなに、わたしのことが嫌いなら」

「ああ、大丈夫大丈夫、超好き、マジ好き、大好きだ！俺は世界で一番、誰よりもひーちゃんを愛してるって！……毎日言ってるのに解ってくれないなんて、これじゃあひーちゃんは、俺の事嫌いなのかなー……」

「んな！ち、違う！ちゃんと解っている、一番理解している！そ、そのそんなこと言われたくらいで嬉しいなんて……あ、いや、その、うれ、嬉しいんだよほけええええ」

赤面して叫びながらこちらに飛ばしてきた彼女の拳を受け止め、彼も頬を染めて心底微笑んだ。

「ありがとう、そしてありがとう。俺もひーちゃんと一緒にいられることが一番嬉しいよ、幸せ」

そしてその受け止めた拳を押さえた後手首を掴み自身の元へ引き寄せもう片方の手で腰を抱き、と言うか全体的に彼女を抱きしめた。

「ぎゃー！」

「ひーちゃん照れてるところも可愛いなあー」

「あの一、お二方。楽しんでおられるところ申し訳ないのですが降ろしてからにしてください、死にそうです」

「ん？わたしは立っているのに……何故にお前の声が……頭上から……って、ぎゃー！お前は一体全体そんなところで何されているんだ！危ないから早く降ろされる！」

「はいはい」

「……死ぬかと思いました」

「わー！無事でよかった！」

「2人とも可ー愛ーいーな！」

「ぎゃー！」

「苦しいです、父上様、母上様」

「え、わ、悪い！」

「大丈夫です、母上様、私、笑っています」

「俺も超笑顔になってんよ、触って確認してみる？ ひーちゃん超焦り顔、可愛い。でも笑ってくれた方が嬉しいかな。笑ってよ、ひーちゃん」

お母上様は、その、私が発言するのもアレなのだが、使う言葉はあまり美しくないけれど、声は本当に美しかった。

10億に1人の、その声の持ち主らしいのだ。

だから彼女は、ディー・ハウア歌姫と、そう呼ばれている。

心地良くて、誰をも魅了する、一度聞いたら虜になる、耳が痺れるほどの、ずっと忘れられない声、そんな素晴らしき才という幸福その代わり、彼女は光を持っていなかった。

お母上様は、お生まれになったときから、全盲者であつたらしい。どこにでもある村の、どこにでもいそうなありふれた家庭に生まれ、暗闇の数十年を過ごし、暗い黒の空間を1人で過ごし、ただ、全く全てが暗闇ということではなかった。

太陽が昇れば、明るくなったのが解ると言った。  
灯火が付けば、明るくなったのが解ると言った。  
人間が喋れば、明るくなったのが解ると言った。  
小鳥が鳴けば、明るくなったのが解ると言った。  
草花が香れば、明るくなったのが解ると言った。  
特に、手を繋げば、歌を歌えば、私と会えば、お父上様と会えば、一発で解ると。

花火のように突然光って。

花火のように突然聞こえて。

花火のように突然現れて。

アイツとお前は、わたしの光だからな、と。

お母上様は、相変わらず、綺麗に微笑んだ。

「あー、ひーちゃんと結婚して良かったー！」

「ぎゃー！」

「あれ？ 母上様、猫は？」

「え？ あ！ ど、どこだ猫、ど、どつどどどうしよう！ すず済まない、その、その」

「は、母上様、お泣きにならないで！」

さつきまで一緒だったのだけれど音が全くしなないと思ったたら慌てふためくお母上様に知られて私も慌てふためいた。

「猫なら上だー」

「「え？」」

「じゃーんぴーんぐにゃーん！」

父親の言葉通りに、丁度その容姿通りの王様と同じ年くらいだろう、可愛らしい小さな少女が上から降ってきた。

ピンと立った耳、揺れる長い尻尾、空から切り取ったような色の、空色の猫。

お父上様から聞いた話だ。

ネコの耳と尻尾が生えた一族は、その毛色が、初恋の人の瞳の色に染まると。

ということ、落ちてきた少女は猫だった。

「にゃんばーにゃつくるにゃににゃしにゃにゃめにゃにゃじゅうにゃにゃどー！」

「ぐはっ」

お父上様と連れられてお母上様はサッと避けたので被害はなかったのだけれどだからといって私は避けるわけにはいかなかったのでそのまま受け入れたら、私より小さいにもかかわらず案外強いタックルをくらわされて猫を受け止めた。猫に押し倒された後、猫は元気よく上半身を起こ上がらせ、王子い、だいじょぶかにゃ？ と言い高笑いしながら下で動かない彼の身体をつついていた。

「にゃーはっはっはっ」

「え？　どうなった？」

「ひーちゃんやばいよ18禁」

「ええっ！　ちょ、お前ら何して」

「すゝりすゝり、ぺゝろぺゝろ」

「ぎゃー！」

「だいじょぶだよひーちゃん。くーちゃん生まれたの今の彼くらいだから」

「ぎゃー！」

「鼻濁音がこんなに綺麗に出る人なんて早々いないよね」

「猫。退け」

「あいあい」

クルンと身軽に起き上がった彼女に続き、私もゆっくりと立ち上がり、土を払い落とす。

「全く、私がいなかったらお前は今頃どうなっていたとか」

「にゃ？　にゃあは猫だから別にどんな高さから落ちてても大丈夫にゃん」

「あ」

「まあだもんで、もしも王子が高いところから落ちちゃうかもしれない時用のために、とりあえずおみやあさんの身長抜いといてやつにゃ」

「ふん。抜けるものなら抜いてみるがよい」

「頑張るにゃー！」

普通に小さな子供の喧嘩っぽいものが行われている最中。

「ありやりや、ここから先は行けないのか。管理人、良い仕事してるじゃん」

まだ行けそうな道が続いているにもかかわらず、その先には穴が所々空いたり木々が倒れたりしているので強固なバリケードが張られていた。

それを聞いて、彼女の、彼の手を握る手がぎゅっと強くなる。

「聞いたぞ……戦争の小さな波紋だと。お前の前の国は大丈夫なの

か、これからの、私たちの国も……！」

「うん」

「なっ、そんな軽々しく返事をするな！ 世界的な問題なんだぞ！

お前1人の力じゃ」

「確かにあともう1人か2人は欲しいかもね、魔法使い。鴉のタチちゃんとか狐のいつちゃんとか」

「……あ」

「大丈夫だもん、だつてさあ」

愛する妻にしか聞こえない声で、愛する妻には見えない飄々とした表情で、

「俺は十二世界線の中の12人の魔法使いの1人、“スライトキャット空色の猫”だもんね。世界相手くらい、楽勝楽勝」

へへつと、彼は笑った。

そのあつけらかんとした、全く不安も揺るぎもないその言葉に、

その言葉だけでホツとした若い王妃も、また小さく困って、笑った。

「あー困り顔いい！」

「ぎゃー！」

「ほいじゃあれつつらごーにゃー」

「帰りましょう。お母上様、お父上様」

「おーよー」

「お、お前、わたしの手をもう二度と放すなよ」

「はいよつとひーちゃんつ。あ、おい。いいか——」

と、私がお父上様とは反対のお母上様の手を握ろうとしたら、お父上様が私の名を呼んだ。

「——お前もしっかり、好きな女の手綱は握っておけよ」

「！」

え、は？ え？！

「お、お父上様、それはどういう」

「だーかーらー、父上！ それかパパ！ ひーちゃんはママ！ お前はティーンエイジャー！」

「阿呆かお前は！」

そして2人は、それぞれ、花火のように、突然、光って、消えた。

空は変わらず、雲が泳いでいた。

いつの間にか、オレンジ色に染まっていた。

どんな笑顔、だった――？

お母上様は視えてはいなかったけれど、解って。

私は視えていたけれど、けれど、解らなかった。

「ふむ――」

と、なんとなく猫のいた方をチラリと一瞥すると。

「な」

猫はそこにはいなかった。蝶々もいなかった。ただ、夕暮れ色の水溜まりがあっただけだった。

猫、猫は、どこだ？！

「どこだ、猫！」

緑と青の植物園を越えて、光る噴水を通り過ぎて、大きな広場を突っ切って、小さな茂みに突っ込んで、小さなポプラの木の前を通り過ぎて。

ポプラの木が多くなってきた並木道を越えて、サラサラと流れる小川の岩を越えて、あの日より速く駆け抜けられなかったこの秘密の小道、沈む夕日、そう、この先……！

ザアッ。

風が勢いよく通り過ぎ、ポプラの木をまた一段と謳わせた。

鳥が数羽、太陽の方へ飛んでいくのが目に入る。

あのバーケードたちは取り払われていて、広がる大地が、地平線の先までよく見えた。

眩しい。

ああ。

あのガラスたちはどこに行ったのかと思えば、その木の根元埋められていて、かろうじてキラキラと光っていた。これならば、お母上様でも、ここが一番大きなポプラの木の元だということが解る。

こんなところに、あつたんだ……それにしても、危ない。

そしてそのすぐ近くに、白い芝生の上で気持ち良さそうに陽を浴びながら、猫が寝転がっていた。身体のあちらこちらにポプラの綿毛がくっついて、大樹がサヤサヤと揺れる。昨日は雨だったから、その分羽を伸ばしているのだろう。

「にやつ！ 眩し！ 王様、金色の王冠眩し！」

「猫……お前、よく入れたな……」

「にやんだかにや。でかいのによく入れたかにやって？ にやにゆーとるんにやー。にやあは猫だから、どんな隙間でもお茶の子さいさいにやよ」

「ああ、そうだったな」

というか、なんだか猫のこの方が前から忘れているのではないか。

全く年は取りたくない。

「帰るぞ」

「あいあいになー！」

幼少の頃、肩車の時に恐くて恐くて耐えられなかったあの高い世界が見えなければ、視えなければいいのにと思っていた。

でも、視えていることで、それがどれだけ幸福か、そんな素朴でありふれたことで理解出来た。

だから、今みえる全てを感じたいと、心から思えるようになった。だから。

だから、ここの管理人には……もう少し頑張つて頂こう。なんたって、俸給は前払い＆歩合制だったからな。

「今っ日のタッ飯はにやつにかにやー。にやーんにやーんにやーん、

とつてつーけたよーな、笑うー門にはたにやごころ」

また上機嫌時の猫の、お母上様の真似事が始まった。アマハは料理始め家事全般は期待出来る、それだけ。王様は、走ったりして定位置からズレまくりの王冠をすっかりと被り直した。

その日の帰り道は、相変わらずこの公園からの帰り道は、また心地良いものだった。

で。

教会に入った瞬間、そこに畏まったように並んで出迎えてくれた2人の内の小さい方、祝福の宝石師つまりはアンジェリーク・フォン・ブラウンⅡカルゼンⅡブラツカーはこう言った。

相も変わらず……この言葉を今回だけでどれ位使っているのだろう……とりあえず、相変わらずこの2人の女性も読めない2人であった。

ニヤリ顔で。

「儂らも、猫君らのパーティーに入ることにしたから、しくよろ」

## 011 Secret Path（後書き）

どうも、寒くなってきましたね！

私は早速風邪をひいて瀕死状態です。

なのでガネクロが歌えません悲しいです。

でもガネクロへの愛は尽きません……毎日聴いていますっ。

この曲はもう和やかで穏やかでもう聴いたら聴いたでハッピーな気分になります。

このゆりさんの声の力強さ！ 惹かれます！

最初この話は“A c r o w n”にしようかと思っていたんですけど、

まだ次期早いかないと思ひまして。

またいずれ。

リクエスト投稿したら壁紙が付いてきました。

最高です。

ていうかそんなことならもつと早くしてました。

勿論激選したのはあの曲です。

ではでは、

風邪などにはお気をつけて！

マイコプラズマとか！ 今年オリンピックないのに流行っています！

ではまた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5628r/>

---

WORLD OF GARNET CROW

2011年11月24日21時49分発行